
魔法少女とかマジ笑える

二足歩行犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女とかマジ笑える

【Nコード】

N0912Z

【作者名】

二足歩行犬

【あらすじ】

リリカルな世界に転生した少年の物語。

能力は貰えなかったが、精一杯生きています。今、中学2年生の春が始まる！！

プロローグ（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

かなりgd gdな感じですが、どうか温かい目で見てやってください。

感想をくれると、夕食のおかずが一品増えます。

プロローグ

4月。

まだ寒が残るが、徐々に暖かさを感じるようになる季節。
そして、始まりの季節。

入学、就職、新学期、留年（笑）。

そんな始まりのイベントが、もちろん俺にもある。

西野音耶、中学二年生になりました！！

あつ、あと転生者です。

〽13年前〽

「知らない天井……が、ないだと…！？」

やってくれるな、俺を嵌めるなんて。

まさか天井がないとは。

で、ここどこだ？

「ふお、起きたようじゃの」

死んだじーちゃんに良く似た声がした。

おいおいっ！やめてくれよじーちゃん！！

俺が幽霊嫌いなもの知ってんだろ！？

下半身のダムが崩壊しそうなのを我慢して、恐る恐る振り向くと、そこには良く見知った人がいた。

「あ、あんたは！？」

「ふおふおふお、そうじゃ。わしはk「山本元柳斎重國！！」万象一切灰じ、って違うわ！！！！！」

ノリのいい老いぼれだった。

「で？あんただれよ？」

「神じゃ」

「へー」

「……それだけかの？」

いや、これ転生ってやつだろ？二次創作でよく見る展開だし。だから神が出て、特に何も。

「なんじゃ、つまらんのお」

頬を膨らませてブーブー言ってくる。うはっ、きめえ！！

「で、能力は何くれんの？転生先は？」

「転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界じゃ」

ああ魔王ね。

んで、能力は？

「やらん」

「what？」

「だから、能力はやらん」

なに言ってるのこいつ？

俺に桃色バスターを生身で受け止めろと？

「じゃあ原作介入は？」

「しなければ良からうが」

「それじゃ転生の意味なくね？」

「そうじゃの」

え？こいつ何なの？アホなの？死ぬの？

「まったく、うるさいやつじゃのお。いいか？わしだって能力をやりたい。しかしな、能力を授けると……減るんじゃ……」

減る？なにが？寿命か？

「髪じゃ」

「よし、つるつるになるまで能力寄せ」

「嫌じゃ!!」

「アンタの髪の毛だって、もう疲れたんだ!! 楽にしてやれ!!」

「毛は我と共にあり」

「お前もう帰れ」

「いや、お主が帰れ」

「いやいや俺死んで、ツなんだこれ!？」

足元から黒い何かが、徐々に俺を包んでいく。

「一応、魔導師の子供になるようにしといたからの。感謝するんじゃないぞ」

「あつ、ちよつ、アーーーーー」

黒いものに全身を包まれた俺の意識は、そこでブラックアウトした。

「ふむ、やっぱり能力をやっても良かったかのお。……いや、あや

つにまでやるとわしの髪の毛がなくなるか」

「さて、あやつら3人がどのような物語を見せてくれるか楽しみじや」

第1話 俺の家族。妹はマジ天使（前書き）

聖祥は男女一緒にしました。

何か誤字がありましたら、お教えください。

今日のうちに、あと一話いけるかな？

第1話 俺の家族。妹はマジ天使

現在、午後7時。

枕元に置いた目覚まし時計が、不快になるほど電子音を鳴らしている。

けど俺は起きない。

いや、実際起きているのだが寝たフリをする。

否!! しなければならぬのだ。

その時、扉をノックする音がした。

「……おにいちゃん？」

聞こえてくるのは、甘いロリボイス。

憎き早朝を清清しい朝に変えてくれるAngel voice。
しかしまだ起きない。

「入るよ? ……起きて。学校遅れる」

そう言っただけで俺を揺さぶる。

仕方ない、起きるか。

泣かれても困るしな。

「んっ…おはよう、雪音」

「おはよう」

ニコニコしながら挨拶を交わすMy Angel。

あまりの可愛さに撫でてやると、気持ち良さそうに目を細めた。

朝から俺を殺す気ですか？

「おにいちゃん、お腹すいた」

「ああ、今作るから待ってな」

そう言って雪音に先に降りてもらう。

俺は制服に着替えると、朝食を作るためリビングへ向かった。

「おっす、兄貴！！」

「朝からうるせー」

「兄貴が、テンション、低いだけだよ！！」

リビングで朝っぱらから逆立ち腕立て伏せをしているこいつは、弟の紫音。

別名、イガグリ紫音。

坊主頭の熱血男子だ。

坊主なのに紫音。

坊主なのに紫音。

大事なことで二回言った。

「紫音、シャワー浴びとけよ」

「えー、めんどくせー」

「モテないぞ？」

「なんか無性にシャワー浴びたくなった!!」

風呂場に向かって走っていく紫音。

ふっ、単純な奴だ。

「おにいちゃん、ご飯」

クイクイツと服を掴む雪音。

雪音は俺の妹で、紫音の姉。

黒いツインテールが可愛さを倍増させている。

基本、俺と紫音と両親以外には口数の少ない女の子。

しかし、それがいい…。

ちなみに両親は管理局員をしているため、家には不在。

なので、俺たち3人で家庭を切り盛りしている。

まあ、主に俺だけだけど。

「雪音は何が食べたい？」

「…パン」

「じゃあ、パンと目玉焼きとサラダでいいか」

俺は裾を掴む雪音に名残惜しいが離れてもらい、キッチンへと向かった。

「「いただきます」」

朝食を作り終え、3人で食卓を囲む。

「兄貴、最近たるんでない？」

「いきなり何を言うか、イガグリ」

「イガグリじゃねえよ!! 坊主だよ!!」

「で? 何がたるんでるって？」

「修行だよ修行!!」

あー、確かに最近やってないかも。
時間もあんまり取れなかったし。

「まあ、俺は家族を守ればそれでいいからな」

「……わたし、守ってくれるの？」

「ああ、頼りないかもだけど、母さんと雪音は俺が守るよ」

「……あれ? 俺と父さんは？」

「野郎は知らん」

ガックリしているイガグリを放っておいて、向かいに座る雪音を撫

でようとしたが……出来なかった。

原因はコイツ。

西野家名物、食パンタワー。

見上げるほどの食パンが、俺と雪音の間の壁となっている。

お陰で人形のような雪音フェイスが見えない。

ああ忌々しい。

「しかし、姉ちゃんは良く食べるよな」

「…食べるの、好き」

「俺は雪音の食べる姿が好き」

「……兄貴って本当に姉ちゃんが好きだよな」

「ああ、もう胸が満腹だ……」

「「いってきます（！！）」」

「おう、いってらっしゃい。あ、イガグリ、雪音の弁当落とすなよ」

「これくらい大丈夫だって！！」

そう言うイガグリの手には重箱2つ。

どちらも雪音の分だ。

雪音はかなり食べるのに非力なので、弁当持ちはコイツの仕事。

ちなみに2人は小6と小5です。

学校は私立聖祥大付属小学校。

俺はその中学2年。来年は雪音が上がってくる。
考えただけでも涎が出そうだ。

さて、俺も支度をして行くかな。

第1話 俺の家族。妹はマジ天使（後書き）

出ました、西野ファミリー！！

読みは：

おとや
音耶
ゆきね
雪音
しおん
紫音

です。

紫音とか絶対に付けられたくないですよね？
俺だったらグれます。

第2話 新クラス。魔王はマジやばい（前書き）

今日で3話。

頑張った俺。

そんな俺には一品おかずが増えます。

ガーリックトースト

神の作りし聖なる食物。

美味でした。

第2話 新クラス。魔王はマジやばい

着きました中学校。

え？展開が早い？だって登校しただけだよ？

まあそんなこんなで、俺は掲示板の前にいる。
目的は新クラスを確認するためだ。

さてと、まずは2－Aから：

秋本：

川井：

立川：

内藤：

ぬこ：

……ないか。B組は：

あああ：

エロ：

鬼山：

クレス：

屍人：

豚々：

ぬこ360：

……突っ込まんぞ。Cは：

アリサ：

海堂：

高町：

月村：

西野…

フェイト…

八神…

ふむ、どうやらC組のようだ。

しかしなんだ、原作キャラ纏められているな。

まあ、関わらなければいいだけだけど。

桃色バスター喰らいたくねえし。

で、着きました教室。

知ってる奴いないな。まあ、元から友達なんていないけどね、ハハ。

俺は広く浅くの関係を望んでいるのだよ、ワトソン君。

今、水深0メートルくらいだけど。

あ、原作キャラもまだ着てないようだ。

俺はMYデスクの場所を確認して席に着いた。

場所は窓側の一番後ろから二番目。まあまあポデーション。

俺は席に着き、鞆からある物を取り出した。

ふむ、朝はこれがないと。

（なのはside）

今日から新学期!!

わたしは新しい出会いを楽しみにしながら、通学路を歩いていた。

「おい、なのは」

「あ、アリサちゃん!!」

「おはよう、なのはちゃん」

「アリサちゃんとすずかちゃん、おはよう」

「おはよ。それにしてもなのは、なんか楽しそうね」

「うん、だって新しいクラスだよ？楽しみに決まってるよ！」

「いっしょのクラスになれるといいね」

「うん!!」

わたしは親友のアリサちゃん、すずかちゃんと共に学校へ向かいま
した。

「なのはっ」

「みんな、おはよ」

「フェイトちゃん、はやてちゃん」

学校に着くと、校門前にフェイトちゃんとはやてちゃんがありました。どうやら、わたし達を待っていてくれたみたいなの。

「さて、クラス分けを見にいきましょう」

アリサちゃんの一声で、私達は学校の掲示板へと向かいました。

「うわっ、人が多いわね…」

「しょうがないよ、新学期なんだし」

掲示板前の人ごみを見て、アリサちゃんは凄く嫌そうな顔をしました。

わたしもあの中に突入する勇気はないの…。

「おっす、みんな」

と、わたし達が困っていると人ごみから1人の男の子が近づいてきました。

「海斗くん、おはよう」

「おはっ、今日もええ髪しとるのお、すずか嬢」

「あんた、すずかを口説いてんじゃないわよ!!」

「ツンデレええわぁ、君のデレを見せてくれないか（キリッ）」

「きもっ!!」

「口の端がにやけとるよ、海斗君」

「はやて嬢か、……特になし」

「あ、ちよつとカチンときたわ」

「は、はやて、抑えて抑えて」

「フエイト嬢、結婚してください!!」

「ええええええ!!」

「フエイトを困らせんじやないわよ」ドゴッ!!

「ぐはぁ!!」

アリスちゃんに殴られた海斗君は、きれいに半円を描いて吹っ飛んだの。

痛そお。アリスちゃんも手加減しないなあ。

「大丈夫、海斗君？」

「…な…なのは嬢…すまんのお…」

海斗君は差し出した手に掴まり、なんとか起き上がりました。海斗君は生まれたての子鹿のように、足をプルプルさせてる。

わ、笑っちゃ駄目っ、耐えないとっ。

「……なのは嬢」

「なっ、なにっ？」

柔らかな顔でわたしを見つめてくる海斗君。
けど下を見ると、足がプルプルしてるのっ。

「ありがと、なのは嬢（ニコッ）」

ゴッ！！！！！

「」「」「あっ」「」「」

何故か私の拳が、前に突き出されていました。

「……なのは嬢、ジムに通ってみる気はないか？」

「うう、ごめんなさい」

あの後、復活した海斗君の額には大きな青あざが出来ていました。

「で、でもねっ、なんか海斗君の笑顔を見ると手が勝手に…」

「」「」「わかる」「」

「全員同意!?! まあええけどさ」

「そんなことより、クラス分け見に行かない?」

「……フェイト嬢って、偶にワシの扱いがひどい」

しょうがないよ、海斗君だもん。

わたし達が掲示板の前に移動しようとする、今度は別の男の子が駆け寄ってきました。

「おはよう、なのは(ニコッ)」

「あ、うん、おはよう」

来たのはクレス君。

キレイな金髪と中世的な顔立ち。

向けてきた笑顔は、なんだか絵になります。けど、わたしは何故か寒気を感じました。

「なのは、今年は違うクラスだね……」

「やっ……!!」

「や? どうしたの、なのは?」

「や、やだね? べ、別のクラスなんて」

「そうだね……」

危ないの…。

思わず喜びそうになっちゃった。

クレス君は寂しそうだけど、わたしはちょっと嬉しい。

だって、クレス君ってちょっと苦手だから。

「でも、なのはは他の皆と一緒にだから安全だね。僕も昼休みとかはC組に行くから」

「え……。あッ！？うん是非！！」

昼休みも来る気なの…。

と、わたしが気落ちしていると、海斗君がクレス君に声をかけました。

「あんさん、ワシは何組やった？」

「なのは、何かあったら呼んでね？直ぐに駆けつけるから」

「あ、うん」

「なあなあ、だからワS「それじゃあ、そろそろ行くね？また後で」

クレス君はそう言って、校舎へと歩いていった。

無視されていた海斗君は、へらへらしながら「もう慣れたわ」と言っている。

海斗君かわいそうなの。

そういうところが苦手なんだよ？クレス君。

「ほんま空気読めへんな〜、クレス君は」

わたし達はクラス分けを見に行かず、教室へ向かった。

海斗君はクラス分けを見に行くらしい。

わたし達が確認しに行かないのは、単にネタバレされたから。

はやてちゃんも不満みたいなの。

他の皆も不満そうな顔をしている。

そうだよ。クラス分け確認するのも楽しみだったんだもんね。

「で、でも、またみんな同じクラスでよかったよ！」

場の空気に耐えられなかったのか、フェイトちゃんがわたし達に言った。

「そうだね、みんな1年間よろしくね」

「そうね、こんな空気じゃやってられないわ。みんな、またよろしく」

「よろしゅうなあ」

「うん、また楽しい1年になるよ、きつと！」

私達は新たな1年に期待を寄せて、教室へと向かった。

教室に着くと、みんな自分の席を確認して席に着く。

わたしの席は窓側2列目の、後ろから2番目。

斜め後ろ、窓側最後尾には海斗君の名前があった。

同じクラスなんだ、海斗君。

他の皆は少し席が離れている。

わたしは自分の席に着くと、隣に目をやった。

どうやら隣は男の子ようだ。

席表には西野って書いてあったから、西野君か。

隣の席なんだし、仲良くなれるといいな。

わたしは西野君に話しかけようとしたが、一瞬踏みとどまる。

理由は、西野君の真剣な表情。

西野君は手に持ったファイルを真剣に見つめていた。

勉強かな？真面目なのかもしれないの、西野君は。

でも『極秘ファイル』って、なんなのかな？

知られちゃいけない勉強？

うう、気になるう。

わたしは意を決して話掛けようとするが、またもや踏みとどまる。
というよりは、絶句して固まった。

だって、西野君の頬に一筋の涙が出来ていたから。

なんで泣いてるの！？

ううう、内容が凄く気になるのっ！！

「あ、あのー！！西野君ー！！」

「……………」

あ、あれ？もしかして無視された？
いや、きっと集中して聞こえなかっただけなの！！

「西野君！！」

「……………」

ま、また！？

む、無視するなんて酷いの！！

「に、西野君！！」

わたしはお話するために、西野君が持っているファイルを取ろうと
した。

そうすれば、話してくれるかもしれないから。

そして、ファイルに手が触れそうになった瞬間…

「触るな小僧ッ！！！！！！！！！！」

「にゃっ！！！？？」

突然、大きな声を発した西野君に驚き、わたしは尻餅をついてしま
った。

な、なんなの！？突然！？

「小僧…貴様は罪を犯そうとした…」

「わ、わたし、小僧じゃな「だまらっしゃいッ！！」ひい！！」

まるで、幽鬼のように立ち上がる西野君。
わたしは恐怖のあまり動けなくなっていた。

「これはなあ、貴様のような薄汚れた小僧が触れていいものではない!!!!!! 言わば聖典なのだ!!!!!!」

「よ、汚れてないもん!!! 毎日お風呂入ってるもん!!!!!!」

「身体ではない!!! 心だ!!!!!!」

「こ、心!?! よ、汚れてないよ!?! たぶん」

「汚れてるねッ!!! 風呂のタイルのカビくらい!!!!!!」

「カ、カビ!?!」

「ああ、そうだ。お前の心は根が深い汚れなんだ。落とせないくらい深いな」

「わ、わたしは汚れてなんか...」

「いやッ、汚れてるね。人の持ち物に無断で触るとか、汚れている証拠。しかも人が見ている最中に」

「そ、それは西野君が...」

西野君が気づいてくれないからだよ...。

「仕舞いには人のせいかな? とことん汚れてるな、お前」

「よ…よごれてないよお…」

「いや、きつとお前の心は茶色だ」

「き…汚なく…な…い…」

なんだろう、すっごく苦しいの…。

なんでわたしがここまで言われなくちゃ…。

「汚い。そして席に着け。なんか目立ってる」

「きつ…グス…たなく…んっ…ないよお…グズツ…」

「ちよっ、泣くとか。しかし俺は動じない。きつと俺の心は鋼で出来ていた。そして去れ小僧、…いや、タイルの汚れ」

「ふえっ、ふええええええん!!」

side out

なんか、目の前の女が泣き出した。

お前が悪いのに何故泣く？理解不能だ。

って、良く見ればコイツ高町なのはじゃん…。

俺は原作キャラを泣かしたのか？

やべえ、チートなしで勝てたよ。

「あんた、なのはに何したのよ!!!!」

ここで現れるお仲間達。

全員、俺に敵意の視線を向ける。

って、なんか男混じってね？

こんな奴、原作にいたっけ？

「なのは！？大丈夫！？」

「ふえ、フェイトちゃん…」

「お前、なのはに何をしたッ！！！」

今にも掴みかかってきそうな金髪ちゃん。

あれ？なんで俺が悪い事になってんの？

「俺は悪くない。勝手に泣いたのもそれだ」

「ちょぉ～まで、女の子をそれ呼ばわりか？」

「それ、悪人」

俺は高町を指差す。

だって本当だよ？

俺、悪くない。

「悪人って！？だから、なのはが何したって言うのよ！！」

「ちょお落ち着き、アリサちゃん」

狸がどうにかアリサをなだめている。

「で、なのはちゃんが何したって？」

狸は静かに訊いて来るが、絶対切れてる。
だって目が据わってるもん。

「そうだな…よし、その男子」

「なんや？」

「お前の大事なもんは何だ？」

「そら、エロ本や」

「エロ本か…やるなお前…。じゃあ、もしエロ本を見ている時に母親が入ってきて、エロ本を強奪したら？」

「切れる」

「だろ？こいつはそれをやろうとした」

「なッ！？ア、アンタが朝からそんな物、読んでるからいけないんじゃない！！」

「エロ本がそんな物とはなんじゃ！！」

「海斗君…少し黙ってよう？」

「あ……ご、ごめんなさい…」

「エロ本は例えだ。つまり大事な物を取られそうになった。説教したら泣いた。お前ら登場」

「え？大事な物取ろうとしたって本当なんか？なのはちゃん」

「べ、別に取りとうとはしてないよ？ただ、お話がしたくて…」

「話がしたいから強行手段か？どこの魔王だお前は？」

「なのは……」

フェイトを見ると、ちょっと引いてた。
苦勞したんだな、お前。

「とりあえず俺は悪くない」

「まあ、確かに悪いのはなのはちゃんやな。そこは勘違いしとった、ごめんな」

「まあ、分かればいいんだけど」

「因みに大事な物ってなんや？」

さすが狸。さりげなく探ろうとしている。

くだらない物だったら、アリサ辺りが逆切れするんだろうな。
仕方ない、俺の平穩のためだ…。

ごめん、俺の宝物……お前を…人の目にさらす。

「……これだよ」

「『極秘ファイル』？なんやこれ？……ああ、言わんといていいわ。大体予想ついたわ」

「なっ！？あんたやっぱり！！」

「勘違いするな。中身はこれだ」

俺は極秘ファイルを奴らに見えるように開く。
中身は…

「絵？」

そう、中身は雪音が小さい時に書いてくれた、数々の俺の絵だ。
うまいとは言えないが、一枚一枚に愛を感じる。

これを見て、雪音に会えない時間を耐え抜く。
言わば俺にとっての強壮薬。
金には替えられない俺の宝物だ。

「これはな…昔、妹が書いてくれた絵なんだ…」

脳裏に浮かぶのは、雪音が小さい時に記憶。
まったく…気づいたらあんなに成長してやがって…。
兄ちゃんは嬉し悲しいぞ…。

俺は後に思う。

あの時の俺はどんな顔をしていたんだろう。

「……そっか。なんかごめんな…」

「いや、俺も言い過ぎたかも」

「はやて…。あたしも悪かったわ、ごめんなさい」

「気にすんな」

「わたしもごめんね。大切な物なんだね、それ」

「ああ、宝物だ」

「すまんかった、ワシも疑ってたわ」

「過ぎた事だ。エロ本で手を打ってやる」

「その…ごめん、疑ったりして。私も気持ちはよく分かるよ…」

お前妹いたっけ？姉さんじゃないの？

あ、シスコンってことか。

「ありがとう、君とは仲良くなれる気がする。良かったら、今度話をしよう」

まさかフェイトが妹の良さについて分かるとは…。

いや、お前は姉か。

「え…う、うん!!」

さて、最後は…。

高町を見ると、顔を青くして今にも泣きそうだった。やっとお前も、この聖典の神聖さに気づいたか。

「わ、わたし…そんな大切な物を…：ほ、本当にごめんなさい…」
しかしまあ、謝られて許さない俺じゃない。
汝の罪、我が許そう。

「いいよ。俺も言い過ぎたしごめんな」

「…許してくれるの？」

「ああ、話がしたいのならいくらでも話してやる」

「……ありがとう。西野君のこと誤解してた…」

誤解？はて、なんのことだ？

「あの、西野君。その…良かったらお友達になってくれるかな？」

「だが断る」

「……え？」

魔王と友達とか一寸先は闇。むしろ地獄。
俺を堕とすつもりだろ。
騙されんぞ、ブルータス。

第2話 新クラス。魔王はマジやばい（後書き）

出ました！！

原作キャラと転生者2人。

補足ですが、ニコゴッ！！について。

海堂海斗の能力。

相手の目を見てマジで微笑むと、鉄拳が飛んできます。

海斗は常に笑っていますが、あくまでニコニコではなく、へらへらしているだけです。

なので、普段は発動されません

第3話 昼食。マジものの厨二患者だ（前書き）

疲れた…。

眠いお。

けど、仕上げた。

僕頑張った。

第3話 昼食。マジものの厨二患者だ

朝の事件。

強奪未遂犯が身内の弁護士を騙し、見方に引き入れた事件。被害者までも仲間にしたが、それを阻止。

しかし被告人は女の武器を行使し、被害者は嫌々友好関係を気づいた。

なお、この事件をMYKK（魔王はやっぱり心が汚かった）事件と名づける。

そして、現在昼休み。

俺は魔王御一行に拉致られ、屋上へと連れて行かれた。

「神は私を見放したッ！！！！」

「なに言つとるん？弁当冷めるで」

屋上ってなんか叫びたくなるよね。

「音耶君、こっちこっち」

高町が隣を開けながら手招きしている。

つうか、いつの間にか名前と呼ばれてる。

さすが魔王。図々しい。

しかし、まさか魔王御一行と食事を取るなんて…。

どんな地獄の晩餐会になるのだろう。

あ、昼食だから昼餐会？

とりあえず高町と海堂の間に座り、鼻歌を歌いながら弁当を取り出す。

「なんだか機嫌いいね、西野君」

「今日の弁当が楽しみでな」

今日は奮発した弁当を持ってきたため、気分は最高にいい俺は、弁当箱であるタッパーを開いた。

「きくみくがくあくよくくはく」

「つて、日の丸弁当やないかつ!!」バシンッ!!

いつの間にか後ろに移動していた八神が、ハリセンで叩いて来る。お前、絶対狙ってたろ。

「なあ、自分。なんでそんな弁当なんじゃ?」

「俺が日本国民だからさ。日本バンザイ」

「で、おかずは?」

スルーされた。

「家計が苦しいから、おかずなんて贅沢な物はない」

主に雪音の食費で。
可愛いから許すけど。

事実を言ったら、なんか皆が暖かい眼差しを向けてきた。
やめろよ：照れるじゃないか。

「音耶、私のおかずあげるよ」

フェイトから、から揚げを貰った。

って、あんたも呼び捨てかい。

まあ、犬は飼い主に似るって言うしな。

「私のお裾分けや」

八神からアスパラのベーコン巻きを貰った。
うむ、これは好きだぞ。

「わたしのも食べて」

月村から肉を貰った。
血肉にさせてもらおう。

「感謝しなさいよね」

アリサから、なんか黒いつぶつぶを貰った。
おそろくタピオカだろう。

「はい、音耶君」

高町から人参を貰った。
きつと、マンドラゴラだろう。

「ワシのも食ってなあ」

海堂から、食べかけのハンバーグを貰った。

「高町、あーん」

「へっ!？あ、あーん…って、きゃあッ!！」パシンッ!！」

ハンバーグは叩き落された。

「ワシのハンバアアアアアアアグッ!!!!!」

海堂が泣いた。

そんなこんなで続いた昼食は、ある者が現れる事によって終止符を打つ。

そいつは突然やってきた。

「なのはッ!!!」バンッ!!」

突然響く重低音。

発信源はドア。

「うっ、クレス君…」

高町が嫌そうな顔をする。

その男は高町に近づくと、いきなり高町の手を握った。

「なのは！！良かった…無事だったんだね…」

「い、いきなり何？」

「なのはが暴行を受けたって聞いて心配したんだ！！頭がおかしくなりそうだったよ」

「へ、へえ、そう…」

「で、誰なんだい？なのはに暴行を加えたクズは！？」

「暴行なんてされてないよ…」

「そんな訳ないだろ！？こんなに目を腫らして…んっ、見ない顔がいるな」

半狂乱になって叫ぶ奴と目があつた。
やめて、そんなに見つめないで。

「んっんんっ！突然すまないね、君は？」

なんか人懐っこい笑みで見てくる。
今更遅いぞ。

「名乗る時は自分から。小学校で教わらなかったか？」
ピクッと、相手の眉が動いた気がする。

「そうだね、では名乗るよ。僕はクレス・レオンフォード、なのは達の幼馴染だよ」

金髪。

赤と青のオッドアイ。

クレス・レオンフォード。

僕…。

俺は優しくクレスの肩に手を置き、温かな目で見る。

「大丈夫。誰だって一度は通る道だから」

「…は？」

「金髪は染めたのかい？瞳もカラコン？偽名は出来るだけ隠したほうがいいよ。恥ずかしいから」

「き、君はいったい何が言いたい！！！？？」

言ってしまうのか？

しかし相手が望んでいるんだ。心苦しいが、ズバツと言ってあげよう。

「厨二は卒業しなさい」

「「「ブフォツ」」」

アリサ、八神、海堂が吹いた。

笑うなよ、可哀想だろう。

「……き…」

「……き、きさまああああああ！……！」

速いが避けられる。

ベチャツ！！

どうやら豆腐ハンバーグだったらしい。

「ぶあっはははははははははははッ、
はははッゲホッ、ゴホッヒイ
ーーーーッ!!!!」

「……くっ……あ、アリサちゃん……笑っちゃプクツ……だめだよお……」

「~~~~~!!!」

「あんた、ええ芸人になれるわ、ククツ…ブハツ！」

お前ら酷いな。特に高町。

あいつだって頑張ってたぞ。

「き、きさまっ!! もう許さん!!!!!!」

怒り狂った厨二は、胸元から青い宝石のついたペンダントを取り出した。

「なっ!!? あれは不味いで!!」

「レオンハート!! セットアツ やめんかッ!!!!」 ツチ!! 離せ
!!!!」

厨二が変身しようとするが、海堂に押さえつけられ、宝石を八神に奪われる。

てか、あれってデバイスだよな。

「悪いけど西野君。このバカと話があるから席を外してもらってもええか? すずかちゃんたちも」

「わかった、がんばれよ」

「おおきに。頑張って説教したるわ」

俺たちは屋上を後にした。

階段の踊り場でしばらく雑談していると、屋上のドアが開き厨二が降りてきた。

俺の前まで来ると、俺を睨み付けてきた。

「絶対に許さないからな」

いや、ハンバーグを装備して凄まれても…。

厨二の間ではハンバーグが流行っているのか？

「てな事があったんだ」

「おにいちゃん…大変」

「つうか兄貴、そいつデバイス持ってたの？」

俺は本日の出来事を、夕食時に話した。

あの後、八神達から謝られ、後は特に何もなく帰宅した。
で、現在それを話している。

「ああ、レオンハートって厨二くせー名前だった」

「レオンハートって……兄貴！！もしかしてこの人か！？」

イガグリが服の中から雑誌を取り出す。
お前はヤクザにでも狙われているのか、イガグリ？

「兄貴これだよ！！これ！！」

「ふむ、どれどれ……最強の魔導師『クレス・レオンフォード』、
あいつミッドでも偽名なのか」

「やっぱりこの人！？かあー！！！！すげえ！！！！こんな近くにいたんだ！！！」

「どんだけハイテンションなんだ、きもいぞイガグリ」

「だって最強だぜ！？俺、この人に憧れてんだ！！」

マジか。

頼むから厨二にならないでくれ。俺が恥ずかしい。

「つうかそれ、地球の雑誌じゃないよな？」

「ああ！！父さん達のお土産！！『月刊 魔導師』！！」

なんて分かりやすいタイトルなんだ。
って、おいおい魔王も写ってるぞ。

「ああこれ？この人は今話題のエースだよ。地球出身なんだって！！」

「エース？魔王じゃないのか？」

「魔王？なに言ってるんの兄貴？」

「その人は見習っちゃだめだ。いつか、下僕Gって呼ばれるぞ」

「えー！？この人の砲撃に憧れてるのに」

「手遅れか…。雪音はいつまでも綺麗でいような」

「…うみゆ？」

胸が満腹です。

第3話 昼食。マジもんの厨二患者だ（後書き）

第4話 なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？（前書き）

こんにちは、二足歩行犬です。

今回はかなりg d g dになってしまいました。

あと、1話くらいいいけるかな？

第4話 なまえをよんで。マジで名前なんだっけ？

新学年になり1週間。

あの日から、やたらと絡んでくる魔王御一行。

俺の精神は魔王の微笑みでどんどん擦り減っていく。

否、現在進行形で擦り減っている。

「わたし、音耶君のお弁当も作ってきたんだ。良かったら食べて（ニコニコ）」

現在は昼休み。

場所は最近、新たなテリトリーとして使っている屋上。

食事時は皆の顔が見えるように円になっている。

そして俺は海斗と高町の間が定位置とかしていた。

実に不満だ。意義を申し立てる。

「なのはちゃんの手作り弁当か。モチモチやな西野君」

「もうー、そんなんじゃないよーはやてちゃん」

「なんか最近嬉しそうじゃのおー、なのは嬢」

「あ、それ私も思った」

「食事（俺）を前にして喜んでいるんだろ？」

「そんなに食いしん坊じゃないもんっ」

「じゃあ、何かいい事あったの？」

「うん！最近クレス君の顔を見ないんだっ」

クレス君？……ああ、厨二か。

つうか高町。お前何気にひどいな。

「うわっ、ハッキリ言うわねえ」

「なのはちゃん……」

見ろ、2人が若干引いてるぞ。
そこまで厨二が嫌いか、高町。

「そういえば音耶、今日はどんな弁当持って来たじゃ？」

「本日のメインディッシュは10秒チャージ」

「よし、なのはちゃんの弁当もらつとき」

「あ、そうだった！はい、音耶君」

高町から青い包みを渡された。

中々重量のある代物だ。

微かに焼いた肉の香りが漂う。

「ひだりへ受け流す……」

「おお！なのは嬢…ワシのために愛妻弁当を…」

「ちがうよっ！？それは音耶君の！」

「人肉は食えんとです」

「人肉！？ソーセージだよ、人肉じゃないの！！」

「ふむ、なら頂こう。海斗、お前に人間の食物はまだ早い」

俺は海斗から弁当を奪取した。

海斗は眉の下のダムが崩壊した。

「その…あまり美味しくないかも…」

「なに、人間の食い物なら食べる」

高町を横目に恐る恐る弁当を開く。

中身はミートボール、ソーセージ、卵焼き、ハム、レタス、プチトマト、フルーツと、意外と普通の弁当だった。

「UMAは出て来なかったか…」

「未確認生物扱い！？」

「しかし、何か可愛らしい弁当だな」

「あの、もしかして嫌だった…？」

「いや、正直助かる。死んでしまった豚に感謝して、いただきます」

「ピンポイントで豚かいな」

とりあえず、盛り付けたフルーツを一口。
ふむ、甘い。

「ちょっとあんた、普通デザート先に食べる？」

「甘いものはいちごミルク以外好かんです」

「あつ、だからいつもダルそうなんだね」

「糖分不足って言いたいのか、このヤロー」

「音耶は嫌いなものは先に食べる派なんだね」

フエイト嬢は中々の観察眼を持っているようだ。
ふむ、では卵焼きを頂こう。

「……………甘くない」

「お父さんが甘い卵焼きは苦手なの。だから塩を入れたんだけど…。でもちようど良かった、音耶君は甘いもの苦手なんだもんね！」

「そこに直れ、このヤロー」

「ふえ？」

「いいか、甘くない卵焼きは卵焼きとは言えん。塩？アホかお前。卵焼きを辱めるのもいい加減にしろ」

「ええええええええ！？」

「なんやコイツ、めんどくさっ!!」

甘くない卵焼きなんぞ、俺は認めん。

「音耶、この前のアレどうじゃった？」

食事も終わり、今は雑談タイム。
海斗が俺に話しかけてきた。

「アレか…。意外と良かったな。まあ、My Angelには遠く及ばないが」

「そかそか、音耶はええ趣味してるのお」

「やめろよ、照れるじゃねえか」

「……あんたら、何の話しとるん？」

「「なに…ってそりゃあ、…なあ？」」

「あんたらホンマ仲ええな」

まあ、話が合うしな。
主にあっち方面で。

「そういえば、いつの間にか名前で呼びあってるしね」

「親友じゃからな!!」

「切っても切れない仲だ」

「ふうん……ねえ西野」

「なんだアリサ？」

「あんた、なんでなのは達は苗字で呼んでるの？」

何を言ってるんだコイツは？

いきなり名前で呼ぶとか失礼だろ。

常識を勉強しなさい。

「なんかムカつくわね……。でも、あたしやフェイトは名前じゃない」

「え？」

「え」

「名前なの？」

「そうよ、フェイト・T・ハラオウンにアリサ・バニングス。名前じゃない」

「……………」

「？」

「嘘だツツツツツツツ！！！！！！！！！！」

「きゃあっ！！」

「騙されんぞブルータス。お前の名前はバ…バ…バウイングだろ！！」

「バニングスよ！！それにバニングスはファミリーネームだわッ！！」

「ファミリーネームって……お前外人だったのか！？」

「ハーフよ！ハーフ！！金髪見れば分かるでしょ、普通！！」

「いや、てっきり厨二病患者かグれてるだけだと…」

「あんた…殺すわよ」

おー、怖い怖い。

しかし、まさかハーフだったとは。

最近、原作知識が無くなってきたな。

「じゃあバニング「はあ、アリサでいいわよ」…んじゃ、アリサ」

「なあ、もしかして西野君って私達の名前知らん？」

「なにを言う、早見優。これでも記憶力には自身あり」

「ネタが古いわ！！……じゃあ、私の名前言ってみ？」

「八神狸だろ？」

「たぬッ！？ちゃうわ！！八神はやてや、は・や・て！！」

「借金執事か…」

「あ、あれおもしろいな」

「ああ、俺も好きだぞ」

「って、名前違いや！！」

うるさい狸だ。

カチカチ山再現すつぞ、このヤロー。

「もうええわ…。それじゃあ、すずかちゃんのフルネームは？」

「お前アホだな、自分で言ってるぞ。月村・すずか・チャン、だろ？」

「……アンタも相当アホやな」

「私は月村すずかだよ……」

「ok。記憶完了」

最近の名前はややこしいのが多いからな。
覚えるのも大変だ。

「音耶、私の名前は？」

「ああ、フェイトか…。お前の名前はインプットされてる。いい名だからな」

「え！？そ…そう？ありがと」

何故赤くなる？

事実を言っただけだぞ。

「性がフェイト、名がテストロッサ、字がハラオウンだろ？珍しいよな、今の時代まだ字を持ってるなんて」

「……………」

「フェイトは中国人じゃないわよ…」

フェイトは良くわからないみたいだ。

アリサはさすが優等生。

憧れも痺れもしねえけど。

「冗談だ、気にするな。フェイトのフルネームはアレだろ、Fat e／t e s u t a r o s s a h a r a o u n だろ？」

「あ、うん。なんか違う気がするけどそれでいいよ」

「ちなみに私はバーサーカーが好きや」

「わたしはライダーかな？」

「ワシは兄貴や」

「お前らやるな。俺はアーチャー一筋。今度、はやてん家でバトロ
うぜ」

「おお、ええで。ってあんた、私の名前…」

「類友だからな。てなわけでよろしく、はやてとすずか」

「うん、よろしく」

「よろしゅう」

俺は仲間をゲットした。

いつか魔王の元から開放してあげよう。

と、クイクイっと俺の服を引っ張る何かがいる。

「あの、わたしも名前…」

「魔王だろ？」

「魔王じゃないよ!？」

いやいや、お前が魔王じゃなかったら誰が魔王なんだよ。

お前はラスボスだろ？

よくRPGに出てくるだろ？

「音耶君…わたしのフルネームわかる？」

「わかるに決まってんだろ。何年一緒にいたと思うんだ」

「1週間や」

「音耶君…」

「魔界脊策魔物門脊椎魔物亜門人肉食網魔人目魔王科戦闘民属、高町なのはだろ？」

「なんか違うの!？」

「あんたって実は頭いいでしょ…」

「いいってよりは、頭の回転が速いだけなのかもね」

「ねえ、わたしも名前でよんで？」

「わかったよ、魔界脊「なのは」……魔お「なのは」……m「なのは」…」

なんだろう、高町の目から光がなくなっている。
遂に本性を現したか。

ここで選択肢を間違えるとBAD END直行だな。

俺は…

1. 素直に名前で呼ぶ。

2. バトルを挑む。

3. 魔法の呪文

4. 脱ぐ

ふむ、とりあえず2は捨てるか。

勝てるわけないし。

4…は、社会的に死ぬな。

後は1と3か…。

なら選ぶほうは決まっている。

「高町…確かにお前は強い…」

「けどなあ…！僕にだって守りたい世界があるんだッ…！！！」

「何言ってるの？」

「行くぞ…！俺の魔法の呪文を喰らえ…！！！」

「え…？魔法やて…？」

「なのは…！逃げて…！」

「すずか嬢！アリサ嬢！ワシのそばから離れるな…！」

「え…？ちよつとどういことっ…？」

「まさか西野君も…！？？」

「これで俺は最強となる…さよならだ高町…」

俺は右手を前に突き出し、左手を右手首に添えた。
高町はどうやら混乱しているようだ。

「行くぞッ…！！！」

「「「「なのは(ちゃん)(嬢)!!!!!!」」」」」

「ゆうて いみや おうきむ こうほ りいゆ うじとり やまあ
きらペ ペペペペ ペペペ ペペペ ペペペ ペペペ ペペペ
ペペペペ ペペッ!!!!!!!!!!!!!!」

「「「「「へ?」」」」」

なんか皆、面食らった顔をしている。
なんでやねん。

「これで俺のレベルは48だ。最後くらい抗わせてもらう」

「あ、あの…音耶?」

「俺は音耶ではない。もよもとだ!!」

「じゃあ、もよもと。今のなに?」

「復活の呪文だ」

「復活の…呪文?」

「知らないのか?」

俺は驚き、フェイトへと身体ごと振り返る。

アレを知らないなんて。

これだから現代っ子は…。

俺が時代の変化について考察していると、突然背後から強烈な寒気が襲ってきた。

「ねえ…音耶君…」

振り向いちゃだめだ！振り向いちゃだめだ！！振り向いちゃだめだッ！！！！！！

しかし、振り向いてしまうのが人間の性。
後ろには目が逝ってる魔王がいたとです。

「音耶君…：なまえをよんで…」

ドクンッ！！

な、なんだ！？この胸の鼓動は！？
身体は全身鳥肌なのに、心が熱くなっていくだと！？
まさか…：恋？

次週『真剣で魔王に恋しなさい！！』

なんてね。

こんな状況でも、冗談を言える俺の心はきっと鋼で出来ていた。

「ねえ？音耶君…？」

「…なんだ？」

「なまえを…よんで？」

「だが断r「なまえをよんで」：いy「なまえをよんで」：k「なまえをよんで」…：神は私を見放したッ！！！！！！」

「さあ、なまえをよんで？」

「……なの…」

「聞こえないよ？もっと大きな声で…」

「な…なの…」

「うん、あと少し…」

「なのっ」

「なの？」

「ナノインパクト!!」

後の俺は言った。

弁当箱は鈍器にもなる。よい子は真似しないでね。

「なあ、因みにワシの名前は？」

「何言ってるんだ？お前には名前なんてないだろ」

「……え？」

第5話 翠屋。マジ笑えない（前書き）

今回は、突撃翠屋！！

さよなら、音耶君…。

君はきっと死ぬ。

第5話 翠屋。マジ笑えない

『喫茶 翠屋』

別名 戦闘民族の巣窟。

数々の人間を破壊、蹂躪してきた戦闘民族の村。

「あそこだけは近づいてはならん……近づくとき引き込まれるぞ……
ああ……わしの妻も……あやつらに……クッ……ばあああああああああ
ああああああああんッ！！！！！」

って、じいちゃんも言ってた。

近づいたら死。

そんな場所に俺はいた。

俺も好きでいるわけではない。

あれは昨夜のことだった……

〈回想・昨夜〉

「さてイガグリよ、雪音は寝たか？」

「ああ、今は寢床でぐっすりさ」

場所は海鳴市に存在する一軒の家。

そこのリビングで今、重大な会議が起ころうとしていた。

出席者は二名。

真っ暗なリビングではテーブルの上に置いたケータイだけが、妖しい光を放っていた。

「さて、イガグリよ。今回の議題…わかっておるな？」

碇ポーズで尋ねる俺に、イガグリも碇ポーズで答えた。

「ああ、明日の事だろ？」

「ふっ、分かっているではないか。そう、明日は……」

「『『雪音、初めてハイハイしました記念日』』」

「って、やっぱり必要なのこれ？」

イガグリは立ち上がり、リビングの電気をつける。

雰囲気は大事だと教えたはずだが？

ちっ、これだから野郎は。

「で、兄貴。明日の記念日って必要なの？」

「当たり前だろう。妹が成長を遂げたという素晴らしい記念日。家族なら当然祝うだろ」

「俺のは無いんだけど…」

「野郎は知らん」

何言ってるの、このイガグリ。

お前がハイハイできたくらいで祝わんわ。

「で、イガグリ。問題はプレゼントを何にするかだ」

「やっぱり食べ物じゃない？」

「それには同感だ」

「あ…：そういえば、姉ちゃんがこの前言ってたんだけど…」

「k w s k」

「なんか、翠屋ってこのケーキが食べたいって言ってたよ」

「ふむ、ケーキか…：祝いの場にはぴったりだな。しかも雪音が御所望ときた。決まりだな、今年のプレゼントはケーキだ!!」

「じゃあ、兄貴買って来て。俺は出前頼みまくるから」

「よし、では今回の議会を閉幕する!!」

〽回想終了〽

「ミスった。あの時、気づいていれば」

俺が思い出したのは、ここに着いてからだった。

俺としたことが…：なんてミスを。

かしなんだ？結構、普通の喫茶店だな。

はっ！？騙されるな。

これはきつと罠だ。

平凡を装いながら店内は謝肉祭、酒池肉林、人肉取引…。
クソッ！！さすが魔王の家族。汚いぜ。

しかし俺は行かなければならない。雪音のために。

絶対ケーキを持って帰るからな。

たとえ四肢が無くなろうとも。

だから、俺を見守っていてくれ雪音。

いざ……出陣！！！！！！

「いらっしやいませ〜！！」

むっ、意外と挨拶も普通だな。

てつきり「ギャキュウヒョアガヒヒヒッキシャー……………ッ
！！！！」かと思った。

「お1人様ですか？」

なんかメガネが話しかけてきた。
しかも疑問系。

お前には、俺のほかにも人が見えるのか？

「1人です」

「かしこまりました。カウンター席でよろしいですか？」

「はい」

「ではこちらにどうぞ」

通されたのはカウンター席のど真ん中。
なんとなく辺りを見回す。

店内には俺以外の客がいない。

店内に1人って、ちよつと優越感。

「いらっしやい」

と、店の奥から若い男が出てきた。

この人は覚えてるぞ、士郎さんだろ？

「ちわっす」

「今日は一人かい？」

「ええ、まあ」

「そういえば、その制服。ウチの娘と同じ学校なんだね」

来ると思ったよ、その質問。

しかし面倒な事に巻き込まれたくないので、ここは他人のふりをしよう。

「へー、そうなんすか？偶然ですねー」

「ははっ、そうだね。それで、ご注文は？」

「コーヒー、ブラックで」

「おっ、渋いね。少々お待ちは」

「甘いもんは苦手っすから」

「そうか。そういえばうちの娘、高町なのはって言うんだけど知らないかな？」

「聞いたことはありますね。なんでも聖祥五大美女だとか」

「ほう、そんな噂をされているのか。はい、コーヒー」

「ども、………うまいっすね。こんなの生まれて初めてだ」

「そりゃあ、ありがと」

マジでうまい。おそらく今までで一番。
なんか、ここの店に通いたくなる味だ。

「そういえば君……名前は？」

「阪東っす」

ここで本名を出すほどバカじゃない。
呪術に使われんのもやだしな。

「阪東君に聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

「なんなりと」

「君……西野音耶君って知らない？」

「知りません。聞いた事ありません。妖怪かなんかですか？」

「人間だよ。最近娘が事あるごとに、音耶君音耶君と話していてね。この前なんか手作り弁当を渡したみたいだよ。はははっ」

士郎さん、笑いながらグラスを握り締めないでください。
ヒビ入ってますよ。

こりゃあ、さっさと用事を済ませるべきか。
バレたら挽肉にされそうだな。

「マスター、お土産用にケーキ20個包んで貰えます？」

「20個！？凄い量だね……」

「うちには大食いがいるんで」

「そうか……。種類は？」

「適当にお願いします」

俺がそういうと、士郎さんは奥に消えていった。

「あの…なんすか、これ？」

「サービスだよ、うちの娘が作ったんだけどね。味は大丈夫。ちょっと甘いけど」

俺の目の前には少し大きめのケーキ。

見た目はショートケーキだ。

「つか士郎さん、俺さっき甘いの手紙って言いましたよね？
とりあえず、残すのも悪いので一口。」

[illegible]

なんだこれ？ちよっとてもんじゃねえぞ！？
もう既に兵器だぞ！！

.....

「どう…かな？」

いつの間にかメガネが立っていた。
なるほど、てめえか。

正直言って顔面に投げつきたい。
けど、実際しない俺はいい子。

「……………」
グツ！！

とりあえずサムズアップしました。

「…え！？お父さん、まずくないって！！」

「良かったな、美由希」

ほのぼのしんじゃねえよ。

こっちは地獄との瀬戸際だったの。

さすが、高町家。

やる事が汚い。

「…クソッ…甘えよ…甘すぎるよ…」

「お、お父さん！！私のケーキで涙を！！」

「……よかったな、美由希」

ごめん雪音…。

兄ちゃんは逝くよ…。

「クフオ…しよっぺえ…甘じよっぺ…」

「しよっぱいのは君の涙だ」

先程から、約30分。

俺の死闘はまだ続いていた。

半分残るケーキを見て、更に涙が溢れ出す。
もう…ゴールしていいよね…。

と、その時…死にそうな俺に、天の声と地獄行き決定の声が聞こえた。

「ちいーす!!」

「ただいま、おとうさん」

「「こんにちは」」

「おかえり。海斗君とフェイトちゃんとアリサちゃん、いらっしやい」

魔王御一行が帰ってきた。

「ってあれ? 音耶君!?! 来てたんだ!?!」

「……音耶…君…?」

俺、終了の合図。

「って、こいつ泣きながらケーキ食べてるわ!?!」

「どうしたの、音耶!?!」

「うばおおおおおおおお」

「すまん。何言ってるかさっぱりわからん」

「なにになに？ ケーキが甘い、死んじゃう？」

「分かるんか！？ フェイト嬢！？」

「え？ 分からないの？」

「普通わかんないわよ」

いいから助けてお。

俺が助けを求めていると、高町がケーキのホイップを指で掬い取り舐めた。

「甘っ！？ おとうさん！！ これ凄く甘いよ！？」

「やっぱりか…」

「おとうさん、まさか味見は？」

「すまん、する勇気がなかった」

「もう！！ 大丈夫、音耶君！？」

「ぼおおおおおおお」

「えっと…じいちゃんが手を振ってる…」

「音耶君！？ 死んじゃだめえ！！」

こうして俺は死……なずに開放してもらえた。
この時だけ、高町が天使に見えた。
この時だけ。

大事な事なので2回言った。
ちなみに、ケーキは高町印のゴミ箱へ消えた。

「うう、ごめんなさい…」

メガネが頭を下げてくる。
本当に申し訳なさそうに謝っている。

「だが許さない」

「ええ!？」

「冗談だ。しかし高町、助かった。あのままだったらきつと、地獄
行きの片道切符をかうところだった」

「こっちこそごめんね。2人が変な物食べさせちゃって…」

「ああ、私からも謝罪するよ」

「いえ、別にもういいですって」

さて、色々あって少し長居しすぎたかな。
そろそろ帰るとするか。

「じゃあ、俺は帰るんで」

そうやってを背を向けると、何故かガシツされた。
犯人は……あなたですね、士郎さん。

「少し君と話があるんだ…西野音耶君」

「俺はありません」

「はははっ、私にはあるんだよ」

「あなたは俺に、細菌兵器入りケーキを食べさせました」

「それはすまなかったね。けどそれとこれとは、話は別だ」

俺は首根っこを掴まれ、引きずられてく。

高町と目があった。

助けを呼んだ。

「なまえをよんで」

ま・た・そ・れ・か。

しかし、背に腹は変えられない。

オーケー、取引成立だ。

「行けなのは！！滅びのバーストストリーム！！」

「それはできないの」

あつ、引っ張る力が強く。

もう無理ぽ…。

なんとか助かった俺は、ケーキを受け取り帰宅した。

ケーキを雪音に渡したら、凄く喜んでくれた。

兄ちゃん冥利に尽きる。

後日、俺は高熱を出し寝込んだ。

やはり、あのケーキは兵器だった。

第5話 翠屋。マジ笑えない（後書き）

士郎さんってこんな感じだっけ？

うーん、よくわからん。

第6話 学力テスト。マジで語ろう（前書き）

まさか、もう1話仕上げてしまった…!!

がんばった俺。しかし明日学校。

電車で一時間…。

どうして遠い大学選んだんだろう…。

今回は長くなるので、2つに分けました。

しかも今回の前編は、異常に会話が多いです。

第6話 学力テスト。マジで語ろう

五月。

梅雨の季節。

または、うつ病増加の季節。

新しい環境に疲れた者たちがダメになる季節。
ここ、聖祥中学の生徒も例外ではなかった。

「鬱や……死のう……」

「鬱じゃあ……死のう……」

「鬱なの……死ぬの……」

「なのはが死ぬなら死のう……」

「……なんだこれ……」

いつもどおりの朝。

学校へ登校すると教室がホラーと化していた。

多くの生徒がテーブルに突っ伏し、死ぬ死ぬ連呼している。

魔法少女3人とアホも鬱っていた。

うつ病の感染率が高いらしい。覚えておこう。

「で？　どういう状況だこれは？」

俺は後ろのほうで呆れた顔をしているアリサと、心配そうな顔をしているすずかのもとへ向かった。

「あつ、おはよう、音耶君」

「おはよう、音耶。見ての通りよ」

「見て分らないから聞いてるんだが？」

「うつ病に罹ったらしいのよ」

「うつ病？いつも、はな垂れ坊主のように元気なこいつらが？」

「音耶君、いいすぎだよ」

すずかに注意された。

しかし魔王までも罹るとは意外だ。

何があった？聖水でも浴びたのか？

「原因はあれみたいよ」

アリサの指差す先には、一枚のプリント。

『第1回 学力テスト』と書いてあった。
なるほど。アレのせいか。

「うう、絶対赤点なの…」

「歴史が…」

「全部やばいわ…」

「右に同じじゃあ…」

「休みすぎだ。お前達が悪い」

そう。こいつらは良く休む。

理由は知ってるが、俺には関係ナッシング。

管理局に入ったお前らが悪い。

海斗については知らんが、おそらくコイツも管理局員だろう。

「すずかちゃん、助けて〜」

「自業自得なのに人に縋るとか。その凶々しさに脱帽」

「いいよ、勉強見てあげる」

「すずかの人の良さにも脱帽」

「ありがとう〜!!! すずかちゃん!!!」

「はあ、仕方がないわね…。あんた達!!! 今週の日曜は図書館で勉強よ!!!」

どうやらこいつ等は休日も勉強するらしい。

やる気のある奴らだ。

敬意をはらってこの言葉を贈ろう。

「ガンバツツツ!!!!!!」

「あんたも参加ね」

何故だ。

時は過ぎ日曜日。

場所は図書館、自習室。

幸い俺達以外に、人はいないので存分くつろげる。

「さて、お前達。パーティーステーションポータブル、略してPS Pは持ってきたか？デビルハンターやるぞ。爆弾の貯蔵は十分か？」

「って、なんでアンタはゲーム持ってきてんのよ！！」

「あ、アリサちゃん……実はわたしも……」

「すずかまで！？」

さすが類とも。

図書館でやることを良くわかっている。

「俺とすずかは狩りに行ってくるから、お前ら勉強な。なに悔しがるな、これが平民と貴族の違いさ」

「いいからあんたも手伝いなさいよ」

「だが断る。さあ、すずか、狩りの時間だ」

「ごめんね、わたし勉強見てあげないと」

「お前もかあああああああつ、ブルウウウウウウタアアアアアアアスッ！！！！！」

「うっさいッ！！！！」 ドゴッ！！

理不尽だ。

「なあ、そういえば音耶君は勉強しなくてええんか？ そんな頭良くないんやろ？」

1人寂しくPSPをピコっていたら、狸が聞き捨てならないことを言いやがった。

「はん？ 頭が悪い？ 現代のピカソと言われた、この俺が？」

「いや、それ芸術家やから」

「ふむ、俺に向かって頭が悪いと言った狸に問題だ」

「……頭がち割ったろか？」

「トゥルンッ！！ 問題、鎌倉幕府はいつ出来たか？」

「1185年やろ？簡単や」

「え？」

「え？」

「お…おう、正解」

「あんたも勉強追加」

何故だ。

「うう、歴史がまったく分からない…」

勉強会に追加され30分。

フェイトが音をあげた。

忍耐力の無い子。お前は忠犬のはずだろ？

ハチ公見習えや。

「記憶するだけだろ？」

「それが出来れば苦労しないんだけど…」

「そういえば自分の好きなものに例えると、覚えやすいって聞いた

で？試しにほら、本能寺の変を想像してみ」

「本当？えっと…私の好きなもの…」

くフェイトの愉快的な頭の中く

巨大な寺の前に、馬に跨ったある男がいた。
名は海堂海斗。
後に有名となる武将である。

「皆のもの！！敵は本能寺にあり！！行くぞッ！！！！」

海斗の一声で大勢の兵が、本能寺を包み込もうとした。

「……クソっ…ここまでなの…」

燃え盛る寺の中、1人の女が今窮地に立たされていた。

「まさか海斗君が…ここまでやるなんて…」

思い浮かぶは彼が部下だった時の記憶。

しかしそれも過去。

今は現実を見なければ。

だが、現状は変わらない。自分はきつと殺されるだろう。

「しかしこの、高町なのは！！決して敵になど殺されないのッ！！」

「!!」

なのはは、短刀を取り出し正座する。
そして息を大きく吸い込むと、その短刀を……………。

（妄想終了）

「なのはあああああああ!!!!!!!!」

「にゃ!?!」

「ど、どうしたんじゃ急に!?!」

「海斗、お前は絶対に許さないッ!!!!!! なのはを返せええええええええええええええええッ!!!!!!」

「え? ちょ、えグフオオオオオオオオオッ!!!!!!」ズドンッ!!!!!!

「フェ、フェイトちゃん!?! どうしたの!?!」

「え……………なのは?」

「うん、なのはだよ」

「な…のは……………なのはあああああああ!!!!!!」ガシッ!!

「にゃわ!!!! く、苦しいよ、フェイトちゃん……」

「良かった、無事で、なのは、なのは!!」

「一体なんなの～～～!!」

「アホだな」

フェイトは正気を取り戻すと、顔を真っ赤にして海斗に謝った。

海斗は「ええんじゃ」と言ってフェイトを撫でた。

次の瞬間、海斗は宙を待っていた。

不思議だ…。

ナデポならぬナデゴッ!! か？

色々あったが勉強会は再開された。

俺はなのはと勉強していたが、なぜかアリサに追い出された。

アリサ曰く「あんたがいると、なのはが集中できないの。ほら、バカ2人に混じって勉強してなさい」
理不尽だ。

「そういう訳で、この部署へ配属された、西野音耶軍曹であります」

「よう来たな、音耶軍曹。私は部隊長の副官をとる、八神はやて少佐や」

「そしてワシは部隊長の、海堂海斗大佐じゃ」

「よろしくおねがいます」

「ふむ、さっそくじゃが、この部署についての説明をする。八神少佐」

「はい。この部署は、女体に関する考察を主に担当しております。世界には様々な女体が存在しますが、我々は数ある女体の内、どれがいかに素晴らしい女体なのかを選定するために、設立された部署であります」

「ふむ、ご苦労じゃ。理解できたかの軍曹？」

「はっ！私は素晴らしい部署に配属されたのですね」

「ええ、ここより上はあらへんよ」

「では、さっそく今回の議題を発表する。今回は『巨乳の素晴らしいさについて』じゃ」

「異議ありッ！！」

「ふむ、発言を許す」

「はっ、巨乳の輝きなどほんの一瞬。言わば流れ星のような物。将来は垂れます！」

「異議あり！」

「発言を許す」

「その一瞬の輝きが、美しいのではあらへんのか？確かに垂れるかもしれないけど、それは昔、輝いていた証拠です。なので私は巨乳を推します」

「はんっ！将来垂れる物になんの意味がある」

「……何が言いたいんや、軍曹？」

「私はペチャを推します」

「何を言う、揉めない乳などに意味はあらへん！！」

「垂れるよりはいい！！」

「静粛にッ！！ここはもめる場ではないぞ？」

「すみません」

「ふむ、では軍曹の意見から聞こうかの」

「はい。私はあくまで巨乳を否定します。巨乳など、少女には不釣り合いです」

「ふむ、しかし今はそういう需要もあるのдар？」

「それは堕ちた者たちの意見です。彼らは忘れてしまっている、少女はナイチチという教えを…」

「ひとつええですか？」

「なんじゃ、八神少佐」

「先程から少女と言う言葉を耳にしますが、まさか軍曹はロリコンですか？」

「なッ！？ロリコンって言うやつがロリコンなんだッ！！」

「凶星のようやね。音耶軍曹はロリコンっと…」

「違う！！あくまで父性本能だ！！」

「ほお。……軍曹、取引せえへんか？」

「取引？……何ですか？」

「我が家にはヴィータっちゅう娘がいる。軍曹の好きなロリロリや」

「ふんっ、それがどうしました？」

「しかもツンデレ属性。私にはデレるんやけど、そらあ可愛ええで」

「なっ…っ、ツンデレロリ…だと？」

「ああ、しかもその娘はちょっと特別でなあ、なんと……エターナルや」

「!!…?…?…:…:おお、神は存在したのか…」

「どや、会ってみたいか？」

「ふふっ、負けたよ少佐。取引成立だ」

「あんがとうな、軍曹」

「しかし、何故そこまで巨乳を？」

「乳は私にとって全てなんや…」

「素晴らしい…:…:そこまで…」

「いや、あんたのペチャに対する気持ちもよう伝わったわ。これからは手を取り合おうやないか」

「はっ、どこまでも着いて行きます少佐!!」

「うむ、決まったようじゃのお。では、判決『乳に上下関係なし!! 全て平等!!』じゃ」

「「異議なし」」

「うむうむ、ではこれで議k「あんた達……何してる訳？」つく！
総員撤退！！ワシもn「何処行くの？海斗君」す、すずか嬢……」

「あかん！！部隊長が捕まった！！はよ逃げr「はやて、逃げちゃだめだよ」ふえ、フェイトちゃん……」

「八神少佐ッ！！」

「来たらあかん！！軍曹は逃げえっ！！そして、世界に乳の良さを
！！！！！！」

「く、くそおおおおおッ！！！！」

「頑張つてな、軍曹。私は世界中の乳を愛し、そして、世界をも」
「なに言ってるの？はやて」ちょ、辞書はあかんてっ！フェイトちゃん！！！！」

「ありがとう少佐。あなたのお陰で大切なものに気づけた。だから、
俺は貴方の想いを世界にッ！！！！？？」

「何処行くつもりなのかな？音耶君」

「魔王か……。しかも目に光が灯っていない。バーサーカーモードか
……最悪だな……」

「魔王じゃないの。なのはだよ」

「悪いがここは通らせもらうぞ。少佐の想いを無駄には、ツグハア
！」

「逃がさないわよ…」

「辞書は反則だろ……って、お前は！？魔王の配下、四天王が1人、
金髪緑眼炎の守り手、アリサ・バーニング！？」

「……………」

「ふっ、どうやらここまでみたいだな…。すみません少佐…。約束
…守れませんでした…」

「「O☆H A☆N A☆S H Iよ（なの）…」」

この日、3人の命が散った。

しかし彼らの想いは、きっと誰かの胸に残っているだろう。

続く……………

第6話 学力テスト。マジで語ろう（後書き）

音耶君はロリコンのようです（笑）

本人は否定してますけどWWWW

しかし、今回の話の後半。

はやてと海斗と音耶で、凄くやりたかった話なんですよね。

ちなみに作者はロリコンではありません。

第7話 学力テスト2。マジでやればモーマンタイ（前書き）

今回は後編です。

書くのに1時間半かった…。

一日一話が限界かな？

頑張れば二話行けるかも。

第7話 学力テスト2。マジでやればモーマンタイ

海鳴市の惨劇から早1時間。

時刻は昼。

俺たちは某ファミレスへと来ていた。

ファミレスはいいよ。安いしくつろげる。

「のう音耶、ワシがピンポン押してええかの？」

隣に座る海斗がガキっぽいことを言ってきた。

因みに席は4人がけ席をドッキングさせた、簡易8人席だ。

席順は窓側が、海斗、俺、はやて

通路側はフェイト、なのは、すずか、アリサとなっている。

で、話を戻すが海斗が実に子供っぽい事を言ってきた。

ピンポン…それを押せば店員が駆けつけて来るという、画期的な機械。

幼稚園児、小学校低学年に絶大な人気を誇るボタンだ。

しかし、俺たちは中学生。

そんなボタンなど興味ないわ。

「と、引き下がる俺ではない。ピンポンは俺が押す」

「嫌じゃ、ワシが押す」

「黙れ。そのボタンはお前にはまだ早い」

「嫌じゃ！！ワシが押す！！」

「ダメだ、俺が押す」

「ワシじゃ!!!」

「俺だ」

ピンポン

「「あ」」

「あ、あれ？もしかして押しちゃだめだった？」

「いや、ナイスよフェイト」

「ボタン1つで恥ずかしいの」

俺たちが聖なるピンポンを取り合っていると、あろうことか金髪忠犬フェイ公が押しやがった。

「~~~~!!フェイト嬢のバカッツ!!」

「きつとお前の心はヘドロで出来ていた。そして泣くなバカ、きもい」

「そういう音耶君も、目に水が溜まってるで」

「いや、これは心のあs「おまたせしました。ご注文はお決まりですか？」喋ってる途中に入ってくるとか。いったいどうゆう教育をされてる、店員？」

くそっ、ちよつと可愛いからって許されると思うな。
ドリンクバー制覇すっぞ、このヤロー。

「すみません、こいつらは気にしないでいいです」

「は、はぁ」

「えっと、ドリンクバー7つ。あたしは、たらこスパゲティで。す
ずかは？」

「わたしも同じものを」

「私は日替わりランチお願いします」

「私はサンドイッチで。なのはは？」

「わたしは、おろしハンバーグで。あとランチセットBお願いしま
す」

「そちらのハンバーグは人肉ですが、よろしいでしょうか？」

「はい…って、何言ってるの！？音耶君！？」

「はい、って言ったよこの人。あ、俺リブステーキ、ランチセット
Aで」

「か、かしこまりました。…あと、当店は牛肉ですので…」

「そんなこと分かっている。ジョークも分からのか？今時の店員
は」

「す、すみません!!」

「あの、本当にこいつは気にしないでください…」

「は、はい。ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい、お願いs」「ワシがまだじゃ!!」「いたのか虫」

「虫!?!まあええわ。ワシはえびグラタン。えびとマカロニ抜きで」

お前もう帰れ。

さすがはやて、良くわかってる。
アリサとは大違いだ。

「ありがと、はやてちゃん。わたしはコーラお願い」

「私もコーラで」

「わたしは紅茶をお願いしていいかな？」

「俺はk「わかった、ほな行って来るわ」お前もか、少佐」

信じてたのに裏切ったな、少佐。
仕方ない、行って来るか。

「おい虫。おまえのも持ってきてやる」

「まじか？なんじゃ、音耶最高じゃな…。目頭が熱くなってきたわ
…」

「親友だろ？で、何にするんだ？」

「親友…。なんでもええわ…。親友の持ってきたもんなら何でも飲
んじやるッ！！」

「任せろ。心を籠めて注いできてやる」

こうして俺はドリバコーナーに向かった。
親友のためだ、一肌脱ぐか！！

「で、なんじゃこれ？」

「ミックスジュースだ」

俺は親友のために頑張った。

親友の目の前には、七色に光る飲み物が置いてある。
これを作っていた時は、周囲の目が凄く痛かった。

「色々ミックスしすぎじゃろ!!」

「ミックスジュースだからな」

「うわぁ…さすがにやりすぎなの」

魔王御一行は可哀想な眼差しを、海斗に向けている。

「お前、親友の作ったもんなら飲むって言ったよな？」

「け、けど…これはあかんで」

「飲むよな？」

「くう…ええけん！！飲んでるわ！！」

海斗はグラスを勢い良く持ち上げ、立ち上がった。
やる気だな、こいつ。

そんなお前に、敬意を籠めてこの言葉を贈ろう。

「お前にレインボー！！！！！！」

「あ、あれ名作やな」

海斗は逝った。

その後は普通に食事を取り、再び図書館自習室。
海斗？

ご想像にお任せします。

「ねえ、アリサちゃん。ここ分らないけど…」

「ああ、ここは…」

「すずか、ちよつといいかな？」

「うん」

「すずかちゃん、私もええか？」

「……………」

皆、黙々と勉強をしている。

さすがに危機感が湧いたか？

1人だけ顔色がゾンビになっているが。

しかし、あれだな。

人が真面目に何かをやっている時って、邪魔したくなるよな？
なるだろ？

よし、邪魔しよう。

（音耶 in アリサ&なのはコーナー）

「捗ってるか？」

「音耶君。うん、まちまちかな」

「あんた、何しに来たのよ？邪魔するなら、あっち行ってなさい」

「失敬な奴だな。俺も手伝いに着たんだよ」

ふむ、なのはは国語が苦手か。
日本人として恥だな。

「俺も国語は得意だ。なんでも聞いてくれ」

「ありがとう。じゃあ、この文の尊敬語の部分なんだけど……」

「孫・圭吾？」

「え、うん。尊敬語」

孫・圭吾？

中国人か？いや、圭吾は日本人だよな。

孫はきつと、三国時代に活躍した孫家のことだよな。

じゃあ、圭吾は？

やっぱ日本人だよな…。

孫…三国時代…日本人…圭吾…

…はッ！？まさか……。

よし、答えは導き出された…。

「なのは、答えがわかった」

「本当？教えてもらってもいい？」

「ああ…。孫・圭吾…三国時代に呉軍で活躍した武将で、孫家の1人。孫権の弟であり、日本人とのハーフ。享年37歳。若くして病でこの世を去った、悲劇の武将……。わかったか？」

「意味わかんないわよッ！！！！」

追い出されました。
何故だ。

「音耶 in ずか&フェイト&はやてコーナー」

「ういゝす」

「……何しにきたん？」

「なんだ、その帰って目は？
俺は邪魔などせんよ。」

「ああ、お前達に勉強を教えにきた。アリサとなのはには好評だったぞ？」

「ほんまか？アリサちゃんの怒声が聞こえた気がするんやけど…」

「怒声じゃない喜声だ」

「音耶、ここ分かる？」

「フェイトが見せてきたのは、社会の教科書だった。」

『第一次世界大戦』

「戦争か？けど、第一次？」

「第二次が最初じゃないの？」

「けど、一っについてるしな…。」

「知られざる戦争ってことか…。」

「ふむ…」

「やっぱり、わからない？」

「ん…戦争…第一次…知られざる戦争…はッ!？」

「わかったんか？」

「…第一次…聖杯戦争…」

「なんやて!？」

「え? あ、あれ？」

「聖杯戦争がどうかしたの？」

「すずかか…。聞いてくれ、過去に第一次聖杯戦争が行われていたらしい…」

「えっ!？」

「まさか、現実で行われていたんか…」

「じゃあ、時期的にそろそろ第五次聖杯戦争が?…」

「ああ…、既に始まっているかもしれない…」

「「ッ!」？」

「ね、ねえ…三人は何話してるの？」

「すまんな…フェイトちゃん。今は勉強どころの話やないんや」

「そうだね、戦いは既に始まってるんだよ…」

「それで？2人はこれからどないするん？」

「俺は遠坂家に行く。アーチャーに無限の剣製を習いたい」

「わたしは桜ちゃんの所かな？助けてあげたいし」

「私はイリヤの所や。バーサーカーの漢気に惚れた」

「全員別々か…」

「悲しいね…」

「仕方あらへん…。これも聖杯のためや…」

「ッ！？見ろ！！海斗が！！」

「なッ！？海斗君！！」

「生氣を感じられない…。まさか…キャスターが？」

「柳桐寺か！キャスターめ…」

「皆、予定変更や。柳桐寺に行くで」

「うん、海斗君の仇を…」

「ああ、よし！柳桐寺に行くぞ！！キャスター、海斗のk」ガッ！！
なんか、ガッ！！された。

後ろを向いてはいけない気がする。
けれど向いてしまうのが人の性。

「おお…まさかアリサ…、お前がアヴェンジャーだったとはな…」

片手に何故か俺のバックを持った、アリサもといアヴェンジャーが
いた。

笑顔だが眉がピクってるぞ。

「だが捕まるわけには行かぬ。俺は海t「あんた、もう帰れ」異議
を申し立てる」

帰されますた。
何故だ。

時は過ぎ、月曜日。

今日は学力テスト。

勉強を頑張った奴が報われる日。

「さて、今日は学力テストよ。皆、気合入れなさい!」

ホームルームで担任の三十路が話している。

と、なぜかフェイトが手を挙げた。

「どうしたの? ハラオウンさん?」

「あの…海斗が来てないんですけど…」

そういえばいないな。

なんだ? 昨日のミックスジュースで腹でも壊したか?

「ああ、海堂君ね。海堂君は昨日、急性胃腸炎で倒れたらしいわよ。3日ほど入院だって。皆も気をつけなさい!」

ま・じ・か。

そして、テスト返却日。

俺たちは放課後、翠屋に来ていた。
士郎さんは意外と俺に対して普通だった。
別にブルってた訳じゃねえよ？

席に着きケーキやら飲み物を頼んだ。
俺は勿論コーヒーだけ。

「さて、テストの結果を発表し合うわよ！！」

ケーキや飲み物が運ばれた後、アリサが今回集まった目的を口にした。

因みに海斗は復活し、後日テストを受けた。

「あたしは平均92点！！赤点は勿論なしよ！！」

「「「おく！」」」

「じゃあ次はわたしだね。平均91点。アリサちゃんに負けちゃったな」

「「「おく！」」」

「次は私だね。平均70点、赤点は回避できたよ。ありがとう、すずか」

「うん。おめでどうフェイトちゃん」

「次はわたしの。平均52点、赤点なし！ありがと、アリサちゃん！」

「どういたしまして。次は、はやてよ」

「私は微妙やな。平均46点。赤点はなかったわ」

「ま、赤点がないなら良いじゃない」

「そうだよ、はやて。……海斗に比べればマシだよ……」

「言わんといて！？フェイト嬢！」

「……あんた、そんなにやばかったの？」

「……平均12点……。全教科赤点や……」

「」「うわぁ」「」

「ワシなんか、笑えば良いじゃろうが！！」

「ははははははははははッ！！！！！」

「ほんまに笑うん！？」

「で？そこで優雅にコーヒーを飲みながら笑ってる奴。あんたは何点よ？」

アリサがニヤニヤしながら聞いてくる。
俺が赤点だらけだと思っているな。
しかし甘い！甘すぎるよアリサ君！！

「ほら、高貴なる点数だ」

俺は鞆から答案用紙を取り出し、机に放り投げる。
理科の答案用紙が、海斗のケーキに刺さったが気にしない。

「えっと…国語98点!？」

「数学100点なの!？」

「社会は98点!？」

「英語は88点や！」

「理科は96点じゃ…化け物じゃ!!」

「えっと…平均96点っ！すごいね、音耶君」

「どうせ中学生程度の問題。真面目にやればモーマンタイ」

俺の一言で何人かが崩れ落ちた。
中卒とは違うのだよ、中卒とは。

第7話 学力テスト2。マジでやればモーマンタイ（後書き）

意外と頭が良い音耶君。

所詮、中学生の問題だから。

これが高校の問題になると、おそらく赤点があります。

そして海斗。ドンマイッ!!

番外編 海斗の過去（前書き）

こんにちは！

今回は海斗の過去についてです。
過去といっても、原作組との出会いについてですが。

因みにギャグは少なめです。

それと皆様にご報告！！

今日、なんとなくアクセス数を見たんですが、見た瞬間、驚いてコーヒーを吹きそうになりました（笑）

なんと、PV13万突破！！ユニーク15000突破！！しかも、お気に入り900件突破！！

ううううひゃっほおおおおおおおおおおおおおッ！！！！！！！！

まさか執筆4日目で、ここまでいくなんて思ってもいませんでした！

これも皆様のおかげです！！

本当に応援ありがとうございました！！

これから、精一杯精進していきます！！

番外編 海斗の過去

やあ、こんちゃあ!!

ワシの名前は海堂海斗。またの名をダブルシーじゃ!!
かっこええじゃろ?

「おゝいつ、海斗ゝいつまでも寝てんじゃねゝぞゝ」

おっ、姉御が呼びじゃ!

急ぐかの!

「はよ、姉御」

「おゝ、さっさと飯食っちゃえよゝ」

この人はワシの姉御。

ワシが言うのもなんじゃが、中々の美人じゃ。

ただ、24歳になっても彼氏が出来ない可哀想な姉御じゃ。

「海斗ゝ……殺すぞ」

「なんでじゃっ!?!」

「いや、なんかバカにされた気がした」

感が鋭い怖い姉御じゃ。
くわばらくわばら。

「じゃあ、先に行くからな」

「気張ってなあ」

朝、ワシより早く家を出る姉御。

目的は出勤。あれでも一応まじめなんじゃ。

ワシは学校へ行く準備をするため、一度部屋に戻る。

『おはようございます、マスター』

「おはっ、カラミティ!!」

部屋に入ると、ワシのデバイスであるカラミティが挨拶しとくれた。

こいつは父ちゃんから譲り受けた、インテリジェントデバイスじゃ。堅っ苦しいが、良い奴じゃ。

『マスター、早くしてください。遅刻は許しませんよ』

ただ、母ちゃんみたいな奴じゃ。

「ちょっと待ってな。今ふたりに挨拶するわ」

ワシの机の上に置いてある両親の写真。

毎朝、挨拶するのが日課じゃ。

「母ちゃん、父ちゃん、行ってくる。今日も見守っててなあ」

挨拶を終えると、早速学校へ向かう。

今日も1日頑張るかの!!

「虫、春巻き寄越せ」

「虫!?! まあええけど。ってもう食ってるんじゃない?」

昼休み。

いつもの場所で、いつものメンバーと昼食をしている。

最近は1人メンバーが加わって、一層賑やかになったんや。

名前は西野音耶。

不思議な奴で、なに考えてるかようわからん。

けど面白い奴で、今やワシの親友じゃ!

「なあ、私気になってたんやけど、海斗君はなんでこのメンバーにおるん？」

……え？

つまり、ワシは邪魔だと…？

何故じゃ…目頭が熱くなってきたわ…。

「おい狸。なに虫を泣かしてんだよ」

「ちよ、ちよおまちい！そういうことやなくて、海斗君が何でなのはちゃん達と、仲がいいのか気になって！」

「あつ、それ私も思った」

「せやろ？全然タイプ違うやんか、なのはちゃん達と」

「言われてみればそうだな。魔王と虫だから、食う側と食われる側だしな。全然タイプが違う」

「ひどい！？わたし虫なんかたべないの！！」

なのは嬢との出会いか…。

懐かしいなあ、確か9歳の頃やったっけ？

「聞きたいんか？なのは嬢との出会い」

「うん、聞かせてほしいな」

「そか、なら少し長くなるで？」

「なら、言わなくていい」

「聞いてやっ!？」

あれはワシが9歳の頃…

「おいおい、なんか語りだしたぞ、この虫」

く海斗・9歳く

「はあ、今日もつまらんかった…」

ワシは、最近お気に入りの神社へと来ていた。
神社の裏手にある大木に腰を下ろす。

姉御が帰ってくるまでは、いつもここにいた。

両親がこの世を去ってから1年。

ワシは抜け殻のような生活をしていた。

「こんなことなら、転生なんぞしなければよかったのじゃ…」

そう、ワシは転生者じゃった。

事故死したはずのワシは、いつの間にか何もない空間にいて、神とか名乗る爺さんに会った。

爺さんは、ワシを転生させてくれると言った。

転生先は『魔法少女リリカルなのは』の世界。

ワシはそういう知識が無かったため、原作など分からなかった。そして神の爺さんはワシに、2つの能力をくれると言った。だからワシは、

『守れる力』と『ニコポとナデポの能力』が欲しいといった。

『守れる力』は、ワシは原作介入するつもりが無かったので、最低自分だけは守れるように、この能力を選んだ。

結果、ワシは結界やら防御やらの魔法適正が非常に高く、今や結界魔導師として魔導師登録されている。

『ニコポとナデポの能力』は、まあ、若気の至りじゃ。

けど、あの時はまさか、こんな変な能力に変えられるなんて、思ってもなかったのお。

そんなこんなで転生したワシは、ミッドで幸せに過ごしておった。

管理局員の父ちゃんと母ちゃん。同じく管理局員で、おっかないけど優しい姉御。

父ちゃんからはライフルによる射撃技術を、母ちゃんからは魔法を教えてもらった。

おかげでワシは7歳で管理局員となり、天才などと言われていた。

けど、局入りから1年。事件は起こったのじゃ。

とあるロストログア搜索任務を父ちゃんと母ちゃんが受けた。

しかし搜索の途中、偶々違法魔導師の組織と遭遇してしまい、母ちゃんと父ちゃんは殺された。

ワシにとって、衝撃的な出来事じゃった。

それからワシは心を閉ざしてしまい、姉御はワシを心配して管理局をやめた。

ワシも管理局をやめて、姉御と静かに暮らす事にした。

そしてここ、海鳴市へとやってきた。

海鳴市へとやってきて1年。

ワシは姉御のお陰で、ここまで精神的に回復した。けれど、なぜか毎日が昔のように楽しくない。

理由は分かっとなる。

2人の死という事実を、まだ受け止められてないんじゃないじゃ。

1年も過ぎたのに前に踏み出せないなんて、ほんまワシは弱虫じゃ。

「ワシはどないすればええんじゃろ…」

ため息をついた、その時だった。

「ッ！？魔力反応!？」

突然、神社内で大きな魔力反応を感知した。

ワシは驚きながらも急いで表へ周った。

したら、あらびっくり。めっさデカイ犬っころがいたんじゃ。

しかも女の子に襲いかかろうとしている。

ワシは即座に魔法を使った。

「チェーンバインドッ!!」

土色のチェーンが犬っころを縛りつける。

女の子は突然の介入に驚いたのか、その場で呆けていた。

「はよう逃げえ!!」

ワシの言葉で我を取り戻した女の子は、否定するように首を振り、なんやリリカルマジカルなんていい始めよった。ちよっと笑ってしもうたのは内緒じゃ。

その女の子はなんや魔導師らしく、速攻で封印魔法を使った。
犬っころはミニサイズに戻り、一件落着した。
と、女の子がワシに近づいて来た。

「あのっ、ありがとうございます!!」

「気にしないでええんじゃ。君、魔導師よな？」

「え？魔導師？」

「え？」

女の子の事情を聞くとどうやら、この子はできたてホヤホヤ魔導師らしい。

しかも、つい最近まで一般人だったらしい。

なんやてそんな子が、魔法を？

答えは、大体フェレットのせいらしい。

とりあえずフェレットを地面に叩き付けてやったわ。

当たり前じゃろ？

何、一般人巻き込んだるんじゃ。

「仕方ないのお、ワシも手伝ってやるか」

「えっ!?! いいんですか!?!」

「ああ、こう見えても凄腕の結界魔導師じゃっ!!」

「あ、僕も結界魔導師です」

なんやて。

〽回想終了〽

「これがワシとなのは嬢の出会いじゃ」

ワシは魔法の事を隠して、大体の経緯を話した。

「ほゝ、中々衝撃的な出会いやな」

「それでその後、色々あって仲良くなったんだよね」

「せや、アリサ嬢とすずか嬢に会ったのも、なのは嬢に紹介されてな」

「しかし、暗い虫か…。想像できねえな」

「確かにあん時は暗かったのう。ま、なのは嬢見てたら吹っ切れたけんど」

「それわかるよ、なのは見てると和むよね!!」

「百合は黙ってろ」

「百合！？違うよ、私は……」

フェイト嬢が必死に抗議している。

しかし、あれから4年かあ。

ほんま色々あったわ。

なのは嬢の手伝いをしたり…

アリサ嬢とすずか嬢に出会ったり…

フェイト嬢と戦闘したり…

そういえばクレスと出会ったのも、そんな時やったな。

たしか、アースラに乗ってた管理局員だっけ？

そんで、フェイト嬢の母親が逝ったり…

フェイト嬢と和解したり…

ほんま色々あったわ…。

「フェイトちゃんは、ほんまなのはちゃんLOVEやなあ」

「も、もう！はやてまで！！」

そういえばはやて嬢と出会ったのも、その後じゃったな。

守護騎士との戦闘…

はやて嬢との出会い…

防衛プログラムとの戦闘……あつ、確かあん時はムカつくことがあったな。

皆が頑張ってる時に、いきなりクレスが出てきて防衛プログラム破壊したからなあ。

あん時のドヤ顔はウザかったわあ。

今まで一度も手伝わんかったくせに。ひとりだけいいところやで？
マジむかついたわあ。

「おい、虫。お前も百合犬に何か言ってやれ」

「また虫！？フェイト嬢」

「海斗、私百合じゃないよね！？」

「……百合もアリじゃっ！！」

「海斗まで！？」

色々大変なこともあったけど…

母ちゃん、父ちゃん、ワシは今幸せじゃ！！！！！！

第8話 厨二襲来。マジで帰れ小僧（前書き）

死んだ…。

明日からバイト4連勤…。

冗談抜きで死ぬお…。

第8話 厨二襲来。マジで帰れ小僧

新学年になり、早1ヶ月。

学力テストという戦場を乗り越えた兵士達（生徒）は、思うがままに学園生活を満喫していた。

それは、我がクラスも例外ではない。

「アリサちゃん、がんばれー！！」

「バニングスさん、ファイトー！！」

「西野、気張れやああ！！」

「高町さんだけは守れえ！！」

ドッジボール。

遙か昔、世界を侵略した悪魔達が考え出したゲーム。捕まえてきた人々に、生を賭けてやらせた魔の球技。アウトになった者から殺されるという、残酷な遊び。それがドッジボールだ。

我々はオリエンテーションで、その忌まわしき闇のゲームを行っている。

チームはクラスを半分に分けた総力戦だ。

「ど、ど、どうしよう！？音耶君！？」

「どうするんじゃ？音耶」

「とりあえず、絶体絶命だ」

現在クラスのほとんどの者が死んでしまい、我がチームで残るは俺、なのは、海斗の三人だ。

はつきり言って不安で仕方がない。

対して相手チームはアリサ、フェイト、すずかという運動神経抜群の3人娘だ。

はやて？

ああ、あそこで応援してる奴？

「さあ、もう諦めなさい！あんた達じゃ私達に勝てないわよ！！」

「諦めたら試合終了、って安西先生が言ってた」

バーニングアリサが何か言っているが気にしない。
そう、諦めたら試合終了だからな。

「だったら死になさい！！」

「ちっ、魔王！今こそ覚醒の時だ！！」

「ええ！？」

くそ、魔王は役立たずか…。

と、アリサがボールを投げてきた。

狙いは…魔王か！！

「きゃああああ！！？」

「なのは嬢！？」

「ちっ！聖なるバリア、ミラーフォース！！」

「え？ちよつ、音耶なにSゴフオオツツツ！！！！」

なのはに迫っていたボールを、海斗が身を挺して防いだ。
海斗：良くやった：お前は虫の中の虫だ！！

「お、音耶君？」

「何、気にするな。女を守るのが男の使命だ。お前は俺の後ろに隠れている」

「~~~~~！？音耶君……」

そんな見つめんなって、照れるじゃねえか。
さて、尊い犠牲を払ってここまで来たんだ。
絶対に負けられん！！

「アリサ、一騎打ちだ」

「ふん、かかってきなさい！！」

「残念だがお前の負けだ。俺のショットは108式である！おとおとおおおッ！！！」ビュンッ！！

「くっ！！」バシッ！！

と、止められた…だと…。
俺の108式が？おいおい冗談はやめてくれ。

「ふふっ、全然ちよろいわよ!!」

「くっ! C組のモビルスーツは化け物か!？」

「意味がわかんない、わよっ!!」ビュンッ!!

「音耶君!？」

俺に狙いを定めてきたか!？
しかし、遅すぎる遅すぎるよアリサ君!!

「ローリングッッ!!」

「え…きゃん!!??」バコン!!

「」「」「あ」「」

「……………何故魔王が俺の後ろにいる」

「あんたが隠れてろって言ったんでしょ!!」

言ったっけ？

「なのは、大丈夫？」

「ううっ…鼻がいたいのに…」

「反省はしている。しかし後悔はしてない」

「してよ!？」

昼休み。

ボールにキッスしたなのは、そのまま気絶してしまい保健室へと運ばれた。

戻ってきたのはいいんだが、今だ鼻を押さえている。まったく、軟弱な奴だ。

「まったく、アリサが本気で投げるから…」

「あんたが避けたんでしょ!!」

「うわっ、人のせいとか。親の顔が見てみたいわ」

「あ、あんたねえ…!」

「まあまあ、アリサちゃん落ち着きい。なのはちゃんも大事なくちゃよかったなあ」

「せや、ワシなんか食い物が喉に通らへんで？」

「海斗君、病院行った方がいいよ」

そんなこんなで、いつも通りほのぼのしている時、事件は起こった。

「なのはッ！！！！！」 バタン！！

突然、教室のドアを乱暴に開いた大きな音。

そして、魔王を呼ぶ大きな声。

振り向くと…

「ま・た・お・ま・え・か」

厨二がいた。

厨二はものすごい剣幕で、なのはに詰め寄る。

「なのは、大丈夫かい！？大怪我をしたって聞いたんだけど！？」

「く、クレス君！！近い近いっ！！」

「ああ…無事そうでよかったよ…。ッ！？なのは、鼻が赤くなってるじゃないか！！！？」

「こ、これは、ボールが当たって…」

「ッ！？なのはの顔にボールがッ！？」

「ちなみにコイツのせいや」

「ちよっ、余計な事を」

キモイほど心配する厨二に、狸が余計な事を言いやがった。
厨二はホラーばりに首をグリンツして、俺を見てきた。

「また貴様かッ！　いったい貴様は何がしたい!？」

「生きていたい」

「「ぶはっ!」」

おい、何故笑う、狸と虫。

「貴様ッ！　また僕を馬鹿にしてえ!!」

「俺はいつだって真剣だ」

なんかもう厨二の顔が放送禁止になっている。

「大体貴様は何なんだ!!　何故なのは達と一緒にいる?!」

「俺に聞くな。俺は被害者だ」

こいつらが俺に付きまとうんだ。

いや、別にいいんだけどね。

何気に話合うし。

けど、魔王はちょっと…。

「なのは!　何故こいつと仲良くしてるんだい!？」

「えっと、友達だからだよ？」

「ッ!？　友達…だって？」

厨二は驚きに満ちた表情をしている。

お前あれだよ、きつと顔芸で食っていけるよ。

「友達……ッ?!…そうか、貴様もなのはを…」

何1人でブツブツ言ってるの?

はっ!? これも厨二特有の症状か!

「おい貴様」

「なんだ厨二?」

「っち! 本当にムカつくやつだな…。まあいい…貴様は、なのはが好きなのだろうか?」

「にあ!?!」

what?

ナノハガスキ?

おいおい、冗談は厨二病だけで勘弁してくれよ。

「貴様はなのはが好きだからこのグループに近づいた。違うか?」

「全然ちげえよ。なんだお前、頭でも湧いてんのか?」

「はっ! それは僕の台詞だ。煩惱にまみれた俗物が」

「あ? てめえ人の話聞いてたか? ちげえって言ってんだろ」

「言葉ではそう言っているが、中身はどうなんだろうね? に・し・

の・君」

あ、今のはイラッてきた。

大体なんなのコイツ。いきなり出てきてペチャクチャと。

シューズの中にクワガタ入れとくぞ、このヤロー。

「あれ、凶星かい？」

「てめえ、人が黙ってれば言いたい放題言いやがって。なのはが好き？はっ、誰が魔王なんか好きになるか。自ら魔王の下僕になるほどMじゃねえんだよ。つか、なのはの事を好きなのはテメェだろ？もしかして俺への嫉妬で、今まで絡んできたのか？うわっ、男の嫉妬とかマジきめえ。大体、俺が魔王を好きになるなんてありえねえんだよ。俺が愛する女性には雪音だけだ。雪音マジカワユス。つかお前、魔王に好かれてえなら厨二卒業しろや。てめえが近くにいてるだけで恥ずかしい思いをするってわかんねえのか？さすが頭沸いてる厨二だな。そんな事もわからないなんて。わかったらさっさと失せろ。てめえが近くに居っとk「ちょ、もうええやん！！ストップストップ！！」……ちっ」

「ふ、ふん！貴様が何を言おうと、僕は騙されないぞ！！」

「あ？まだわかんねえのか？」

「ちょお落ち着きいや、音耶君！！確かにコイツがうざったいのは、ようわかるけど！！」

「言っておくが、君になのはは渡さないからな！！なのはは僕のものだ！！」

そう捨て台詞を残して、厨二は教室から去っていった。
つうか、なのはは僕のもの、だって。
マジキモす。

「……魔王も災難だな。あんな奴にす………何故泣いている」

振り向くと魔王が泣いていた。
しかもマジ泣きだ。

「ふえっ…グス…えぐっひくっ…」

「音耶君、いいすぎだよ…。なのはちゃん可哀想…」

「アンタ最低ね」

「ストレートに、お前にチャンスなど存在しない、って言われたも
同然じゃからな」

「なのはを泣かせたなのはを泣かせたなのはを泣かせたなのh…」

何故、俺が悪者になっている？
つうか、忠犬フェイトがやばい。

「自分の胸に聞いてみい。そういえば、音耶君の言ってた雪音って
誰や？」

「ワシも気になったわ。愛する人言うてたもんな」

「雪音は俺だけの聖女だ」

「いや、わからへんから」

「ふむ、雪音は愛しい愛しい妹だ」

「え？アンタの妹さんって亡くなったんじゃ…」

「勝手に殺すな。現在進行形で元気だ」

「」「え？」

何故驚く。

「はあ…今日は本当に面倒だった…」

現在俺は、マイホームのリビングに居る。

結局、いつまでも泣き止まなかった魔王に、俺はDO☆GE☆ZAをした。

マジで理不尽だ。

「おにいちゃん…」

おお、My Angel雪音。

俺を癒してくれるのか…。

とりあえず雪音を膝の上にセットする。

甘い香りが俺の心を癒してくれる。

逝った時のネロのような気分になった。

「おにいちゃん…社会のテスト…百点だった…」

「お、良く頑張ったな。今日は雪音の好きなもの作ってあげるよ」

「……やた」

ああ、マジかわゆす。

一生雪音に抱きついていたいお。

その時、ケータイの着信音になった。

誰だ、俺の至福の時間を邪魔する汚物は。

ケータイを開き、ディスプレイを恨めしく見る。

ディスプレイに出ている文字は、

『半狸（早く狸になりたい）』だった。

ピッ

「汚物は消毒だあ！！ヒヤッハーーーー！！！！」

『ちよっ、世紀末とか』

「で、何のようだ？」

『いきなり普通になったな。突然やけど明日暇？』

「暇じゃない。雪音を一日愛でないと」

『よし、暇やな。明日私ん家で鍋パーティーするから、よかったら参加せえへん？ 勿論妹さんも連れてきてええで』

「全ての判断は雪音に委ねる。雪音、狸が話たいって」

「狸さん…？」

「ああ、狸さんだ」

俺はケータイをスピーカーモードにして、雪音に近づける。

「……こんにちわ」

『ああ、妹さんやな？ こんにちはわあ』

「狸さん…？」

『たぬッ！？ 音耶君…後で覚えときい…。雪音ちゃん、狸ちゃうで。はやてさんや』

「覚えてたらな」

「はやて…さん？」

『せや。それでなあ、明日鍋パーティーするんやけど、よかったらウチに來いひん?』

「鍋……食べ放題?」

『うん、たんまりあるでえ』

「……行く」

『そか、ほな待ってるわ。じゃあ、兄ちゃんに代わってもらってもええか?』

「……うん」

俺はスピーカモードをオフにして、再び耳に持ってくる。

「てな訳で、明日参加な」

『わかったわ。それにしても音耶君』

「なんだ?」

『雪音ちゃんの声たまらんなあ。まさにAngel voiceや』

「よし、肉は俺に任せろ」

『え? あ、おおきに。ほな、また明日な』

「おお」

ピッ

「雪音、明日は鍋パーティーだ！」

「…わーい」

可愛いなあ、雪音は。

しかし狸よ。良くわかってるじゃないか。

第9話 鍋パーティー。マジで幼女だ（前書き）

こんにちわ、二足歩行犬です！！

皆様には様々なご感想をいただき、本当に感謝しています。

その中でも多かったのが、なのはフラグについてです。

なので、補足として説明しておきます。

なのははまだ、音耶君のことが気になってるだけです。

まだなのは自身、好きという気持ちに気づいていません。

泣いたり構ってもらおうとしているのは、あくまで音耶君にボロクソ言われたり、もっと音耶君を知ろうとしているからです。

なので、なのはは『まだ』純粋な少女です。

なのはについての詳しい事は、近々予定している番外編にてご確認ください。

では、本編へどうぞ。

第9話 鍋パーティー。マジで幼女だ

土曜日。

本日は八神家の鍋パーティーへと、ご招待されました。
で、現在リビング。

「お前達！鍋は食いたいか！？」

「おーーーー！！」

「おー…」

「よし、いい返事だ！！イガグリ、肉は持ったか！？」

「うっす！！」

「雪音、今日も可愛いぞ！！」

「…おにちゃんも、かっこいい…ぞ…」

「ヒャッハーーーーー！！気分は最高潮だ！！イガグリ、今の時間ハ！？」

「2時っす！！」

「2時だな！迎えの人との待ち合わせの時間は！？」

「1時半っす！！」

「完全に遅刻だ」

「どうすんだよ兄貴!？」

「お前が素振りしてたから遅れた」

「兄貴だって姉ちゃんとイチャイチャしてたろ!!」

「雪音分を補充してただけだ。なー？」

「…なー」

「もう!早く行こうぜ兄貴!!」

「うむ、これ以上待たせるのも悪いか。では、出陣だ!!」

俺たちは迎えの人との待ち合わせ場所である、図書館へと向かった。

「さて、この辺のはずなんだが…」

図書館に着いた俺たちは、目的の人物を探している。

はやてから聞いた話では、迎えに来る人はピンクの髪をしたボインさんらしい。

きっとニート侍のことだろう。

「なあ兄貴、あの人じゃない？」

隣にいたイガグリが指差す先には、ベンチに座り目を閉じたピンクボインがいた。

一見、落ち着いた雰囲気で座っている。

だが、俺にはわかる。

あいつは切れている。

だってオーラがパネェっすもん。

「イガグリ、確認して来い」

「え、俺が？やだよ」

「いいから行け。何か言われたら「とりあえず、そうっすねWW」って応えとけ」

「だから俺はや「素直な男子はモテるらしいぞ？」オーケー。俺に任せな!!」

ふむ、俺らは傍観させてもらおう。

逝って来い、イガグリ。

「あの、すみません」

「む？ 貴様が西野音耶か？」

「とりあえず、そうっすねww」

「遅れてきた者の態度とは思えんな。貴様、今何時か分かっているのか？」

「とりあえず、そうっすねww」

「……からかっているのか？」

「とりあえず、そうっすねww」

「主はやてから聞いていたが、本当に度胸のある奴だな」

「とりあえず、そうっすねww」

「どうやら私の剣の錆になりたいようだな？」

「とりあえず、そうっすねww」

「ほう、ならばその望み叶えてやろう」

「とりあえずって?! なんで木刀もってんすか!? あ、やmがああ
あああああ!?!?!」

「で、本物の西野音耶だ」

ボコボコにされるイガグリがあまりにも不憫なので、仕方なく姿を現してやった。

ピンクボインは心なしか肌がツヤツヤになっている。

「ああ、分かっている。先程まで物陰で見っていたろ？」

む、さすがニート侍。

まさか俺に気づいていたとは。

「しかしコイツは一体誰なんだ？」

「イガグリ紫音。俺の愚弟だ」

「本当に変な奴だな。普通、家族が殴られたら怒るものではないか？」

「コイツは痛いのが好きなんだ」

「そ、そうか」

ピンクボインが、紫音に可哀想な眼差しを向ける。
ドンマイ紫音！君の評価はガタ落ちさ！！

「では自己紹介しよう。私はシグナムだ」

「西野音耶とは俺の事だ」

「……雪音…」

ふむ、やはり雪音は恥ずかしがり屋さんだな。
だが、そこがいい！！

「では八神家へと案内しよう。着いて来い」

「うい。おら、さっさと起きろやイガグリ」ドゴッ！！

「あう！？はッ！？ここは一体？」

イガグリも起きたようだし、さっさと行くか。
俺たちは、ピンクボイン改めシグナムの後を追った。

「主はやて、ただいま戻りました」

「主はやて、ただいま戻った」

「主…はやて。ただいま…戻り…ました…」

「主はやて!! ただいま戻ったす!!」

「おかえりシグナム。いらっしやい音耶君、雪音ちゃん。で、あんたは誰やイガグリ」

「イガグリじゃないッ! 坊主だ!!」

「似たようなもんやろ。で、あんたは誰や?」

「西野紫音!! 兄貴の弟だ!!」

「ぶはっ! ちょっ、坊主なのに紫音とかっww」

「笑ったな! 俺だって恥ずかしいんだよ!!」

「まあ怒んといてな。歓迎するで紫お、つぶはッ!! ww」

「いつまでも笑ってんなや、狸」

「ああ、久々にこない笑ったわ。みんな改めていらっしやい」

こうして八神家に着いた俺たちは、狸に歓迎されてリビングに通さ

れた。

リビングに入ると、そこには：

「あつ、シグナムおかえり。随分遅かったな」

幼女がいた。

「くっ！実際目になると、なんて破壊力だ！？」

「変なことしたら怒るで？ヴィータ、紹介するわ。こちらが西野音耶君。それで妹の雪音ちゃんに、弟の紫音くんや…ククっ…」

「ああ、はやての言ってた奴？あたしはヴィータ、よろしく」

「…よろ」

「よろしく！！」

「……………」

「？？？どないしたんや、音耶君？」

俺の目の前には幼女がいる。

気の強そうな目に、背伸びしたかのようなしゃべり方。
ツンデレ幼女か！？

ああ、八神家のモビルスーツは化け物か！？
これは……愛・で・な・く・て・わ！！

「ぬぁゝ、なんだお前かわゆいなぁゝ」

「あつ、頭を撫でるな!!」

「お菓子食うか？アイスもあるぞ？」

「アイス！？食う!!」

「そかそか。ほら、ハーゲン○ーツだ」

「おお、これギガうまだよな！なんだお前、いい奴だな!!」

「ありがとよ、俺のことは音耶って呼んでくれ。または兄ちゃん、にいにいでも可」

「そうか、よろしくな音耶！」

「ああ、よろしくヴィータ」

いつかヴィータの兄になりたい、今日この頃。

「こっちがシャルマルで犬の方がザフィーラや」

「よろしくねゝ音耶君」

「……………」

「ああ、よろしく。しかしあれだな。デカ犬、お前無愛想だな」

「…ッ!？」

「デカ犬やのうて、ザフィーラや」

「……わんわん」

「こんなデカイ犬はあまり見ない。お前アレだろ？もののけ姫に出てたよな？」

「……………」フルフル

俺の問いに犬は首を振った。

ちよっ、人の言葉理解してるとか。

そういえばこの犬、元は人間だっけ？

確か…た…た…縦の主語銃だっけ？忘れちゃったよ。

「そういえばこの後、なのはちゃん達も来るで？」

「ま・た・ま・ま・お・う・か」

「それまでは寛いでてやあ」

なんだ魔王も来るのか。

となると、他のメンバーも来るな。

ちっ、雪音に悪影響を及ぼさなければいいんだが…。

「なあ音耶君」

「なんだ？」

「雪音ちゃん…抱いてもええか？」

「だが断る」

俺たちは八神家にあった大乱闘なゲームをしている。
俺はゴリラを。

ヴィータは大食い丸男を。

はやてはオレンジ機械女を使っている。

しかし機械女、コロコロしまくっててウゼエ。

ちなみに雪音はデカ犬と戯れている。

イガグリはシグナムに剣の稽古をつけて貰うんだって。
魔法の事は言わないって約束で了承した。

リミッターも掛けて来たし、まあ、ばれないだろう。
シャマル？

ああ、いたなそんな奴。

「よっしゃあ！ハンマー取ったぜ！！」

「よし、はやてを潰せ」

「任せろ！！轟天爆碎！！」

「ちよっ、ヴィータはそんな事せえへんよな！？ええ子やもんな！
？」

「ギガント…シュラーク！！！」

「ああああああああ……」

ヴィータの一撃は文字通り粉碎…いや、飛ばした。
はやてはコントローラーを持ったまま、チーンってなってる。

「「いええい！！」」パシン！

「2人がかりなんて卑怯や…」

ヴィータとハイタッチを交わす。

何だろう。凄くヴィータとの距離が縮まった気がする。

ヴィータに兄ちゃんって言われる日も近いかな？

うへへ…。

続く！！！！！

第10話 鍋パーティー。マ・ジ・か（前書き）

今回は長めです。

では、本編へGOー！！

第10話 鍋パーティー。マ・ジ・か

「へえ、包丁の扱いうまいなあ」

「家でやってるからな」

6時。

八神家の食卓に参戦することになった西野家。

長男という重い役職に就いている俺は、鍋パーティーの準備を手伝っていた。

因みに、次男は汗を掻いたため風呂を借りている。

西野家のマリア様こと雪音は、遊び疲れたのか、デカ犬に寄りかかって夢の中へ行っている。

しかし可愛いお、雪音。

眠ってる姿はまるで天使のようだ。いや、むしろ天使が霞むくらい美しい。

もうダ・ヴィンチに描いてもらいたいくらい。

「西野、少し尋ねたいことがあるのだが」

「あん？なんだよ」

「紫音に剣術を教えたのはお前か？」

「いや、あいつの我流だ。俺は剣術なんてできねえし」

「そうか？しっかりとした太刀筋をしていたから、てっきりお前が教えたのだと…」

「だから剣術はできねって」

マジでイガグリののは我流だしな。

太刀筋がしっかりしているのは、きっと修行の賜物だろう。

つかシグナムが、さっきから何か探ろうとしているのは気のせい
か？

「シグナム、紫音君凄かったん？」

「はい、まだまだ青いですが、将来はいい使い手になるかと」

「へー、意外やなあ。そういえば、紫音君って何で剣術やっとなるん
？」

「最近は何騒だからな。自衛手段としてやってんだろ」

「自衛手段か…。すまん、つまらぬ事を聞いたな」

「気にすんな」

俺に質問を終えたシグナムは、リビングのソファーへと戻っていつた。

シグナムがあんな事聞いてくるなんて、イガグリがなんかやさしかったか？

つかシグナム、てめえ暇なら手伝えや。

所詮はニート侍だった。

「あっ、白菜買い忘れとったわ…」

「なんだと」

「「「お邪魔します」」」

「邪魔すんなら帰れ」

「いらっしゃい、みんな」

7時。

ちょうど鍋の準備が終わった頃、魔界生物御一行がきた。
メンバーは魔王に魔犬に魔虫。
バーニングと類友は用事で来れないらしい。

「はやてちゃん、これお母さんが持っていきなさいって」

「ケーキやないか。ありがとうなのはちゃん」

「はやて嬢、お土産じゃ」

「のり…。お歳暮の残りやな」

どうやら魔王と魔虫は土産を持ってきたようだ。
ケーキを持ってきたこと褒めてつかわす。
雪音が喜ぶだろう。

「で？お前は？」

「え？私？」

「おいおい、まさか貢物持ってきてねえのか？」

「あ、うん。持ってきたほうが良かった？」

「当たり前だろ。人の家にお邪魔するのに土産がねえとか。常識考
えろや。それとも、飼い主が持ってきてるからいいってか？はっ、
育ちの悪さが手に取るようにわかるな」

「気にせんでええで、フェイトちゃん」

「……育ちが悪い…」

「どうすんねん！フェイトちゃん落ちこんどるやないか！？」

「しかし俺も鬼ではない。犬、お前にチャンスをやろう。お前が見
事こなせば、さっきの言葉は撤回してやろう」

「ど、どうすればいいの？」

「5分以内に白菜と焼きそばパン買ってこいや」

「白菜と焼きそばパンだね？ うん、すぐに行ってくるよ！！」

バタンツ！！

「アンタ最低やな」

「鬼なの」

「フエイト嬢がパシリになってるんじゃない」

俺は悪くない。あくまで教育だ。

八神家の人たちと挨拶を交わした魔界生物コンビは、見かけぬ二人に首をかしげた。

ちなみに雪音は眠りから目覚めて、2人を凝視している。

イガグリは絶賛スクワット中だ。

「ああ、この子達は音耶君の弟君と妹さんや」

「音耶君、弟もいたんだ。はじめまして、わたしは高町なのは」

「ワシは音耶の親友の海棠k「虫だ」虫じゃないけん!？」

「俺は、弟の、フンツ、西野、紫音、っす!！」

「…雪音…妹…」

恥ずかしがる雪音、かわいいお。
イガグリはスクワットやめろや。

「よろしくね雪音ちゃん、紫音君」

「親友の家族や、可愛がってやるんじゃ!」

「うっす! 虫の、兄貴と、魔王の、姉さん!！」

「…うん…虫のおじちゃんと…魔王さん…」

「虫のおじちゃん!？」

「魔王!？」

ふむ、さすが我が家族。
いい感じに教育されてる。

「音耶君……。2人とも、魔王じゃないよ? なのはさんだよ」

「…な…のはさん…?」

「はう!」

魔王は雪音の上目遣いの餌食になった。
さすが雪音、魔王をも浄化させるとは。

「雪音ちゃんかわいいなあ…。紫音君もなのはさんって呼んでね？」

「うっす！、なのは、のッ！、姉さん！！」

「…にゃははっ、まあいいか」

「今度はワシのことじゃ。呼び方はなんでもええよ」

「…虫のおじちゃん」

「虫の、兄貴！！」

「やっぱりそれ！？」

虫だしな。

「お前らさっきから何言ってるんだ？」

「あ、ヴィータちゃん」

エターナル幼女ヴィータが話に加わった。

音耶の精神力が80上がった。

スキル発動『撫で回す』

「だから撫でんじゃねーよ！！」

「ツンデレかわゆす」ナデナデ

「ロリコンじゃな」

「ロリコンなの」

「ロリコンやな」

「失敬な、あくまで父性本能だ」

「あたしはロリじゃねえ!!」

「」「いや、ロリだろ（なの・やろ・じゃろ）」「」「」

ヴィータがロリじゃなかったら何になる？

あ、幼女か。

「で、お前ら魔王とか虫とか何言ってるんだよ？」

「そうなの！聞いてヴィータちゃん！！音耶君ってば、いつもわたしのこと魔王って言うんだよ!？」

「ワシは虫って言われるんじゃ」

「海斗はどうでもいいけどよ……音耶、なのはは魔王じゃねえぞ？」

「ヴィータちゃん…」

「ワシはどうでもええんか…」

「どっちかと言うと悪魔だ」

「ヴィータちゃん!？」

まさかの悪魔でくるか。

さすがヴィータ。良くわかってる。

「把握。すまん今まで勘違いしてた、デビルなのは」

「!?! 音耶君のばかッ!！」

「音耶君、デビルなのはさすがに可哀想やで」

「結構いいと思うんだが…。しかしあれだな、魔犬も飼ってるし魔王の方がしっくりくるか…」

「どっちもやめてよ!！」

「まったく、協調性のない奴だな。わかった、好きなほうを選ばしてやるよ」

「あれ? わたし悪くないよね?」

「5…4…3…」

「ちょ、ちょっと待って! ええっと、w 「ただいま! ! はあはあ…」
ふえ、フェイトちゃん…」

「0…。決まらなかったようだから魔王な」

「ううう…」

「なのは？どうしたの！？」

「お前のせいだ、犬。で？白菜は買ってきたか？」

「え、私のせい？うん、白菜は買ってきたよ」

「よくやった。褒めてつかわすぞ」

「ありがと。あと、はい。焼きそばパン」

「は？」

「え？」

焼きそばパン？何買ってきてんの、こいつ。
白菜買って来いって言ったよな、俺？

「さて、グループ分けを決めるか」

フェイトも帰ってきたので、俺たちは鍋パーティーを開始すること

になった。

大きいテーブルを引っ張り出し、ソファの前に設置する。
つまりテーブルは2つ。

だから2つのグループに分かれなければならない。

「俺と雪音とヴィータが一緒なのは決定事項だから…あと2人か」

ここにいるのはデカ犬を除いて10人。
つまり5・5に分かれる。

「適当でええんちゃう？みんな仲ええし」

「バカ野郎、適当でいい訳ねえだろ。雪音に悪影響及ぼす奴が一緒だと困るんだよ。そんな事も分からないのか。だからお前は狸なんだ」

「よう分かったわ。とりあえず一発殴らせろ」

「だが断る」

「早く決めて飯食おーぜ」

「だな。じゃあヴィータが決めていいぞ」

「あたしははやてがいい」

「よし狸、お前はこっちだ」

「まあええけど」

狸が仲間に加わった。

あと1人か。

と、俺が誰にするか考えていると、魔王が期待を籠めた瞳で見つめてくる。

簡単に言うとおれだ。

捨てられてる子犬の目だ。

「だが俺はスルーのできる人間」

「兄貴、俺シグナムの姉さんがいい!!」

「よし、イガグリはシグナムと一緒に。と、なると残るは…」

「ワシはどっちでもええんじゃ」

とりあえず虫は却下。

なんか危ねえ。

「私もどっちでもいいですよ」

「ん?……誰だお前?」

「シャマルです!!」

「ああ、マル子ね。つうかお前いたんだ」

「ずっといたわよ!?!? ってマル子!?!」

うるせえ奴だな。影薄いくせに。

とりあえずお前も却下。

存在の薄さが感染しても困る。

「わ、わたしもどっちでもいいかな？（チラッ）」

「じゃあ、あっちな」

「ふえ！？」

なに残念がつてんの？どっちでもいいって言ったじゃん。つうか、こっちには来させない。

お前は色んな意味で危ないからな。となると、残りは…

「フェイト、こっちに来い」

「私？うん、わかった」

「な、なんでフェイトちゃんはそっちでいいの！？」

「なんでって…一番無害そうだし、ピュアだから」

「確かにフェイトちゃんは純粹やもんな」

「へ？あ、ありがと／／／」

「な？ピュアだろ？」

「た、確かにそうかもだけど…。じゃあわたしは？」

「言っているの？」

「…あっちで食べるの」

なんだ、言っても良かったのに。
てな訳で完成！

心がキレイなチーム+狸と、なんか危ない奴チーム。
こうして鍋は始まった。

く心がキレイなチーム+狸く

「てな訳で鍋を始める。肉の貯蔵は十分か？」

「ええで、というかもう出来とるわ」

「ならいただきますだ。皆さん手を合わせましょう」

「ん？なんやそれ？」

「は？何って…小学校の時やったろ？」

「やったことないわ」

「私も初めて聞いた」

「マ・ジ・か。ったく、最近の小学校は…」

「なんや知らんけど、いただきます」

「」「いただきます」「」

「…わんわんおねえちゃん…あれ食べたい…」

「うん。……はい雪音」

「…ありがとう」

うむ、懐かれてるなフェイト。

雪音は何故かフェイトに懐いている。

ちなみに呼び方は、わんわんおねえちゃん。

実に良く分かっている。

どうでもいいが、イガグリにはフェイトの姉さんって呼ばれてる。
本当にどうでもいいけど。

「雪音、こっち向いて」

「……？」

「口元にご飯がついてるよ」

「…うみゆ…ありがとう」

「あう、雪音は可愛いなあ」

…本当に、良く懐いてるなあ…。

「ちよっ、音耶君！！血い、手から血い出とるから！！」

「ああ…本当だ…。こりゃいけねえ、ははは」

「笑つとるけど、顔がおっかないで…」

「なにを言う。俺はいつだって優男だ。なあ、ヴィータ？」

「おっかねえよ！！こっち向くな！！」

皆してなんだよ…。

グス…お兄ちゃん寂しい。

「なんか危ない奴チーム」

「……はあ…」

「なのはちゃん？」

「シャルさん…」

「さっきからため息ばかりついて、どうかした？」

「たいしたことじゃないんですけど……音耶君ってホントわたしには意地悪だなくって、思ってたりました」

「ああ、音耶君……。あの子って意外と皆にひどいわよね……」

「マシなほうですよ。わたしなんて……毎日魔王……魔王……魔王魔王魔王魔王m「なのはちゃん落ち着いて!!」にやっ!?!わたしは一体……」

「何やってるんじゃない？」

「海斗君。音耶君について話してたのよ」

「うむ、音耶か。ホンマなのは嬢は音耶が好きじゃなあ」

「ふえ!?!?／／／」

「あら!なのはちゃん、音耶君のこと好きだったの？」

「ち、違うの!好きというより、気になるだけなの!?!／／／」

「それを世間では好きと言うんじゃない」

「ほう、高町は西野のことが好きなのか？」

「シ、シグナムさんッ！？だ、だから……」

「そうじゃよ、シグナムの姉御。なのは嬢は音耶にホの字じゃ」

「だから……」

「えーーーーー！？なのは姉さん、兄貴のことSぎゃあああああ
あああ！！」パキンッ！！！！

「……なのは嬢、卵は投げるもんじゃないんじゃない」

「みんなが、わたしのことからかうからいけないのっ！」

「なのはちゃん……」

「高町……」

「そんな目でわたしを見ないでえ」

「ふう、食った食った」

「美味しかったね、雪音」

「……うん」

「はやて、アイス食べていい？」

「ええで」

食事が終わり、みんなで寛いでいる。

なのはとマル子は後片づけだ。

しかしイガグリよ。

お前は何故卵を装備している？ 防御力なんて上がらんぞ？

「ねえ音耶」

「なんだ？」

「雪音って可愛いね。私、あんな妹欲しかったんだ」

「やらんぞ、雪音は俺の天使だ」

「ふふっ、わかってるよ。でも妹っていいよね。私、お兄ちゃんな

らいるんだけど…」

ああ、そういえばコイツも妹だっけ？
ん？妹？

「フェイト、ちょっとこっち来て」

「どうしたの？」

「ふむ」なでなで

「お、音耶！？／／／」

「おお、案外悪くない…」なでなで

「きゅう／…／／／」

「……何やっとなるん？」

「いや、フェイトも妹だったな／、と思って」

「あんたシスコンやったな…」

「それは認める。妹LOVE」

妹はいいよ。癒される。

しかしあれだな。

結構フェイトも癒されるな。

純粋で素直で金髪の妹……アリだな。

「フェイト」

「な、なに？／＼／＼」

「俺の妹になれ」

「妹！？」

「ぶっ！！あんた何言つとるん！？」

「フェイトが妹ってのもアリだと思う」

「あんた妹居るやないか！？」

「妹は何人いても困らない。あつ、勿論一番は雪音だが」

「妹萌えのロリコン……いつか捕まるで？」

「やましい気持ちなどない。あるのは父性本能だ。てことで、今日からお前はフェイト・T・西野だ」

「ど、どうすればいいの！？助けてなのは！！」

「うち、飼い主を呼んだか。」

「だが、あたふたするフェイト……アリだな。」

「どうしたのフェイトちゃん？」

「お、音耶が妹って……」

「? ? はやてちゃんどういうこと?」

「実はな、音耶君はロリコンで妹萌えだったっちゅうことや」

「ロリコンじゃねえ。妹好きは認める」

「で、妹属性を持ってるフェイトちゃんを、毒牙にかけようとしてたんや」

失敬な。

やましい気持ちなど一切ない。

ただ、お兄ちゃんって呼ばれたいだけなんだ。

「妹萌え……音耶君、わたしも妹だよ?」

「魔王が妹とかww一寸先は魔界ww」

「なんでわたしだけ…」

「む、もうこんな時間か」

時計を見ると、10時になっていた。
随分話し込んでしまったようだ。
そろそろ帰るか。

「じゃあ、そろそろ帰るわ。雪音、帰る…ぞ…」

「……んにゃ…」

雪音は既に夢の中のような。
つかフェイト。
誰に断って雪音を膝枕している。

「ごめんね。撫でてたら寝ちゃった」

「いや、背負って帰るから別にいい。イガグリ、帰る…ぞ……お前
もか」

「がー……うへへ…」

イガグリも夢へと旅立ったようだ。
つかニヤけんなや、きめえ。

「っち、雪音は背負って、イガグリは蹴って帰るか」

「そんな石やないんやから」

「頭が石っぽいだろ？」

「確かに……。そや、今日は泊まってけばええやん」

は？泊まる？八神家に？

まあいいか。

俺の辞書に遠慮の文字はないしな。

「なら好意に甘える。今日は世話になるぞ」

「わかったわ。みんなもどうや？」

「私も泊まらせてもらおうかな？」

「ええで。なのはちゃんは？」

「わたしもお泊りするの！」

「やっぱ帰るわ」

「急に何言っとんねん」

「いや、魔王がいるし寝込みを襲われたらたまらん」

「そ、そんなことしないもんッ！！／＼／＼」

「勘違いしてるようだが、食われるって意味だぞ？それに服がない」

「あゝ偶然やなく、なぜか家に男物の服があったわゝ」

「謀ったな孔明」

「てな訳で泊まりは決定やな」

マ・ジ・か。

続く!!!!!!

第10話 鍋パーティー。マ・ジ・か（後書き）

てな訳で次回に続きます。

次回はお泊り編！！

音耶は無事に家に帰ることができるか！？

第11話 予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん（前書き）

八神家編も今回で終了です。

ちょっと長めかも。

そして今回は、残念な頭をしている患者さんが登場！！

では、本編へどうぞ！！

第11話 予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん

八神家に泊まることになった西野家&魔王御一行。
泊まると決まれば、当然することもある。

それは入浴。

己の身体を清めるという聖なる儀式。

しかし、事件は起こった！！

あれは…私が中学二年生の時、友達の家へ泊まりに行ったときのことです。

トウルルル〜ル〜♪

〜ついさっき〜

「じゃあ皆、先に入浴してええで」

「そう？じゃあ雪音、一緒に入ろうか」

「……うみゅ…」

「にやははっ、凄く眠たそうだね」

「雪音かわゆす」

「行こっか雪音」

「……う…」

こうして雪音とフェイトは風呂へ向かった。
しかしその数分後：事件は発生する…。

「男共、覗いたらあかんぞ？」

「覗くか。俺たちは紳士だ」

「せや。ワシ達以上の紳士は見た事ないんじや」

「まあ、ならええんやk」「ひゃあああああ!!」(~~~~~
「!?!?!」「ッ!?!」

「はやてちゃん、今の!?!」

「悲鳴やな、ちょっと見てくるわ!男共は来んなや!!」

「もう遅いんじや」

「雪音ええええええええええええええええ!!!!!!」

「あんのっアホ!!行ったらあかんて!!」

雪音、無事でいろよ!!

今、兄ちゃんが行くからな!!

＼フェイトside＼

あうっ、びっくりした。

まさかシャワーが水だなんて。

故障かな？

「びっくりしたね？」

「……びっくり……」

本当に驚いた。

悲鳴もあげちゃったし……／＼／＼／

はやてが来たら言っておこう。

ダダダダダダッ！！！！！！

あつ、はやてかな？

でも、ちよつと慌てすぎじゃない？

ボタンツ!!!

[illegible]

はやてかと思ったら音耶だった。

音耶は雪音を見つけると慌てて抱きつく。

あれ？ 私達、今……！！！！
／
／
／
／

「雪音、無事だったか!？」

「おにいちちゃん……くるしい……」

「ああ、すまん。慌てすぎた。しかしどうしたんだ？」

「シャワー…水だった…」

「水？故障かな…。あの狸…雪音を驚かせやがって」

「それで…わんわんおねえちゃんと…雪音……びっくり…」

「だから悲鳴をあげてたのか。……ん？わんわんおねえちゃん？」

「……そこ…」

「………おお…」

「~~~~~！！！！／／／／」

おおおおお、お、音耶に見られた！！？？／／／／
どどどど、ど、どうしよう！！？？／／／／

「……ひゃ…きゃ…」

「きゃ？…ああ、そのパティーンね」

「きゃ、きゃ…」

「散る前に1つ言っとおく」

「きゃ…」

「妹は貧乳じゃないとイカンッ！！！！！！」

「きゃああああああああああああああああ！！！！！！／

／＼「バシンッ！！！！」

）end（

で、風呂が壊れてたらしく、俺たちは現在銭湯へと来ていた。

「季節は春終盤。しかし今の俺は秋」

「せやな。顔に大きな紅葉がついとるわ」

「痛そうじゃのお」

そう、俺の顔には大きな紅葉がついている。
しかも数十分前にできた、できたてホヤホヤな紅葉だ。

「……………／＼／＼」

「フェイトちゃん、犬に噛まれたと思えばええんや」

「俺は犬の裸を見たと思えばいいんだな？」

「気にしないほうがいいよ、フェイトちゃん」

フェイトはさつきから真っ赤になっている。

魔王の言うとおり、気にしないほうがいいぞ。
俺も気にしてないし。

「フェイトちゃん、漫画でこういうシーンは良くあってな。殴られた主人公は、大体記憶が飛んどるんや。だから、きつと音耶君も忘れてるで。なあゝ音耶君？」

なるほど、そういう事か。

つまり記憶がないと嘘をつけてことだな。

そしたらフェイトも元気になるし、今回ののはなかった事にできる。まさに一石二鳥だ。

「だが俺は素直な日本人。細部までじっくり覚えてます、ごつつあんです!!」

「あんも「いやあああああああ!!!!」
／／／
「バシンッ

紅葉が1つ増えます。

「音耶、ホンマ度胸あるなあ」

「やめろよ、照れるじゃねえか」

「兄貴、ねみいゝゝゝ」

「黙れイガグリ、そしてさっさと服脱げや」

現在、脱衣所。

男メンバーは入浴のために、自らの装備を脱ぎまくっていた。

「なあなあ、どっちがデカイか勝負せえへん？」

「はっ！海鳴市のスカイツリーと言われた、この俺に勝てるだけでも？」

「おお。ワシの如意棒が火を噴くで」

「なに？兄貴達勝負すんの？俺も勝負してえ！！」

「ばかやろー、ガキにはまだ早い」

「さあ、勝負じゃ！！」

ふふふ、残念だったな海斗。

俺の息子は強いぜ？

「俺のターン！！俺はパンツを生贄にし、息子・ジョニーを召喚！！」

「ワシもピンクパンツを生贄に、息子・清二を召喚じゃ!!」

今、俺たちのスピリット・サンが放たれる!!

「なっ!?! 攻撃力5300じゃと!?!」

「俺の息子はアタッカーだからな。そういうお前こそ、防御力4900か…やるじゃねえか」

「ち、やるしかないんか…」

「ああ、いざ尋常に…」

「「決闘!!!!」」

結果は引き分けでした。
いいライバルを見つけたぜ。

「うむ、見事に普通の銭湯だな」

「時間も遅いから、ワシら以外誰もおらへん……いや、おったわ」

海斗の視線の先には、配置されている小さな台に座りながら、目の前の鏡を見て（・ω・）ってしている金髪がいた。

「音耶……ワシ眼科行ったほうがええんかな？」

「現実逃避すんな。アレは間違いなく厨二だ」

「兄貴、あの人なんで鏡に向かって（・ω・）ってやってるの？」

「きつとキメ顔の練習をしてたんだ。可哀想に……そこまで病気が進んでいたか……」

「なあ音耶」

「なんだ？」

「ここは風呂や。そんで風呂には知り合いがおった……もう、わかるじゃろ？」

「把握。おk、先手は俺に任せろ」

「ジョニー、もう一度出番だ。」

厨二は俺が近づいてることに気づかず、まだ（・ω・）をして
いる。

なんというか、アホだ。

「おい厨二」

「ッ！？何故貴様がここにいる！？」

声をかけるとビクッ、ってなって振り向いた。

例えと？（・ω・ノ）ノ！！ってな感じだ。

「それはこっちの台詞だ。それとキメ顔の練習なんてしてんじゃねえよ」

「家の風呂が故障したから来たんだ。それと、キメ顔なんてして
ないッ！！」

「偶然だな、俺たちもだ（・ω・）」

「真似をするな！！本当に貴様はムカつく奴だな……！！」

「ほう、俺がムカつくか？ならば勝負してやろう」

「勝負？…クククッ…貴様ごときが僕に勝てるんでも？」

厨二はイタイ笑みを浮かべながら、顔を手で隠している。
簡単に言おうと厨二病のポーズだ。

「さっさと勝負しろよ」

「ああ、いいだろ。ハンデだ。先手は貴様にやろう」

「後悔すんなよ……。俺は腰に巻いたタオルを生贄に！！ゆけ！ジ
ョニー召喚！！」

「なっ！？貴様、何を見せる！？」

「何って…。風呂で勝負ついたらこれだろ。漢王デュエル息子モン
スターズ」

「知らん！！ぼ、僕はそんな変態じみたことはやらんぞッ！！」

「言うと思ったよ。トラップカード、オープン。『虫のタオル下ろ
し』」

「任せんしゃい！！」

隠れていた虫が飛び出し、厨二のタオルを下ろす。

因みに事前に決めていた作戦だ。

厨二は分かりやすくて助かる。

「クレスの息子、強制召喚じゃあああああああ！！！！」

「や、やめろおおおおおおおお！！！！」

虫の手によって厨二の息子は強制召喚される。

さあ厨二よ！！

いざ尋常に…

「デュエ…ル……………海斗…」

「……………わかつとる…」

「うわっ、俺のよりちっちゃえ!!」

「言うなイガグリ。俺も予想外だった」

「…あ……………ああ…」

「攻撃力1、防御力2ってところか。すまんクレス、軽率じゃった」

「しかも皮のホルスターまで装備してやがる…。……………いい病院を紹介してやろうか？」

まさかワイトよりも弱いとは。
なんかすまん。

「…あああああ…」

「許せ厨二。これも勝負だ」

「せやな。勝者…音耶の息子・ジョニー…」

「き、貴様らあああああああッ!!!!!!!!!!」

俺たちが慰めてやると、いきなり厨二が切れたした。
厨二は右の拳を振り上げ、俺に迫ってくる。

「やっぱ、そういうパティーンね。イガグリ！」

「うっす！！せやああああああああああああ！！！！」

イガグリは俺たちの間に移動し、厨二の右手を掴んで放り投げた。
良くやったイガグリ。

伊達に修行バカじゃない。

「うわあああああああああああ！？」

バッチーーーーーッ！！

「うわ、痛そうじゃ…」

円を描いて飛んだ厨二は、背中からモロに湯船に着水した。
しばらくすると、スウーッと厨二が湯船に浮かんでくる。

「…身体洗うか…」

「せやな」

俺たちはプカプカ浮かんでる厨二に合掌し、身体の洗浄を始めた。

「すまん、遅くなった」

「ホンマ遅いわ。何やってたん？」

「聞くな。ただ…1人が天に帰っただけだ…」

「よう分からんけど。大変だったな」

「ああ…」

俺は、今だプカプカしているであろう厨二に敬礼して、八神家へと歩を進めた。

「とりあえず部屋割りには、男組と女組でええな？」

八神家へと帰還した俺たちは、早速寝るための部屋割りを決めた。

まあ、男と女は普通別だよな。

しかし俺は意義を申し立てる。

「意義あり!!」

「却下。どうせ、雪音ちゃんとヴィータと寝たいって言うんやろ？」

「分かってるじゃねえか。とりあえず虫とイガグリ、雪音とヴィータをトレードだ」

「絶対嫌や。あんたに渡すと何されるかわからん」

なんだと？

それじゃあ俺がまるでロリコンじゃないか。

「ロリコンやろ」

「とうとう心の中まで読むか、狸よ。俺は久々に雪音と寝たいんだ。雪音、お兄ちゃんと寝るか？」

「…うん…」

「よし！ヴィータも俺と寝ような？」

「ん…はやてと寝る…」

「ちっ、つけ込めなかったか」

寝ぼけてるから行けると思ったんだが…。
仕方ない。今日は雪音と2人で寝るか。

「という訳ではやて。もう一部屋プリーズ」

「まあ、雪音ちゃんがいいって言うならええけど……変なことしたらあかで？」

「俺はロリコンじゃない。ただのシスコンだ」

俺を何だと思ってるんだ、コイツは。

まあ、雪音と一緒に寝れるから許す。

「…おにいちちゃん…」 クイクイ

「ん？どうした？」

「…わんわんおねえちゃんも…いっしょ…」

「ッ!？」

「私も？」

フエイトも？

まあ、妹属性あっからいいけど。

「てな訳でフエイト、お前もこっちだ」

「む、無理無理無理!! お、音耶と寝るなんて…／／／」

「何もしねーよ。つうか俺じゃなくて雪音と寝ればいいだろ」

「……おねえちゃん…」 ↑涙目& a m p ; 上目遣い

「うつ……わ、わかった。一緒に寝ようか…」

落ちたかフェイトよ。

まあ、雪音のあれは破壊力抜群だからな。
俺だったら失神ものだ。

「音耶君、フェイトちゃんに何かしたら……わかつとるな？」

「オーケー。だから包丁はしまえ」

「ならええんや。ほな、私達は先に行くわ。おやすみ」

「……おやすみ…」

ヴィータとはやては去っていった。
シグナム達？

あいつらはもう寝たよ。

「ワシも寝るんじゃ。ほなな」

「おやすみっす!!」

今度はイガグリと虫が去っていった。

残るは俺たちか…。

「さて、俺たちも寝る」
「音耶君…」
ま・た・お・ま・え・か

くそっ、気づかないフリしてたのに。

魔王はモジモジしながら俺を見ている。

背のせいかな、若干上目遣いだ。

「……その、わ、わたしも一緒に寝ても……いいかな？」

「だが断る。エデンが地獄と化すのはごめんだ」

「ううっ…また断られたのお」

おいおい、冗談は存在だけにしてくれよ。

「はぁ……おやすみ、みんな…」

魔王は去っていった。

「ねえ、音耶」

「なんだ？」

「なのはにもう少し優しくしてあげたら？」

「俺は優しくしているつもりだ」

「あ…そう」

何故ため息をつく。

「俺たちも寝るか」

「そうだね……って、部屋はどこ使えばいいんだろう？」

「あ」

俺たちは狸を叩き起こしに行きますた。

「……むにゃ…」

叩き起こした狸に部屋を案内させ、部屋に布団を引かせ、俺たちは
やっと寝ることができた。

布団に入って数分。

雪音は既に寝てしまっている。

因みに俺、雪音、フェイトと川の字で寝ている。

「音耶、起きてる?」

「…おお」

ぼー、っとしているとフェイトが話かけてきた。
雪音が寝ているので、若干声が小さい。

「音耶はさあ、雪音のことが本当に好きだよね」

「当たり前だろ。いつだって雪音LOVEだ」

「ははっ、……何か溺愛する理由があるの？」

何言ってるんだコイツは？

溺愛する理由？そんなの決まってるだろ。

「家族だからだよ」

「……え？」

「理由なんてないようなもんだ。家族だから、妹だから大切にする。溺愛する。愛情をたっぷり注ぎ込む。当然のことだろ？」

「家族だから当然……。…そうだよね…」

そういえばコイツって訳アリだったな。

死んだ娘の変わりに作られたんだっけ？

……ああ、思い出した。

確かビリビリ母ちゃんに嫌いって言われたんだっけ。

で、母ちゃんは身投げ…と。

「あのさ、俺はお前の事よく知らんけどよお。お前が悩んでるって事くらいわかるぞ」

「…私ってわかりやすいかな？」

「ああ。すぐ顔に出る」

「ははっ、そっか…」

「ずばり親子喧嘩かなんかだろ？」

「……そうだね。そんなところかな…」

「ふむ。なら俺から言えるのは1つだ」

「なに？」

「子を、家族を愛していない親なんていない」

「！？……どうしてそんな事が言えるの？」

「簡単だ。子を愛すつもりがないなら、最初から子をつくろうとは思わない」

「……けど…子供をつくった後に、愛は消えたりするかもよ…？」

「それもあるかも知れないな。けど、それは本人にしか分からないだろ？」

「確かにそうかも知れど……じゃあ嫌いとか面と向かって言われたら？」

「言われたことがないから分らん。ただ、不器用なだけじゃないのか？ 憎しみと愛は、コインの裏表のようなもんだし」

「そう……もし音耶がそんなこと言われても、音耶は相手を愛せる？」

「愛せる」

「……そっか。音耶は凄いね」

「別に凄くなんかない。つうか、今まで色んな事言っただけ、やっぱり一番大事なのは、自分が相手を愛すことだと思う」

「…自分が相手を愛す…」

「たとえば相手が自分を嫌ってても愛す。憎しみをぶつけられようが愛す。罵倒されても愛す。相手の全てを愛す。相手のありのままを愛す。相手の心を受け止めてやる。愛って漢字は、心を受け止めるって書くだろ？」

「……1画足らない？」

「細かいことは気にすんな。つまり大事なのは自分が愛するってことだ」

「くすっ、うまく纏めたね」

「ホント一言多いな。俺はもう寝るかな」

「うん、おやすみ。……相手にどう思われようと、自分は愛せ…か。…うん、そうだよね」

「音耶…ありがと」

こうして、八神家での夜は過ぎていった。

「あとフェイト」

「ん？どうしたの？」

「俺の妹にならないか？」

「まだ言ってるの！？」

うるさい奴だな。

雪音が起きちまうだろ。

く午後11時50分・銭湯く

「ふく、今日は店じまいだな」

「しかし、なんでウチには客が少ない？24時までやってる銭湯なんて、あまり無いんだぞ？」

「やっぱり外見が古臭いせえなのか？」

ガラッ

「さてと、掃除でもすつか」

「フンフンフン♪あ？なんだありゃ？」

「浴槽になんか浮かん出んぞ？客の忘れ物か」

「なんかいい物だったらしいnって？人！？」

「お、おい！！アンタ、大丈夫か！？」

「…ん……ここは…？」

「アンタ、浴槽で気を失ってたみてえなんだ！」

「浴槽…ああ、銭湯に来てたんだったな…？はッ！？西野音耶！！
あいつは何処にいる！？」

「あん？アンタ以外客はいねえけど…」

「くっそくっ！！あいつ絶対に許さん！！！！！」

ザバァ！！

「ん？貴様、何を見ている？」

「ちよっ W W W 皮のホルスター W W W W」

「貴様もかあああああああああああああああああッ！！！！！！」

今日も平和な海鳴市でした。

第11話 予定変更！お泊り会。なんか…マジですまん（後書き）

音耶君ミニイケメンタイム！！

主人公として初めて活躍してくれた！！

それと音耶君の中で、フェイトへの好感度がグングン上がっています。

次回はついに！！

西野家兄妹の戦闘スタイルが発覚します！！

そして、今まで登場しなかった親達も！！

次回は『西野ファミリー大集合』です！！

お楽しみに！！

第12話 西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた（前書き）

今回でバトルまで持っていくつもりだったんですけど、重大な事を思い出し、次回に持ち越しにしました。
本当にすみません。

重大な事についてなんですが……

音耶のバリアジャケットもとい騎士甲冑が決まってない…。

どうしよう…。

皆様、よかったら音耶のバリアジャケット、騎士甲冑について、アイデアをお願いします！！

本編を読んだら、音耶の戦闘スタイルが分かると思うので、ご参考にしてください。

どうか、ご協力お願いします！！

第12話 西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた

これは、6月のある日の出来事。

俺はいつも通り学校へ行き、魔王と虫をからかったり、妹候補のフエイトを愛でたり、類友と狩りに行ったりして一日を過ごした。
狸とバーニング？
いたな、そんな奴も。

で、放課後になり、俺はまっすぐ帰宅。
実にいい子だ。

し・か・し！帰宅後…事件は起こった。

「ただいま」ガチャッ

「音耶ちゃん！おかえり〜！！」ダダダダッ！！！！

ドアを開けた瞬間、無駄乳をぶら下げた女が現れた！！
俺は…

1. 避ける
2. 押し倒す
3. 今こそ魔法の呪文だ！！

「秘技、ムーンウォーク！！」

「きゃん!!」ベシンッ!!

女は たおれた。

音耶 は 5の経験値を手に入れた。

レベルアップ!!

息子・ジョニー が 光合成をおぼえた。

「で？アンタは何をしている？」

「いったゝッ！なによ、息子にハグしようとしただけじゃない!!」

「そんなものぶら下げて、俺に抱きつくな。圧迫死するだろ」

「そんなものってなによ。音耶ちゃんも昔はこれ飲んでたのよ？」

「もうしゃべるな、無駄乳が」ツンツン

「あんっ！」

とりあえず、靴べらで突いてみた。

おお、なんて弾力。

だがデカ乳は認めんぞ。

「……お前達は親子で何をやっている…」

俺がデカ乳をフェンシングのように突いていると、リビングから白髪オールバックのダンディーなおっさんが出てきた。

「カイさ〜ん、音耶ちゃんがいじめる〜」

「なにを言う。俺は無駄乳を駆除しようとしただけだ」

「いいからやめんか。親子そろってバカバカしい」

「ちっ、親父に感謝しろよ」

「音耶ちゃんのバ〜カっ！」

はいはい、言ってる無駄乳。
ん？紹介？

まあ、焦るなって。

とりあえず、この無駄乳もとい母さん。名前は西野夏音。黒いロングで美人だとか言われている。俺は認めんぞ。管理局ではデバイスマイスターをしている。階級は三等空尉。一応、戦闘もできる。で、白髪オールバックが俺の親父。カイ・リルウィーゼ・西野。因みに西野家の婿さんだ。管理局ではそこそこ偉いらしく、階級は一等陸佐。タバコを常に持ち歩く、ヘビースモーカーだ。

まあ、そんなこんなで西野家両親、帰宅した模様です。

「んまいっ!! やっぱ音耶ちゃんの料理は美味しいわ〜!」

「本当はアンタが作れないといけねえんだけどな」

「え〜!?! 私、料理できないし〜」

「母親失格。退場を願います」

家族揃っての夕飯。

本当に久しぶりなので、イガグリも雪音も嬉しそうだ。
というか親達よ。

久しぶりに帰ってきたんだから、少しは家事手伝えや。

「お前達。学校の方はどうだ？」

飯を食べてると、親父がありきたりな質問をしてくる。
他にはないのか？

まったく、つまらんおっさんだ。

「…ふっ…」

「俺は楽しいぜ!!」

「俺は雪音に会えなくて寂しい」

「ふむ、思ったとおりの返答だな」

「というか、音耶ちゃんのシスコンっぷりも相変わらずね〜」

「それは認める。雪音ほど可愛い者なんて存在しない」

「……………／＼／」

「照れる雪音かわゆす」

「むゝ…………音耶ちゃん、私は？」

「帰れババア」

俺の一言が効いたらしく、母さんは親父に泣きついていた。
つうか親父。

飯ん時はタバコやめろや。

「そういえば音耶」

「んあ？」

母さんに抱きつかれながら親父が話しかけてくる。
だからタバコやめろや。
俺は味噌汁を飲みながら耳を傾けた。

「先日、私の部隊に高町なのという、地球出身の魔導師が入隊したんだが」

「ビュホッ!!」

「あっちいいいいいい!!?? 坊主だからモロ頭皮にいいいいいいいいっ!!!!」

は？親父の部隊に魔王が！？
なんだそりゃ！？」

つうか親父の部隊ってなんだっけ？

「ゲホッ…それは本当か？」

「ああ、私の部隊、時空管理局本局武装隊 航空戦技教導隊に確かに入隊したぞ。ちなみに私は部隊長だ」

「説明どうも…。で、まさかバレてないよな？」

「ああ、地球出身かは尋ねられたが、ミッド出身と言っておいた。一応、嘘は吐いていない」

助かった…。

親父がもし「私の息子も海鳴市に住んでいるんだ」なんて言ったら、バレるのも時間の問題だしな。
バレたら、きっと今以上に絡んでくるはずだ。
ああ、想像しただけで鳥肌が…。

「もしかして知り合いか？」

「知らん」

「兄貴の友達だよ。この前会ったし」

「イガグリい、てめえは黙ってろ」

「兄貴、顔がこええ！！」

「友人だったのか。ならば言っても良かったか？」

「ダメだ。俺は魔導師なんて面倒なもんに関わりたくねえ」

「でも、魔法や戦闘の訓練してるじゃない」

「それは雪音を守るためにしてるんだ。力は持ってたほうがいいしな」

「そうだ、俺は雪音を守れる力が欲しいから、親父や母さんに魔法を教わってるんだ。」

「管理局なんて微塵も興味ねえ。」

「俺は平穩に暮らしたいだけなんだ。」

「ねえ、私は守ってくれるの？」

「……………気が向いたらな。つうか、あんた俺より強いだろ」

「やゝん！カイさん、音耶ちゃんが私のこと守ってくれるってえゝ
！！」

「話は聞いてたかババア？耳鼻科紹介すつぞ、このやろー」

「私うれしいわゝ！そんな音耶ちゃんにはプレゼント！！」

「ババアが懷から何かを取りだし、俺に手渡しする。
とりあえず受け取ってみる。」

「…………銃弾？」

「ちがうわよう。それは…く・いつ」

「杭？俺にキリスト様になれってか」

俺の掌にあるのは、親指サイズの銀色の銃d…杭だ。
杭の平らな部分には、茶色の紐が通してある。

「それは、アームドデバイスよ」

「デバイスッ！？」

デバイスという言葉に、イガグリが物凄く反応した。
しかし、デバイスか…。

まあ、持ってて損はないな。

「ありがたく受け取っておく」

「うんうん！大事にしてあげてね」

「母さん！！俺のは！！！？？」

「紫音ちゃんは強くなったらねえ」

「俺は強い（ゝ・ω・ゝ）」

「じゃあまた今度ねえ」

「ええええええええええええええええ……………」

イガグリうぜえ。

しかし杭が待機状態のデバイスか。

まあ、杭は俺の戦闘スタイルの象徴だしな。

俺がデバイスを眺めていると……

『あなたがわたしのますたーなの？』

ロリヴォイスが聞こえた。

「ッ！？こ、これは…！？」

「音耶ちゃん、そういうの好きでしょ？だからAIの人格をロリロリにしてみました」

「母さん、今ほど感謝した日はない」

「あーん、もっとほめてー！」

Good Job母さん。

しかし、ロリロリか……うへへ…。

『ますたー？』

「おお。俺は西野音耶だ、よろしくな」

『ますたー…西野音耶…。うん！おっけーなの！』

「デバイスってええなあ（▽）」

『ますたー、わたしのなまえを決めて？』

「名前？ うゝん……田中」

『田中？ うん、w「キャンセルゝ！！」…キャンセルするの』

「ちょっと音耶ちゃん、真面目に考えてゝ」

いや、いきなり名前を決めろって言われても。
つか田中よくね？

「音耶ちゃん。この子は今日から音耶ちゃんの相棒であり、西野家の一員となる子なんだから、ちゃんとした名前つけてあげて？」

「じゃあ、母さんはなんかいい名前があんのかよ？」

「うゝゝゝん……おっことぬし？」

「お前もう帰れ」

「ふむ。音耶の戦闘スタイルから取ってみるのはどうだ？」

俺の戦闘スタイル？

拳でのクロスレンジだから……ゴッドハンド？

「兄貴のパンチって既に鈍器だよな」

「だまれイガグリ。俺の拳は鉄じゃねえ」

「いや、鉄で殴られるより痛いかも……鉄？……鉄……鉄……あー！！」

「なんだよ？」

「鋼…なんてどうかな（・ω・）」

「最近流行ってんのかそれ？」

鋼か…。まあ、悪くは無いな。

けど、鋼だけじゃなんか物足りん。

「……家族だから……なまえ……きょーつーの……」

「共通の名前？…お！なる。さすが雪音。母さんとは大違いだ」

「可愛いのに…おっことぬし」

となると、やっぱり音をつけたほうがいいのか？

鋼の音……鍛冶屋って感じだな。

「音に関連するものでもいいんじゃないか？」

「音に関連するもの……騒音…音色…奇声…歌…んゝ、どれもいまいちだ」

「…おにいちゃん」

「ん？なにか閃いたか？」

「うん……シュタール…クラング…」

「！？…雪音……お前は天才だ！！なんて良い名前なんだ！！」

「……がんばった…」

「兄貴。シクターム何とかって、どういう意味なの？」

「知らん」

「知らないのかよ!？」

「『鋼の響き』という意味だ」

「鋼の響き……かけえじゃん兄貴!！」

「さすが雪音。もう愛してるっ!！」

「…えへへ…／＼／＼」

雪音サイコーーーーーッ!!!!!

お兄ちゃん、なんでも買ってあげちゃう!!

「そういう訳で、お前の名前が決まったぞ」

『うん…じゃあ、わたしになまえをくださいなの!』

「おう、お前の正式名称は『シクタールクラング』、愛称は『クラ
ン』だ」

『はいなの!これからよろしくなの、ますたー!』

「ああ、よろしく」

西野家に新たな家族が加わった、今日この頃。

「うう、おっことぬし可愛いのに~~~~~!!!!」

第12話 西野ファミリー大集合。マジで家族が増えた（後書き）

音耶君の戦闘スタイルは、己の肉体を使うクロスレンジ!!

音耶君の必殺は……杭にクロスレンジ…この意味…わかりますね？

という訳で、よろしければバリアジャケット、騎士甲冑のアイデアをお願いします!!

できれば、明日中までに集まればいいんですが…。

皆様、どうか小生にアイデアをッ!!（ゝ・ω・ゝ）ゞキリッ

第13話 はじめてのセットアップ。マジでググッたる（前書き）

すみません、更新遅くなりましたm（　　）m
デバイス設定にかなり時間が掛かったゝorz

今回、音耶君のバリアジャケット&武装が出ます。

バリアジャケットや武装について、様々なアイデアを出していただき、本当にありがとうございました！！

では、本編へどうぞ！！

第13話 はじめてのセットアップ。マジでググッたら

両親帰宅の翌日。

今日は平日。普段なら学校に行き、教師の声をBGMに惰眠を貪っている頃だ。

しかし本日は普段のようにはいかない。

何故だって？

それは両親が帰ってきたからだ。

偶にしか帰ってこない両親が帰宅した日は、学校を休む。

西野家の暗黙の掟だ。

だからと言って、のほほんと過ごすわけではない。

西野家が揃ったというと、やる事は1つ。

魔法の訓練だ。

てな訳で西野ファミリー、無人世界へとやってきました。

いやあ、見渡す限りの荒野。

草の一本も生えちゃいねえ。

人が住める要素ゼロだな。さすが無人世界。

「お前達、今日は一日中訓練だ。真剣に訓練に取り掛かれ」

「うっす!!」

「うい」

「…うん」

「」「はいッ!!」「」

親父の言葉に、それぞれ返事を返す。

親父も気合が入ってるのか（・ω・）―― ↑こんな感じだ。
親父はきつとニコ中で早死にするだろ。

まあ、今はどうでもいいか。

それと、先程から気になっていたんだが…。

「あんたら誰？」

俺は先程の親父の言葉に、元気に挨拶をした三人を見る。
西野ファミリーにこんな奴らはいない。

「そういえば紹介していなかったな。この者達は私の護衛だ」

「護衛？」

「はい、私達は無人世界に行く西野一佐に」

「何かあったときのため」

「護衛として派遣されたんだ」

「なるほど。とりあえず説明すんのは一人でいいだろうが。なに、その無駄なコンビネーション」

「そういう訳で、私の護衛につく3人だ。なお、この者達にも訓練に参加してもらうことになる」

ふーん。別に構わないけどね。

「俺は西野音耶。敬語は使わなくていいから」

「西野紫音っす！！今日はお互い頑張ろうっす！！」

「…雪音…」

「こいつらが私の子供だ。お前達も自己紹介を」

「はいッ！！私は局員Aです。敬語は癖なのであしからず」

「俺は局員B！西野一佐、直々の教導を受けられて光栄です！！」

「僕はティード・ランスター。今日はよろしく」

モブキャラ2人に、名前有りが1人か。

ちなみにAは女で、残りは男だ。

「ではこれから訓練に移る。雪音とAは西野三尉の所へ。音耶はデバイスの武装の確認。残りは私の下で訓練だ」

「「はいッ！！」」

「うっすッ！！」

「雪音、がんばれよ」

「……うん…おにいちゃんも…がんばっ…」

雪音に励まされた俺は、魔王をも超える。

我がデバイス、クランよ。

1時間でお前を掌握してやろう!!

「で、クラン。俺は何をすればいい？」

『わたしに聞かれてもこまるの』

ちっ、ダメダメデバイスが。

まあ、可愛い声だから許す。

「とりあえず、セツトアップするか」

『おーけーなの！ますたー、わたしの名前をよんで!!』

「おう。田中、セツトアップ」

『だれ!?!』

「すまん、間違った。クラン、セツトアップ」

『真面目にやってほしいの。せつとあっぷなの!!』

次の瞬間、俺は光に包まれた。
別に爆発はしねえよ？

『せつとあっぷ完了なの！』

「だな。……で？なんだこりゃ？」

『なについて、せつとあっぷなの』

「ちげえよ。バリアジャケット？騎士甲冑？のことだ」

『それは、おかあさまが決めたの。ちなみにますたーは、ベルカ式だから騎士甲冑なの』

俺は自分の姿を確認する。

うん。盾の騎士リリースの格好です。

ベースはリリースだが、所々改良されている。

まず、胸のプレートアーマーが無く、黒のインナーになっている。

腕には、服の上から装着されている、肘から指の根元まである銀色の籠手。

外側だけを守るように、装着されている。

つまり内側は服と、籠手を固定するために半分に切った鉄の輪が二本。

左の籠手には、なんかスライドできそうな所がある。

そして脚部には銀色の脛当てがあり、表面が銀色のブーツを履いている。

腰にはリーズのようなヒラヒラマントではなく、アーチャーのような前の開いたヒラヒラマントをつけている。
色は白で変わらないが。

どちらかと言うと、騎士甲冑ってよりも騎士服だな。

『騎士甲冑について説明するの。ますたーはクロスレンジによる格闘戦が主体だから、全体的に身軽な甲冑にしたの。腕は防御も出来て、素早い打撃に特化した籠手なの。脚部は蹴りやすく、走りやすい甲冑。胴はアクロバティックな動きが可能になるように、無駄な装備を取った軽装なの』

「まあ、たしかに動きやすいわな。でも軽装だったら喰らうダメージもでかいんじゃないか？」

『ますたーは、頑丈って聞いているの』

「把握」

まあ、俺が頑丈なのはとりあえず置いておこう。
今はもっと大事なことがある。
アレがないではないか。

「おい、俺のロマンがないぞ」

『ロマン？もしかしてパイルバンカーのことなの？』

「ああ、漢のロマンだ。で？なぜパイルバンカーがついてないんだ？」

『あの武装は別に用意してるの。今はこのフォームから説明をする

から、後にして欲しいの』

「このフォルム？つまりモードチェンジもあるってことか？」

『当たり前なの！』

「よし、なら早速そっちも…」

『ちょっと待つの。まだ1つ残ってるの』

「あ？なんだよ」

『左の籠手。そこにはカートリッジシステムが搭載されてるの。装弾数は4。大事に使って欲しいの』

このスライドってカートリッジの排出口だったのか。
フリスクを入れる所だと思ってた。

「おっけー。んじゃ、もう1つの方いくか」

『わかったの。ちなみに今のモードはゲシュヴィントフォルムなの。
覚えておくの。そして今からなるモードは、ランメフォルムなの』

「おう。克蘭、ランメフォルム」

『ランメフォルムなの！！』

俺はまたもや光に包まれた。
だから爆発じゃねえって。

フォルムチェンジした俺は自分の姿を見た。
まず黒のインナーが、アーチャーのしている筋肉みたいなアーマー
になっていた。

そして両腕全体を覆う銀色の甲冑。

肩の甲冑の後ろ根元部分には、腰くらいまでの長さのある銀色の何
かが、折りたたんで装着されていた。

右腕の肘から手首にかけて、大きな装備が装着されていた。

6連式リボルバー型の弾倉。

真っ直ぐ突き出ている銀色の杭。

色は銀一色だけど、形は完全にアルトアイゼンのステークですね。
ありがとうございます。

「なんつうか、さっきとは違い重装備だな」

『パイルバンカーを生身で撃つのは、それくらいの装備が必要なの。
それでもその装備は、結構軽装なの』

「これが軽装ねえ」

肩まで覆う銀の甲冑を見る。
確かに重装備は腕だけだな。

『じゃあランメフォルムについて説明するの。ランメフォルムはゲ
シュヴィントフォルムとは違い、重い一撃を喰らわすために攻撃特
化したフォルムなの。まずは右腕のパイルバンカーを見て欲しいの』

「撃ち抜くのみ！！だな」

『? ? よくわからないの。それはリボルバーステーク。名の通り、6発入るリボルバー型の弾倉が装備されてるの。弾倉には術式カートリッジという、特別なカートリッジを装填するの』

「術式カートリッジ? 聞いたことねえな」

『当たり前なの。だって作者はおかあさま。その武装のためだけに作られた非公式の新システムなの!』

「……大丈夫なのか?」

『安全性は無問題なの! 3年もかけて作った、おかあさまによる最高のシステムなの』

「ならいいけどよ」

『信用していいの! それじゃあ、術式カートリッジについて説明するの。使い方は本来のカートリッジシステムと同じで、魔力を溜めとくことで使用可能なの。で、ここからが本来のカートリッジシステムとの違いなの。』

1. まずロードした時の魔力は、自分の魔力になるのではなく、パイルバンカーを使用するための魔力に運用されるの。
2. ロードをすると自動的に魔法が発動されるようになってるの。
3. 発動される魔法は3つあって、1つはパイルバンカーを撃つための爆発的瞬間加速術式。もう1つは威力を上げるため、ステークに魔力付与術式。最後は衝撃を緩和するための術式が組み込まれているの!』

「ふーん。そういえば、これって非殺傷設定できるのか?」

『一応できるの。ただ威力は変わらないから、1撃喰らったら3日は意識不明になると思うの。だから人に向けて撃っちゃだめなの』

「というか死なないのが不思議だ」

『細かいことは気にしちゃいけないの。6発しか撃てないから、撃ち終わったらカートリッジを補充するの。大切なことだから忘れないうで欲しいの』

「おk。もう説明は終わりか？」

『次の武装で説明は終わりなの。最後の装備。肩の根元ら辺に設置されてるそれなの』

「ああ、これね」

『それはエナジーウイングなの』

「まじか。俺は空を飛べるのか…」

感無量とはまさにこのことだ。

まだ飛行魔法は教えてもらってなかったしな。

気分的にはアレだ。

安西先生…空を、飛びたいです…。みたいなの。

『飛べるには飛べるの。けど、本来は加速のために付けられた装備なの』

「加速のため？なんでよ」

『フォームが重装備だからなの。重装備だから普段よりも動きが鈍くなるし、相手との距離を詰めるのも一苦労なの。クロスレンジにもちこめなきゃ、パイルバンカーをつけた意味がないの。そこで、この魔力式エナジーウイングの出番なの！』

「魔力式か。つまり魔力をエネルギーに動くのか」

『そうなの。そのエナジーウイングは、直進で脅威的な瞬間加速を発揮するの』

「直進しか動けないのか？」

『全方向、動けるには動けるの。けど、瞬間加速は直進にしか使えないの』

「？もっとわかりやすく頼む」

『簡単に説明すると、飛行は一般空戦魔導師並み。直進の加速はソニックムーブ並みの』

「なるへそ。戦いの時は避けて避けて、一気に距離を詰めるって感じか」

『そんな感じなの。そうだ、試しにエナジーウイングを出してみる』

「おう。エナジーウイング発動」

『エナジーウイング展開なの！！』

肩の根元（めんどくさいから背で）に設置してあった物が開き、そこから薄い銀色のエナジーウイングが出てきた。

「こりゃあまた、どこかで見た事のある作りだな」

俺から出てきたエナジーウイングの形状。

どうみても紅蓮聖天八極式のエナジーウイングですね、ありがとうございます。

母さん、絶対ググッたろ。

『とりあえず飛んでみるの』

「童貞喪失の記念日だな」

音耶、行っきまーす！！

フワァ

「おお、浮かんだ」

『当たり前なの』

感激のあまり泣いてしまいそうだ。

これで俺も超能力者。

あ、エナジーウイングのおかげか。

「いざゆかん、彼の空へ」

ビュンッ

ヒュンヒュン

ビューーーーーンッ

「わたし、飛んでるわ!!」

『? ? とりあえず、ソニックブーストを使ってみるの』

「ソニックブースト?」

『さっき言った加速なの』

「ああ、ソニックブースト」

ヒュンッッ

俺は風になった。

って、ちょっとまってや。

「おい、なんで止まった。不良品か?」

ソニックブーストを使い一瞬で移動はできたが、俺が目指していた場所とは違った。

『限界距離は100mなの』

「なん…だ…と…」

『とりあえず今ので、説明は全部終了なの。ご苦労様なの』

「……ああ」

なんだ、このやるせない気持ち。

気分的には、絶望したツツツ！！！！って感じた。

地面に降りて、騎士甲冑を解除する。

俺はクランに失望した視線を向けながら、親父達の下へ向かった。

最後に1つ。

大気圏の外へ行ってみたかったorz

続く！！

第13話 はじめてのセットアップ。マジでググッたる（後書き）

ティーダ出現 W W

死亡数ヶ月前のティーダさんです（笑）

第14話 模擬戦。マジヤバス（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

更新が遅くなってしまいました。

昨日パソコンが戻ってきたので、やっと執筆できます。

いやあ、電源が入らなくなった時は鳥肌マックスでした。
今年で一番怖い思いしたかも（笑）

しかも修理に2万ってどうゆうことよ。
高すぎでしょ。

そんな感じで、諭吉が2人巣立ちました。

しかし、久しぶりにinしたら驚いた。

結構、批判的な感想が来てますね（笑）

いつか来るとは思ってたけど…

本当に駄小説ですみませんm（　　）m

この小説は作者の自己満足のようなものです。

本当にすいませんでした。

できれば、これからも応援よろしくお願いします。

第14話 模擬戦。マジヤバス

無人世界。

見渡す限り荒野で囲まれているこの世界に、1人の少年がいた。

少年の手には、数々の血が染み付いてきた鈍く輝く銀色の殺傷兵器。この場には似合わぬ、肉の焼ける匂い。

少年はただ無言に、新たな肉塊を切り刻む。

いや、確かに無言ではあるが、少年の表情はどこか嬉しそうにも感じる。

少年は何を感じ、その凶器を振るうのか。

少年は何を思い、口角を吊り上げているのか。

その答えは少年にしか分からない……。

「音耶ちゃん、お肉なくなっただけ」

「暇なら手伝えや」

「…おにいちちゃん…お肉…」

「今、音速の速さで準備するから待っててな！」

無人世界で向かえる昼食時。

我が家＋αはバーベキューの真っ最中だ。
俺？

ただ豚と牛の肉塊をmy包丁で切ってたただけだぞ。
雪音の嬉しそうな表情を見ると、ニヤニヤが止まらない。

「すまん、音耶。お前に全部任せて」

「あんたらは家事が苦手だからな。肉を奇怪なアートに変えられても困るしな」

「どうも調理などは好かん」

親父が言ったとおり、西野家の両親は家事が壊滅的。
なので俺が家事全般を引き受けている。

因みに西野家の家計簿も俺の手の中。

そんなんでいいのか？両親達よ。

俺は心の底から、両親達のミッドでの生活を心配した。

栄養失調で倒れるとかはマジで勘弁願いたい。

収入源が無くなっちまうからな。

「音耶君」

俺が機械のように次々と肉を切っていると、優男が声を掛けて来た。
たしかティーダだっけ？

「何か用か？」

「はい、君の分を確保しておいたよ」

そう言ってティーダが肉の乗った小皿を、差し出してくる。
ふむ、ありがたい。

俺はティーダに礼を言っ、小皿を受け取る。

とりあえず補充用の肉を親父に渡し、ティーダの横に腰を下ろす。

「雪音ちゃん、可愛いね」

「だろ？俺の妹は世界一可愛い」

「ちょっとまって、それは聞き捨てなら無いな」

「あ？雪音が世界一なのは世の理だろ」

「いや、雪音ちゃんも可愛いよ。けど、一番は僕の妹だ」

「ん、お前妹いたのか？」

「いるよ、雪音ちゃんと同じくらいの年の妹が」

「へえ。けど一番は雪音だ」

「いや、ティアだね」

「雪音だ」

「ティアだよ」

「……………」

こやつやりおる。

ティーダも妹主義者か。

「妹のスペックは？」

「オレンジツインテール。おそらく将来はツンデレになる」

「ッ！？やるじゃねえか。お前に対する扱いは？」

「デレ」

「……手ごわいな……。しかし将来はツンに変わり、「兄さん！洗濯物は別にしてよ！臭いがうつるでしょ！！」とか言われるはずだ」

「ッ！！？…ありえない……ティアは僕に優しいよな……？」

「冗談だ。そこまで落ち込むな」

ティーダがorzしながらブツブツ言ってるのが、あまりに奇m…可哀想に見えた。

「ほら、顔上げろよ。今度、飲みながら妹自慢でも聞いてやるから」

「ああ…、って君未成年だよね？」

「細かいことは気にすんな。禿げるぞ？」

「禿げっ！？……僕は禿げるのか…ティア…僕が禿げても…兄さん
って、呼んでくれるよね…？」

「お前めんどくさっ」

ティアダはネガティブゾーンを纏っていた。
まあ、気持ちはわからなくもない。

「さて、これから模擬戦を始める」

昼食が済み少し休憩したところで、親父から集合の合図があった。
次の訓練は模擬戦。

雪音がいるんだ、いいところ見せないとな。

「チームは音耶、紫音チームと、管理局チームだ」

まあ妥当だな。

雪音は母さんと魔法の訓練か。

「あの、西野一佐」

「ん？どうした」

「このチーム分けて大丈夫なのですか？」

局員Aが親父に尋ねる。

普通はそうだよな。子供対大人だし。

しかも相手は局員。

こっちの事を心配してんだろ。

「大丈夫だ。こいつらはそこそこやる。お前達も本気で戦え」

「はあ…」

「俺たちは問題ない。だから本気でこいよ」

「はは、なめられたもんだね。いいよ、本気で相手をするよ」

ティーダが俺の言葉に反応した。

子供になめられたから、イラっときたか？

「撃墜判定は私が出す。両チーム今から10分やる。それまでに作戦を決めておけ」

「」「はい！！」「」

「うい」

「さて、どうするかイガグリ」

「うーん、俺こういうの苦手なんだよね」

「俺もだ。つうか相手の事も、なんもわかんねえしな」

「あっ、俺わかるよ」

そういえばイガグリは、男2人組みと訓練してたっけ。

「ティーダさんが銃型デバイスの射撃型で、Bさんが斧を使う近接型だった」

「おk。Aって女の人？」

「あの人はわかんない」

クロスレンジが1人にロング…いや、銃型って言ってたしミドルレンジか。

あとはスタイル不明が1人。
んー、かなり不利じゃね？

「兄貴、どうすんの？」

「……よし、イガグリ」

「なに？」

「お前はティーダと当たれ。俺はBを確実につぶす。俺が終わらせるまで持ち堪えろ」

「おーけー！！倒してもいいんだよね？」

「ああ。Aについては戦闘が始まり次第、念話で対応を伝える」

「おっす！！絶対勝とうぜ、兄貴！！」

「おう。俺も親父の前で恥をかくつもりはねえ。勝ったら雪音に褒めてもらうつもりだしな」

「いっちょやってやるか。」

雪音、兄ちゃんに力を分けてくれ。

兄ちゃんも愛を分けるから。

「準備はいいか？」

「「はい!!」「」」

「うっす!!」

「ああ」

荒野の真ん中で両者距離をとり、開始の合図を待つ。

俺は克蘭のゲシュヴィントフォームに身を纏う。

イガグリはを中国風の袖なしの赤い服に黒いインナー、黒い半ズボンを着ている。

まるで、中国の武者のような格好をしている。

そして手には赤い片手剣が握られている。

対する相手は全員、共通の防護服を身に纏っている。

デバイスはティードが銃型。

Bは身の丈ほどある斧。

Aは青い宝石のついた杖だ。

Aは砲撃型か？

サポートにまわられたら厄介だな。

「イガグリ、予定変更」

「なに？」

「お前はティーダとAを相手してくれ。時間を稼ぐだけでいい」

「つまり、2人の目を俺に向けさせればいいの？」

「そういうことだ。できるな？」

「任せな!!」

イガグリは気合が入ったように、剣を構える。
俺も特攻を掛けるために腰を落とした。

「では模擬戦……始めッ!!!!」

「紫音!行く…ぞ………うおい」

「兄貴、どうする？」

「とりあえずヤヴァイ」

開始の合図と同時に、俺と紫音は立ち尽くしてしまった。
つか、開始と同時に空を飛ぶとかどんだけ。
しかも三人。
いきなり手が出せないです。

「兄貴、空飛べないよね？」

「一応飛べる。けど機動力が下がる」

「どうする？」

「どうするべ」

ほらほら、俺たちが喋ってる間に相手さんはスフィアを形成してるよ。

まじで、どうすつか。

「紫音、とりあえずBを叩き落としてこい」

「俺が！？まあ、わかった。落としたら兄貴が相手してよね」

「おk、任せろ」

「それじゃあ行って来る！！」

紫音は空に浮かぶ相手に向かって走り出した。

文字通り走り出した。

空に向かって。

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！」

雄たけびを上げながら空を走る人間。

シュールな光景だ。

相手さんもビックリしている。

あれは紫音のレアスキル。

その名も『空を駆ける少年』

命名・俺

あのレアスキルは、足に魔力を付与する事によって、空中を地面の

ように歩けるといふデタラメ能力だ。

詳細は不明だが、とりあえず中々使える能力だ。

と、考えている間に紫音がBと接触したようだ。

俺も奴らの下に移動すっかな。

＼ティーダside＼

僕は模擬戦が開始して、直ぐに驚くことになった。

いや、僕だけじゃなくチーム全員だ。

驚きの要因は紫音君。

彼は空を飛ばず、空中を走ってきたのだ。

おそらくレアスキルか何かだと思う。

今はB相手に、クロスレンジでの戦闘を繰り返している。

僕とAは紫音君をBに任せ、音耶君に攻撃を仕掛けていた。

「クロスファイア：シュート！！」

僕の形成した7つのスフィアが、音耶君に向かって発射される。

Aは僕の後方で詠唱中だ。

クロスファイアシュート。

僕が得意とする魔法の1つだ。

誘導性に優れていて、空間制圧を目的とした射撃魔法。

さて、君はどうするかな？音耶君。

「まったく、めんどくせえな」

音耶君は軽くため息をつき、その場で構えた。どうやら避ける気はないらしい。

僕は2つの魔力弾を様子見のため先行させた。防がれたなら、他の方向から仕掛ければいい。

僕は魔力弾をシールドで防がれると思っていた。しかし、その期待は裏切られる。

バキンッ！！

バキンッ！！

「なッ！？」

何かが割れる鋭い音が耳に届く。

僕はその光景を見て、驚きを隠せなかった。

音耶君はシールドで防いだわけでもなく、魔力弾を弾いたわけでもない。

己の拳で魔力弾を破壊したのだ。

「まったく…君達は本当に滅茶苦茶だ」

こんな戦い方をする魔導師は見た事もないよ。

side out

いてえ…、拳がヒリヒリする。

魔力弾を殴った拳が地味に痛い。

強化したといっても、あんなの殴れば痛いのは当たり前か。もうちょい必要だな…。

俺は腕に更なる魔力を送り、固定する。

これは簡単に言えば、魔力付与のようなもの。身体に魔力を流し、圧縮、固定する。

これをする事によって、魔力付与した部位が強化される。

威力UP、耐久度UP、筋力UPと、中々使い勝手のいい技法だ。剣とかなら魔力弾を斬ったりできるだろうけど、あいにく俺は拳。なら、その拳を強化しなければ、まともに戦闘などできない。

「うしっ、次」

今度は前と左右から3つの魔力弾が襲ってくる。

ギリギリの場所でしゃがみ、前から襲ってきた魔力弾をアッパーで破壊する。

と思ったら、今度は後ろから2つの魔力弾が襲ってきた。

「めんどくせえ、なッ!!」

足を強化して飛来した魔力弾を、後ろ回し蹴りで破壊する。

若干できた隙を見計らうかのように、先程避けた魔力弾が再び襲ってくる。

俺は魔力弾をイナバウアーで避ける。
避けたと同時に、イナバウアーの体勢から右手を地面につき、左足を片方の魔力弾に向かって振り上げる。
破壊した音を聞きながらバク転のように、地面に着地する。
もう1つの魔力弾を確認しようとすると、既に魔力弾は消えていた。

「ははっ…随分アクロバティックな動きをするんだね」

ティーダは苦笑いをしながら銃を向けてくる。
ちっ、紫音はまだか？

俺は紫音の状態を横目で見る。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

「はあああああああああ！！！！！！」

ガキンッ！！
ガキンッ！！

いい感じに盛り上がっていた。
あれ？

あいつまさか、作戦忘れてねえよな？

「ははっ、楽しいっすよ！！Bのおっさん！！」

「俺も楽しいぞ、紫音君！！」

ガキンッ！！

気分的には、モンスター側に大剣で飛ばされる可哀想な人。

「はああああ！！！！」

バキンッ！！

バキンッ！！

前方から迫る魔力弾を破壊しながら、後方からバンバン撃って来る火の玉から逃げる。

ああ、このままじゃジリ貧だ。

「克蘭、ランメフォルム！！」

『わかったの！！』

一瞬でランメフォルムへと姿を変えた俺は、火の玉をサイドステップで避けて、空に飛び立つ。

「そんな装備初めてみたよ！！」

ティーダは笑いながらバンバン魔力弾を撃って来る。

同じくレウスも、遠慮無用にバンバンと火の玉を放ってくる。

それらを最小限の動きで回避しながら、反撃のための隙を探っていた時：

『マスター、砲撃が来るの！避けてなの！！』

克蘭の声に反応してすかさず辺りを見渡すと、翠色の砲撃を今にも発射しようとしているAがいた。

「余所見はいけななっ!!」

一瞬だった。

わずかな隙を見せた俺に、ティーダの魔力弾が2発直撃した。身体がぐらついた俺に、さらに追い討ちをかけるかのように、レウスが巨大な尻尾をぶん回す。

「ぐッ!!」

尻尾スイングは見事に直撃し、身体が野球ボールのように跳ね上がった。

しかも打ちあがった俺に止めをさすかのように、視界いっぱい広がる魔力の奔流。

もちろん回避などはできず、砲撃を喰らった俺は地面に落ちた。

『ますたー!?!』

「…がはッ、ゲホッ…全身強化をしいたからゴホッ…一応、無事だ…」

咄嗟に全身に強化を施して、何とかダメージは軽減できた。

だが軽減したといっても、かなりのダメージを受けたのは違いない。

あー、身体中がいてえよ。

なんで俺が、リンチなんか受けなきゃならないんだろ。

あ、イガグリのせいかな。

あいつが作戦忘れっから悪いのか。

……なんか腹立ってきた。

この魔導師達もなんなの? 集団でリンチかけてきたり。

騎士なら正々堂々戦えよ。↑騎士じゃありません。

「クラン…非殺傷設定には、してるよな？」

『当たり前なの。だから杭の先で殴っても、刺さったりしないの』

「じゃあ、使うわ」

『へ…？…ま、ますたー！！人に撃っちゃ危ないの！！』

「人には撃たん。あのトカゲ野郎に撃つだけだ」

『あ、それなら大丈夫…夫、じゃないの！？可哀想なの！！』

「あ？可哀想？知るかそんなもん。あのトカゲ見てみろよ。何、あのドヤ顔？絶対バカにしてるだろ」

『でもダメなの！可哀想なの！！』

「パイルバンカーくらい喰らっても、あのトカゲは大丈夫だよ。なんたって、多種多様な武器で攻撃されても、平気な顔をしてるような奴だからな」

『うーん、わかったの。でも当てるのは一発しかダメなの！』

「ok。それで充分」

さて、覚悟しろよトカゲ。

「クラン、アクセル！！」

『はいなの！！』

加速を使いレウスの懐に潜り込む。

スピードに乗って右拳を突き出すが、レウスは『は？　なんやそれ』
って感じで、全然ダメージを受けていない。

だが本番はこれから。

お前に男の浪漫を刻み付けてやろう。

[illegible]

『全てを撃ち抜くの!!!』

ガシヨン！！

「ガウ？」

ズガン
ツツツ
!!!!!!

「ガッ！！？？ガウ…、アーーーーー」

おお、パイルバンカーはやっぱテライケメン。

レウスは兄貴的な鳴き声を発しながら、ゆっくりと地に落ちた。

「なあ……あれ、死んでないよな？」

『大丈夫なの。与えたのは魔力ダメージだから』

「鉄の杭を、どうやったら魔力ダメージに変換できるのか説明しろ」

『ご都合主義なの』

「把握」

しかしあれだな。

なんかパイルバンカー撃ったら、テンション上がったきた。

『わたしもなの!!』

最近のデバイスはハイテクだな。

でも残念。

もうパイルバンカーは撃てないんだよ。

俺は残った2人の魔導師に視線を移す。

Aは「は？」って顔してるし、

ティーダはめっちゃ苦笑い。

うん、とりあえず呆けているAを潰そう。

俺は瞬間加速を使用する。

加速で得たスピードを利用して、某熱血先生の技を繰り出す。

「ダイナミック、エントリー!!」

「ッ!?!きゃあ!!?!」

ギリギリAはデバイスで防御したが、Aは衝撃に耐えられず地面にダイブした。

「A、撃墜!!」

親父の声が耳に届く。

残りはティーダか。

ティーダを見ると、まだ苦笑い。

「ははは…まさか、それ…人には撃たないよね…?」

パイルバンカーを指差しながら尋ねてくる。

そんなに怖いかな?

「ああ、人には撃たないから安心しろ」

「それなら、いいんだけど…」

ティーダは顔を引き締めて、こちらを睨んでくる。
やる気マンマンですな。

「クラン、速攻で潰すぞ」

『わかったの!! ああ、戦いつて最高なの!!』

なんかおかしいぞ、クラン。

戦闘狂のデバイス?

あれだな。某妹アニメっぽく言うと、

『俺のデバイスがこんなに戦闘狂なわけがない』
打ち切り候補上位に入れそうな題名だ。

「いくよ!!」

ティーダのデバイスから魔力弾が、次々と撃ち出される。

それを回避しながら徐々に距離を詰める。

弾幕を回避しながら進む俺は、さながら某シューティングゲームの
戦闘機にでもなった気分だ。

「アクセルッ!!」

『はいなの!!』

ヒュンッ

一瞬でティーダの眼前に移動し、左腕を突き出す。

しかしティーダはギリギリのところでバリアを発動し、俺の攻撃を受け止めた。

しかも意外と硬い。

俺は即座に右腕を振り上げる。

「ちょッ!それ使わないんじゃない?」

「バリアを破壊するだけだ!克蘭!!」

『ぶち抜くの!!』

ガシヨンッ

ズガンッッッ!!!!

振り下ろした右腕から、とんでもない速さの杭が飛び出す。

バリアはものの見事に破壊された。

ティーダは破壊された衝撃なのか、身体のバランスを崩す。

「隙あり!」

俺はティーダの腕を掴み引き寄せる。

このまま右拳を腹部に入れて気絶させるつもりだ。

俺は大きく右腕を振りかぶった。

ティーダは「しまった!？」って表情をしている。

「これでラストォ！」

後に俺は思う。

どうして俺は右手で殴ったんだろうと。

どうして俺は、デバイスの状態に気づかなかったのだろうと。

「はああああ!!！」

「避けられなッ!!！」

『ヒヤッハーーーー!!!!ぶち貫くの!!!!』

「「え(は)?」」

ガシヨンッ

ズガンッッッ!!!!

「ちょ…」

「ぐあッ…あ…」

「ティ、ティーダーーーー!!!!」

モロ腹部にパイルバンカーを喰らったティーダは、ゆっくりと背中

から落ちていった。

落ちていく時の「あ…」って表情。

天に向けるように突き出す右腕。

ちよつと涙目。

まるでビルから落ちた人を見た気分だ。

『ふう、さいっこーなの!!』

「……………」

『ますたー? どうかしたの?』

いや、お前がどうした。

そんなキャラじゃなかったよな?

人に撃つなって言ったのお前だよな?

率先して撃ってるお前は何なの? バカなの? 死ぬの?

とりあえず…

「ティード・ランスターに敬 r 「おい」 ……随分ファンキーなヘアースタイルだな、親父…」

振り向くと親父がいた。

オールバックだった髪は逆立って、額には血管が量産されている。

親父はスーパースイヤー人だったらしい。

「音耶…お前という奴は……………」

「俺が…悪いのか? そうだ、クラン先生がやったんだ! 俺は悪くねえ! 俺は悪くねえ!!」

殺されるなら、せめて一花咲かせて死のうぞ。

「言いたいのほそれだけか…？」

「クリリンのことかあああああ！！！！！！」

次の瞬間、俺は宙を舞っていた。

「ティーダ、すまん」

「ははは…」

1時間後。

母さんの治療を受けたティーダは無事復活した。

俺は親父にフルボッコ。

まさか親父が虚空瞬動を使えるなんてな。

「おら克蘭。てめえも謝れ」

『ごめんなさいなの。ついハイになっちゃって…』

「ははは…」

ティーダは笑っているが、やっぱり痛そうだ。

本当に申し訳ないことをしたな。

…あれ？　そういえば俺悪くなくね？

「ティーダ、俺の駄デバイスが本当に悪い事をしたな」

『駄デバイス！？』

「ははは…」

「お詫びといっちゃなんだが、困ったことがあったら力になるからよ」

「ははは…」

ん？

なんかおかしいな。

「ティーダ？」

「ははは…」

「食べ物を噛む場所は？」

「ははは…」

「母は？」

「ははは…」

やべ、バグった。

ティーダはこの後、ミッドの病院へ搬送されたそうなの。

ちなみにイガグリVS Bの勝負は、引き分けだったらしい。

とりあえずイガグリには罰として、1ヶ月ブリーフ生活を言い渡した。

ざまーみろ。

ミッドのとある病院

ガラッ

「おにいちゃん、大丈夫？」

「ああ、ティアか。もう大丈夫だよ」

「ほんと？よかったあ。おにいちゃん、ずっと笑ってるから怖かったんだよ？」

「はは、ごめん。でも、もうなんともないから」

「そっか。そうだ、おにいちゃん」

「ん？」

「おにいちゃんに買ってもらった、ぬいぐるみの名前決まったよ」

「へえ、なんて名前なんだい？」

「うん、クイール！」

「クイールか、可愛い名前だね。……ん？クイール……クイール……
杭ーール……杭ッ！？あ、ああ……」

「おいちゃん？」

「や、やめてくれ……そ、それ以上……!!」

「お、おにいちやん……？」

「僕を……!! 掘らないでええええええええええええええええ!!」

「お、おにいちやああああああああああん!!!!!!」

「今日もミッドは平和だった（笑）」

第15話 久保田。マジでビックバンを感じた（前書き）

どうも、二足歩行犬です。

まず、皆様に謝罪があります。

先日投稿した、音耶の過去を削除しました。
本当に申し訳ございません。

そして、少し変更する部分があります。

まず、主人公の過去は普通の人生だった。という事にします。
コメディーにシリアスはやっぱりなあ…。と思ひまして、変更させて頂くことに決めました。

それと、なのは達の友達もどきとか書いてしまった件です。
あれも、ちょっと捻くれた内容かと思つたので、普通の友達ってことに変更させていただきます。

最後に、主人公の言動&行動についてです。

主人公の良識のない態度に、数々の意見を頂きました。
私も読み返してみても、これはないなと思ひました。

なので、これからの主人公は少し柔らかく描いていきたいと思ひます。

本当に読者の皆様に、ご迷惑をお掛けして申し訳ございませんでした。

これからは誠心誠意、小説の執筆を続けていきたいと思っています。

数々の意見をいただいたことを、お礼申し上げます。

これからはコメディー一直線でやっていくつもりです！
これからも、どうかよろしくお願いします！！

第15話 久保田。マジでビックバンを感じた

時間が経つのは早いものである。

気がつけば新学期から2ヶ月過ぎている。

今日も俺は日課である、学校へと向かうのであった。

見慣れた教室へと到着し、自分の席へついて鞆からある物を取り出す。

虹色に輝くそれは、『貴方の愛情をこの石に注ぐ事で、石は日に日に形を変えていきます!!まずは1日5回のお祈りから!石は貴方を見ています!』が、キャッチフレーズの素敵な七色の石。

その名も『ラブリーストーン』

先日、心優しい露天商が10万のところを5千円で売ってくれた珍しい石なのである。

おっと、早くお祈りをしなくては。

「よく育てや〜、大きくなるんやで〜」

「……あんたは何しとるん?」

「ん? ああ、ハローはやて」

「おはようさん、で、何しとるんや？」

「見て分らんか？お祈りだ」

「分からんわ！朝から気味悪いことしてるんやないっ！！」

気味悪いとはなんだ。

まあ、確かに周りの生徒も引いてるけど。
やっぱ、俺の時代にはついてこれないか。

「それで？なんなんや、その石は？」

「これはだなく。先日露天商が5千円という安心価格で売ってくれた育つ石。正式名称はラブリーストーン。愛称は久保田だ。分かったか？」

「いや、さっぱりわからへん。なんや久保田って…」

イカした名前だろ。

しかしあれだな。この石は将来BIGになる気がする。
やべー、取材とかきたらどうしょ。

この子は俺が育てたって言っちゃおうかな。

「なあ、音耶君」

「なんだ？」

「あんた、騙されてるで」

「？誰にだよ」

「露天商や。そんな石ころが5千円って、どう考えてもぼったくりやで」

なんだと。

「ねえ、はやてちゃん…」

「言っちゃあかん、なのはちゃん…」

「よ～～育てや～～～～」

いつもの屋上。

朝方、狸にぼったくりだと指摘された。

確かに、よく考えればぼったくりだったかもしれない。

しかし！

例えぼったくりでも久保田に罪はない。

俺は久保田がいずれBIGになることを願いながら祈りを続ける。

「アイツってさ、前々から思ってたけど相当変人よね」

「シスコン、ロリコン、毒舌、意味わからん言動&行動。変人としての素養は十分やな」

「もう、はやて言いすぎだよ」

「せやかて本当のことやろ？なあ、なのはちゃん？」

「ごめん、わたしもちよっと引いちゃった…」

「なのはまで…」

背後で連中が何か言ってるが、気にしてはいけない。苦難を乗り越えてこそ、人は成長するものだ。

がんばれ久保田！

いつかBIGになる日まで！！

「お、料理の腕上達したな」

「え、えへへ、そうかな？」

祈りの時間も終了し、毎日恒例の弁当タイム。

週1で弁当を作ってきてくれるなのには感謝。

しかしあれだな。

最近料理の腕が上がってる気がする。

「うむ、キャベツとか素材の味をいい具合に出していて、中々うまいぞ」

「キャベツ……切っただけなんだけど……」

なぜ落ち込む。

「そういえば、音耶君」

「なんだ、すずか？」

「さっきの石って何？」

「久保田だ」

「久保田？」

俺ははやてに聞かせたような説明をした。

なぜか皆から、形容しがたい視線を向けられた。

「音耶って、変な物集めるの好きなの？」

「変な物とはなんだ。変な物とは」

「変な物じゃない」

失礼な奴だな、バーニング。

「まあ、珍しい物とか面白い物は好きだぞ。結構家にも置いてあるし」

「あんなのがいっぱいあるんだ…」

うおい、あんなのとはなんだ。

あの輝きを見ろ。

そこらの物じゃ発しないオーラが滲み出てるだろ。

そういうのに惹かれるんだよ。

つうか、思ったんだけど…

「お前はさっきから何故黙っている、海斗」

「そういえばさっきから静かね」

珍しく静かな奴に視線を向ける。

うん、なんか気持ち悪い。

いつもは騒がしいはずの海斗が、何故かモジモジしながら俯いていた。

うん、もう一回言わせてれ。気持ち悪い。

女子がやると可愛いものも、男子がやるとここまで気持ち悪くなるもんなんだな。

「あ、あの…実はじゃな…」

「お、おおう」

「み、みんなに…料理を作ってきたのじゃ…」

「おいおい、まじかYって！海斗…その手…」

「ちょ、ちょっとミスっただけじゃ！」

弁当箱を持つ海斗の指には、何枚もの絆創膏が貼られていた。

「海斗…お前…」

「ははは…ワシ、料理へたくそじゃからな…」

「なんや、あの桃色の空間は…」

「なんか怖いのが、フェイトちゃん…」

「私もちょっと怖いよ、なのは」

「寒気にする桃色な空間ね」

「音耶君×海斗君…はううつ」

「……すずか？」

「食べて…くれるじやろか？」

「……当たり前だろ！親友！！」

「音耶…、ほな、たと召し上がれ！！」

「ああ！！」

俺は海斗から弁当箱を受け取る。

こんなになるまで、みんなのために…。

美味しく頂こう。

「では、食べさせてもらおう！！」

カパッ

「どや？中々自信作なんじゃけど！」

「……ああ、中々エキサイティングなアートだ…」

「そやろ！さあ、食べてな！！」

これを食べると？

開封した弁当箱に入っていたのは、一言で言えばスライム。
久保田のような七色に光るスライムだった。

「おいおい、なんだこの軟体生物は…」

「軟体生物？それはハンバーグじゃ」

これがハンバーグと言えるなら、ドラクエに出てくるあいつらはハンバーグなんだろう。

「俺は最後でいい。レディーファーストだ、お前らで食べてやってくれ」

「「「「え!？」」」」」

俺達から距離をとっても無駄だ。

海斗は皆のために作ってくれたんだからな。

俺は弁当箱を持って、あいつらに近づく。

「さて、作戦会議だ」

「せやね、このスライムをどう処理するか…」

「アンタが食べなさいよ！男でしょー！」

「男女平等。つかアイツ、皆に食ってくれて言ってただろ」

「どうするの？音耶君」

「うーん、どうするべ」

「いっそのこと捨てちゃうとか？」

「すずかって何気ひどいよな」

「ど、どうするの皆？」

「うゝゝゝん、せや！」

「はやて何か案が？」

「音耶君、ちいっと口開けてみようか」

「騙されんぞ、ブルータス」

「ちっ」

狸がッ。

俺を騙すなんて百万年はやい。

と、いきなりなのはが「そうだ！」と言い出した。

「なのは、どうしたの？」

「音耶君。目を瞑ってくれないかな？ 口は閉じてていいから」

「?? まあ、いいけど」

俺は言われたとおり目を閉じる。

ん？ なにかあいつらが話あってるようだ。

と、次の瞬間。

鼻に違和感を感じた。

おお、めっちゃムズムズする。

俺は何をしてるのか確認するため、瞼を開こうをした瞬間。

とてつもない衝動が襲ってきた。

「ふああ…ふああ…ふああ…」

やべ、くしゃみでそう。

皆さんお分かりかな？

くしゃみが出そうな時って、どうしても口を開けちゃうよね。

「今よ！なのは！！」

「うん！ごめんね、音耶君！！」ガポッ

「ふあ！？ムグッ！！！？？」

口の中に何か嫌な感触が広がる。

そう、まるでクラゲを口に突っ込んだような。

「はやて！！」

「了解や！！」

「うムグッ！！！？？」

何故か狸がいきなり、頭と顎を掴んできた。

そのまま勢いよくガッチンされた。

勢いがありすぎて歯が痛いお。

「ツツツ~~~~！！！？！？？」

突如口の中に広がる味。

いや、これを味と言っていいのだろうか。
例えるならコスモ。

宇宙が俺の口で広がってく感じた。

ああ、意識が遠くなっていく…。

この日初めて、俺はビクバンを感じた。

5 限目

「西野君、顔色悪いけど大丈夫？」

「大丈夫っす…魔王にスライム食わせられただけっすから…」

「まおッ!？」

「スライム？良くわからないけど、保健室行ってきなさい」

「うす……」

ガラッ

「音耶の奴、どないしたんじゃろ？」

「ああゝ、ひどい目にあったぜ」

現在は放課後。

保健室に5、6限目とお世話になった俺は、なんとか復活することができた。

今は教室で皆と駄弁っている。

「せやなあ。被害者が1人だけで良かったわあ」

「その被害者のことは何も考えてないのね」

「男ならいつまでもグチグチ言ってるんじゃないわよ」

「これが女尊男卑というやつか…」

世界がこうも変わるとは。

戦争やってたあの頃が懐かしいぜ、こんちくしょう。

「あ、そうだ。明日暇な人いる？」

「ごめん、なのは。明日は用事が…」

「あたしは暇よ」

「ああ、私は用事あるわ」

「わたしも明日はちょっと…」

「ワシは大丈夫じゃ」

「そっか。良かったら明日お店を手伝って欲しいんだけど…。お母さんとお姉ちゃんが出れなくて…」

「ああ、そういうことね。いいわよ、明日は3人で手伝いに行くわ」

「ありがとう、アリサちゃん！」

ん？3人？

海斗にアリサ。

2人じゃないか。

「何言ってるのよ、あたしと海斗とアンタ。3人じゃない」

「勝手に俺を入れるとか。やはり女尊男卑の説は正しかったか」

「それじゃ皆、明日はよろしくね」

俺はどうやら明日、戦闘民族の住まいに手伝いに行くらしい。
よし、てるてる坊主を逆さに吊ろう。

明日は雨が降りますように、と。

「雨でも中止にはならないわよ。遠足じゃあるまいし」

なんだと。

第16話 バイトですよ。マジでカオス（前書き）

作者の二足歩行犬です！

最近、魔力光診断なるものをやってみました。

作者の魔力光は『牡丹色』。管理的でお調子者らしいです（笑）

で、なんとなくオリキャラの魔力光も調べてみましたWWW

音耶・『鵜色』利乙的で物忘れが激しい

海斗・『マラカイトグリーン』閉鎖的で目立ちがり

雪音・『バイオレット』知性的で照れ屋さん

紫音・『蘇芳』現実的で人の意見に惑わされない

厨二・『アンバー』勤勉で冷酷

以上が診断結果でした！！

うーん、雪音以外はずれてる…。

海斗の魔力光の色の名前にも、カイトと入っていて少し吹きました
WWW

と、長々話してしまいましたが、本編へどうぞ。

第16話 バイトですよ。マジでカオス

「太陽が眩しいぜ、ちくせう」

「何時までウジウジしてんじゃないわよ」

午前10時。

俺、海斗、アリサの3人はなのはに頼まれた喫茶店の手伝いのため、超無敵要塞『喫茶・翠屋』へと向かっていた。くそ、てるてる坊主を信じた俺がバカだったッ。

「よし、今のうちに各自武装の確認をしておこう。俺は久保田を連れてきた」

「武装ってなによ…」

「ワシは、んまい棒黒豆味じゃ」

「おいおい、敵地に武器なしで挑むつもりか、バーニング？とりあえず、んまい棒は貰っておこう」

「あ、ワシのんまい棒おおおおお！！！！！！」

「敵地って…。喫茶店に行くだけじゃない」

「んぐんぐ…ふう、中々美味であった。で、アリサよ。あそこをただの喫茶店だと思うな。あそこの住民の平均戦闘力は1千5百万だ

ぞ。しかも3回の変形を持っている」

「勝手に言ってなさい。ほら、もうつくわよ」

ノリの悪い奴だな。

だからお前はアリサなんだ。

そして海斗、いつまでも泣いてんなや。

少年達が指差してるぞ。

「拝啓、天国のじいちゃん。私はどうやら魔境に来てしまったようです。殺されたばあちゃんの仇の討ってきます。もし、私が帰ってこなかったら久保田をよろしくお願いします」

「バカ言ってないで、さっさと入るわよ」

アリサは俺を無視して地獄の門に手を掛ける。

ああ、俺の人生もここまでか。

ごめんな、久保田。

お前をBIGにさせるって約束したのに。

がちやつ

「こんにちわ〜！」

「こんにちわなのじゃ！」

「ちわ〜っす」

「お、みんなおはよう。今日はよろしく頼むよ」

喫茶店に入ると、ここのビッグボスこと土郎さんが挨拶を返してきた。

今日は眼鏡も居ないみたいだし、核兵器を心配する必要もなさそうだな。

と、前にここであつた事件を思い出していると、聞きなれた声が聞こえた。

「みんなおはよう！」

「なのは、おはよ〜」

「おお、なのは嬢のウェイトレス姿はええのお〜」

「とてつもないオーラを感じるよな」

こう、ゴゴッみたいな。

きつとあれが戦闘装束なんだろう。

「じゃあ、奥で着替えてきてもらえる？場所はアリサちゃんが知ってるから」

なのはの指示にしたがって、俺たちは奥で着替えることになった。
俺の戦闘装束はどんなのかな？
あ、ヤムチャのは勘弁な。

うん、結果から言うと普通だった。

黒いズボンにワイシャツ。

そしてエプロン装着という、なんともユニーク性にかける服だった。

「えっと、アリサちゃんと海斗君は働いた経験があるから、音耶君には私が指導するね」

「うい」

「じゃあ、まずは挨拶からだろうか。元氣よく、いっらしやいませ！って感じでやってみて」

うんうん。

挨拶は重要だよな。

どれ、前世でバイトマスターと言われた俺の力を見せてやろう。

「へい、らっしゃいッ!!…どうだ?」

「うん、元気はいいけど違うね。そんなドヤ顔されても困るよ」

まじか。

ラーメン屋でバイトしてる時は褒められたのに。

「喫茶店なんだから、もっとうこう…上品な感じで」

「上品…ね。おk、まかせろ」

「頑張つて。はい、どうぞ!」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「…もしかして、ふざけてる?」

失敬な。

いたって真面目だ。

お前が上品にやれっていったんだろ。

「もう…海斗君、お手本を見せてあげて」

「了解じゃ。ゴホンッ……いらっしゃいませ(ニコッ)」

バキッ!!

「ぐふお…なぜ…殴るのじゃ…なのは嬢…」

「はうっ！ご、ごめんね海斗君っ！つい…」

「やっぱ翠屋はやバイな」

ドンマイ海斗。

つうか、なんでお前は真面目に微笑むと殴られるんだ？
そういう星の下に生まれたのか？
とりあえず、哀れな奴。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「2人です」

「かしこまりました。好きな席へどうぞ」

なんとか仕事内容をマスターした俺は、現在接客に借り出されてい

る。

しかしまあ、我ながら惚れ惚れするような働きぶりだ。

今は俺と海斗とアリサが接客で、高町2人衆は厨房で働いている。厨房の手伝いを俺達にさせない辺り、きっと知られてはいけない事をやっているんだろう。

うん、この料理は食べたらダメだ。

「アンタも慣れてきたようね」

と、仕事が落ち着いたのかアリサが声をかけてきた。

「まあな。俺はやればできる子だから」

「自分で言う、それ？」

はははっと、2人して笑う。

偶にはこういうのんびりしたのもいいな。

うん、今日は何事もなく過ごせる気がする。
そう願いたいものだ。

カランッ

「ほら、お客さんがきたわよ」

「おう。いらっしやいま…せ…」

俺の願いは数秒で打ち崩された。

「ゼロ、ここが翠屋です」

「ほう、中々洒落た店内だな」

来店したのは2人。

片方はスリムなマントと変てこな仮面をつけた、黒尽くめの人物。もう1人は黒尽くめの服に、変なサングラスをかけた赤髪の女。どこかで見た事のある2人だ。

うん、きっと気のせいだ。

こんなところにブリタニアの王子が居るわけない。

「何名様ですか…？」

「2人だ」

「あ、はい。お好きな席へどうぞ…」

「ああ、了解した」

ここはスルーするべきか？

俺は接客を済ませ、アリサの下へ向かった。

アリサは（。ㇿ。）↑こんな表情をしていた。

「おい、気持ちはわからなくてもないが、とりあえず落ち着け」

「……はっ！ちよ、ちよっと！なによ、あの変態コンビは！？」

「バカやろう、聞こえんぞ」

「と、とりあえず警察に連絡しましょ！」

「アホ、やめとけ。相手は王子様だぞ」

警察なんか連絡して、逆恨みを買ったら敵わん。きつと翠屋にナイトメアで襲撃をかけてくるぞ。

そしたら高町家の住人達が……まあ、勝てるか。ここの戦闘民族なら。

むしろ、あちらが壊されないか心配だ。

「じゃあどうすんのよ、あの変態達」

「俺に任せとけ。一応、変人の扱いは海斗で慣れてる」

「アンタも十分変人だけどね」

うるせい。

「ご注文はお決まりになりましたか？」

「私はチーズケーキを。ゼロは決まりましたか？」

「ああ、そうだな。…おい、店員」

「なんすか？」

あ、もしかしてそういうパティーン？

俺が思ったとおり、ゼロ（仮）は仮面に手をかざした。

「至急シヨートケーキを持って来い！イチゴは一個多くだッ！」

カシヤツ

キューーン

なッ！？

こ、これがギアス……！？

なんて強制力だッ……。

しかし、俺は負けん…負けんぞおおおおお!!!

雪音！！兄ちゃんに力を分けてくれえええええええええええ！

「……ふう。申し訳ございません、量は規定のものでやってますので」

「なッ!?! ギアスが効いてないだど!?! 貴様、何者だッ!?!」

「ふっ……ただの妹LOVEのバイトですよ」

やっば雪音の力は偉大だった。

残念だったなゼロ。

俺にギアスは効かんよ。

「くっ！カレン、直ぐに扇達に連絡だ！！ナイトメアを此方に向かわせろ！！」

「はい！」

「おっと、いいのかなぜロ？ここにはナイトメアを蚊のように潰せ

る魔王様がいるんだぜ？」

「ナイトメアを蚊のように潰すだとッ！！？？」

ああ、たぶん紅蓮をも瞬殺するな。

だから別にナイトメアごときでッ！！？？殺気！？

ガシッ！！

「だ・れ・が・ま・お・う・だつて~~~~？」 ミシミシ

「な、なのは…頭が…と、トマトに…なっちゃ…」

「にゃはは、トマトになっちゃえっ「アッ…」……お客様も何か？」

「はう！す、すみませんでした！！」

「わかってくれればいいんです。そちらの仮面の方も何か？」

「ぜ、ゼロ。ここはおとなしく謝っておきましょうっ！」

「ナ、ナナリ…お、俺はこんなところで…！」

「ゼロ？ゼロおおおおおおお！！！！！！」

やっぱり魔王は最強だった。

「……ありがとうございます」

やっと帰ったか。

あの2人の背中を見て溜息を吐く。

なのはなんか去り際に勧誘されてたし。

「黒の騎士団に入らないか？共に日本を取り戻そう！！」とかないとか。

「音耶君、休憩入ろ」

「おう」

やっと飯か。

腹減って死にそうだったんだよな。

ん？ちよつとまで。

まさか人肉のソテーとか出てこないよな。

「飯はまともか…」

「ん？何か言った？」

「いや、何でもない」

俺は休憩に入り、用意されていた賄いを食していた。
案外まともな食事で安心。

海斗とアリサは、俺達の次に休憩に入るらしい。

なので現在は俺となのはの2人。

食べられないことを祈ろう。

「そういえば音耶君」

「あ？」

「久保田を持ってきたんでしょ？なんで？」

「なんでとはまた奇怪な質問を。言うなら、久保田は俺が育ててるから」

おい、なんだその目は。

久保田だって生きてるんだぞ。

成長だっけするんだぞ。

「いや、音耶君もバカだな〜って」

「俺より成績悪い奴にバカって言われた、これいかに」

「うっ…せ、成績は関係ないの!!」

「まったく、うるせえ魔王様だ。」

「うん、言うより見せたほうが早いかな。」

「俺は持ってきた鞆から、久保田を取り出してテーブルに置く。」

「……ねえ、音耶君…」

「なんだよ?」

「久保田……大きくなってない?…」

「立派に成長してるだろ」

「テーブルに置いた久保田は、昨日は親指サイズだったが、今は野球ボールサイズになっている。」

「うんうん、よう成長するな。」

「久保田も早くBIGになろうとしてるんだ、きっと。」

「なんで石が成長するの!?!」

「……ラブリーストーンだからじゃね?」

「理由になってないよ、それ!?!」

「本当うるさい奴だな。」

「久保田が俺の愛情に応えた。」

それでいいだろうが。

「と、とりあえずお札貼っておこう!？」

「うおい。人の子を髪の伸びる人形みたいに扱うな」

「で、でも…」

「とにかく久保田には指一本触れさせん。分かったら、さっさと手に持った札を捨てろ」

「……もう、意味が分からなくなってきたの…」

お前が意味わからん。

久保田、仕事が終わるまで鞆でおとなしく待ってるんだぞ。
俺は久保田を鞆に戻し、食事を再開する。

「しかしあれだな。なんか妙に疲れたぞ」

「にやはは、今日は変なお客さんが来てたからね」

「そんな変人に勧誘されるお前はもっと変Zオーケー、撤回するか
らフォークを下ろせ」

「まったくなの…。でも、もう少しだから頑張って」

「んゝ、考えとく」

「うん、期待してるから」

期待してるねえ…。

ま、偶に弁当作ってくれるし、少しは恩返しすっかな。

「ごっそさん。うし、仕事始めようぜ」

「うんっ！」

残りの時間、気合入れてくか。

カランッ

「いらっしやいま…：…せ…：…」

「来てやったわよ…！！！」

「おい、失礼だぞハルヒ」

「わぁ、キレイな店内です」

「……………」

「まっがーれ←」

もうやだこの店。

第17話 三者面談。マジで俺が行くのか（前書き）

明けましておめでとうございます!!
今年もどうか、よろしく願います。

更新が遅くなってしまって、申し訳ございません。

今回は長くなりそうなので、2話構成にしました。
前編である今回はギャグ少なめです。

それと、オリキャラの現時点での強さ表を載せときます。

魔導師3人娘の強さはわからないので、今回は互角にしました。
あくまでこれは個人の戦闘力表です。

なのは（魔王化）>>親父（スーパーサイヤ人状態）>>>>>>
超えられない壁>>>>>クレス>>親父>>>なのは・フェイ
ト・はやて>>母さん>>海斗・シグナム>>ヴィータ>>音耶（
パイルバンカー装備時）>>音耶・ザッフィー>>紫音・ティーダ
>>シャマル・雪音

あんまり強くない主人公（笑）

マル子はサポートなので、これくらいの強さにしました。
雪音の戦闘シーンは出してませんが、今のところ強さ的にはマル子
くらいの位置です。

では、本編へどうぞ

第17話 三者面談。マジで俺が行くのか

これは、ある日の夜の出来事。

この日はいつも通りの平凡な日だった。

学校へ行き、寝て、屋上で昼食をとって、寝て、帰宅。

なんともまあ、刺激のない1日だった。

そして、今は夕食を食べ終え自由な時間。

俺はソファーに腰掛けながら、ぼーっとテレビを見ていた。

「…おにいちゃん」

「ん？どうした雪音？」

結いでいた髪を下ろし、ピンクのパジャマを着た雪音が話しかけてくる。

見慣れた姿だが、そんなの関係なく俺の気分は有頂天。

と、雪音が一枚の紙を差し出してきた。

「これ…」

「ん、なにに…『三者面談について』？」

ああ、もうそんな時期か。

なら、親父に連絡しとかないと。

俺は通信用のデバイスを自室に取りに行く。

その際机を開けたら、クランが『寂しいと死んじゃうの』とか何とか言っていたが、気にせず引き出しを閉めてあげた。

まあ、引き出しに閉じ込めているのは理由がある。
先の模擬戦で暴走したからだ。

反省という感じで罰を受けさせてる。

……そろそろ出してやってもいいか。

とりあえずクランのことは後で考えることにして、手に持った通信用デバイスを起動させる。

数秒経つと、空間モニターに親父が映し出された。

『何か用か?』

「ああ。近々、雪音の三者面談がある。おそらく紫音も」

『そのことか。日にちはいつだ?』

「え……っと、7月5日。姉弟だから紫音も同じ日付だと思う」

『7月5日か…。すまん、行けそうにない』

「は? 母さんは?」

『あいつも無理だろうな。最近やたらと忙しくてな、私達もあまり顔を合わせていないんだ』

「まじかお。んじゃ、どうするわけ?」

『ふむ。……すまんが、音耶が行ってくれ』

「What? どうして俺が…」

『兄だろ。教師には私から連絡しておく。む、すまん、もう切るぞ。通信が入った』

「おい、なにk『またな』……このニコ中がッ!!」

どうやら俺は妹と弟の三者面談に行かなければならぬらしい。別に嫌ではないぞ。

タキシードってどこにあったっけ？

三者面談当日。

俺は学校が終わり次第、小学校へ行く予定だ。

俺は持ってきたタキシードに着替えるため、教室を出ようとしたら、魔王に行く手を阻まれた。

「ねえ、音耶君」

「そこをどけ、小娘」

「どこ行こうとしてるの？ 委員会の仕事が残ってるよ？」

そう、俺と魔王は委員会が一緒。

今日は所属委員会である、放送委員の会議ある。

行く気？

んなもん、さらさらない。

雪音の方が幾億倍も大事だ。

「今日は欠席する。てな訳で、あとはよろ」

魔王の横をすり抜けようとすると、肩をガシツされた。

相当力を入れているのか、俺の肩がミシミシと悲鳴を上げている。

「まさか昼の放送をサボっておいて、会議もサボるなんて…し・ない・よ・ね？」ミシミシッ

「お、俺には、やらなければ、ならんことがある…」

「またまたそんなこと言って。もう騙されない、よっ」グッ

アウ……。

「うわっ、肩に手の痕が…」

「ホラーじゃ！ホラーなのじゃあああ！！！」

肩が変形する寸前で、いつもの面子が救助してくれた。
めっさ痛かったので、今は保健室で湿布を貼ってもらっている。
というか、どんだけ力があんだよ魔王。

「で、でもっ、サボろうとした音耶君が悪いんだよ！？」

「なんや、放課後もサボろうとしてたんか？」

「いや、マジで用事があっから出れないんだ」

「そうならそうと始めから言ってよ。じゃあ、昼も何か用事があったの？」

「ああ、昼は……………」

「…………やっぱり、ただのサボり？」

「……………やんのかコラァッ！！！！！」

「うわ、逆切れしよったでコイツ。意味がわからんわ」

「やっぱりただのサボりだったんだ…。わたしがどれだけ恥ずかしい思いしたか…！」

「昼の放送、なのは嬢めっちゃテンパってからのう」

「聞いてるこっちが恥ずかしかったわ」

「まあ、でもウケてたよね」

「しょうがないだろ。」

「昼は久保田の世話をしてたんだから。」

「まあ、俺も放送聞いて吹いたけど。」

「で、用事ってなんなん？」

「ああ、今日は三者面談の日だ」

「三者面談？もしかして雪音達の？」

「おう。親父達が用事で行けないらしいからな。代わりに俺が行く事になった」

「もう…：そうならそうと言ってよ」

「言う前にガシッされたけどな。そういう訳で会議はパス」

「うん、じゃあ言うておくよ」

「よろ。さて、俺もそろそろ行くかな」

俺はタキシードに着替えるため、保健室のカーテンを閉めようとした。

「なにしようとしてるん？」

「着替えるんだよ」

「着替える？そのままでもいいじゃない」

「バカやろう。正装っていったらタキシードだろ」

俺は袋からタキシードを取り出して、見せ付ける。
なぜか狸に奪われた。
なぜだ。

「こんなん着てったら、逆に恥ずかしいわ！！」

「タキシードが恥ずかしい？はっ、これだから平民わ」

「殴るで…？とりあえずこれは預かってくから、さっさと行きい」

俺は連中に追い出され、タキシードを着れなかったことを悔やみながら学校を後にした。

「で、着きました小学校」

「兄貴何言ってんの？」

てな訳で小学校に着きました。

紫音の面談が先なので、現在教室の前で合流した紫音と待っている。
なぜかここまで来る時、結構な視線の量を感じた。
やはりタキシードじゃないからか。

ガラッ

「失礼しました」

お、前の人が終わったようだ。
俺らも行くかな。

「紫音、行くぞ」

「おう!!」

ガラッ

「失礼します」

「失礼しまーーす!!」

教室に入って会釈すると、中には見た事のある教師が座っていた。

「おお、来たか。久しぶりだな、西野兄」

「紫音の担任ってアンタだったんすか、ゴリ先生」

座っていたのは、俺の小学5、6年時代の担任だった。

本名は川谷。

通称、ゴリ先生。

BIGな図体と、暑苦しい顔。

まさにゴリだ。

これで弓道なんかやってるんだから驚きだ。

「おいおい、そのゴリ先生ってのもいい加減やめてくれ」

「慕われてる証拠だろ、ゴリ先生」

「ま、いいか。ほら、じゃあ席に着いてくれ」

俺たちはゴリ先生の向かいに、並んで着席する。

ゴリ先生は手元にある書類から、成績表らしき書類を俺達に見えるように置いた。

「これが西野弟の1学期のテスト結果だ」

差し出された書類には、赤い丸が多く付いていた。
ていうか全部赤丸だった。

「はっきりに言ってヤバイぞ。小学校だからまだしも、中学に入って

この点数はだったら…」

「確かにヤバイっすね。おい紫音、こりゃあどうゆうことだ？ テスト前に勉強教えたる」

「筋トレしてたら忘れた！ でも大丈夫だよ、兄貴。中学になったら真面目にやるから！」

「そう言ってる奴こそ、やらないもんなんだよ」

しかし全部10点台はさすがにやばいぞ。

中卒なんてやめてくれよ。
就職に苦労すんぞ。

「とりあえず帰ったら説教な」

「えええええ！！？？」

「がははっ！ おとなしく説教されとくんだな」

落ち込むイガグリに豪快に笑うゴリ先生。

イガグリは忘れてるようだけど、親父にも説教されっぞ。

スーパーサイヤ親父になって、きっと鉄拳制裁を喰らうはずだ。

「まあ、体育の成績はかなりいいがな」

「運動神経だけはいいですからね」

「握力計を振り切った時は、さすがに驚いたぞ」

おいしい、小学生で100kgを振り切るのはヤバイだろ。
もう俺より力あんじゃね？

「筋トレの賜物だよ兄貴。兄貴だって小学生の時100kg出したでしょ？」

「まあな。でもなぜか不正ってことで、小学生の平均握力で記録されたけど」

「ああ、あの時のことか。当時の体育教師は頭が固い奴だったからな」

「本当だよ。小学生でそんな握力が出せるかー！ー！とか言われたし」

「ドンマイ兄貴！！」

るせえ。

まあ、普通小学生で握力計振り切る奴なんていないしな。
不正だと思われても仕方ないか。

「つと、話が逸れたな。西野弟の自宅での普段の様子を聞いてもいいか？」

話を戻したゴリ先生から質問を受ける。
普段の様子ね…。

うん、家事も手伝わないし、筋トレばかりしてるな。

「主に筋トレっすね」

「それは予想がつく。家事などの手伝いはしないのか？」

「ええ、まったくしません。自宅での生活の8割くらいは筋トレです
ね」

「兄貴、そこは『家事も率先して手伝ってくれるし、此方は大助かりです』って言うところだよ？」

「言って欲しいなら、少しは手伝え」

「そうだぞ、西野弟。少しは兄の手助けをしてやれ」

「へーい」

あ、こいつ絶対わかってねえや。

「さて、聞く事も聞いたし、そろそろ終わりにするか」

「早くないっすか？」

「妹のところにも行くんだろ。さっさと行ってやれ」

お、気が利くなゴリ先生。

あ、でもその前に：

「雪音の方はどうですか？」

「ああ、弓道の腕前は日に日に上達してるぞ。優しい奴だから、結構慕われているしな」

「そうすか。これからも妹と弟共々よろしくお願いします」

俺は感謝の意を籠めて頭を下げた。

……って、うおい。

なぜそんなに驚く。

「がははははッ！！なんだ、お前も成長してるじゃないか」

「家族の世話してたら嫌でも成長しますよ」

「そうかそうか。ま、偶には顔を見せに来いよ？」

「まあ、気が向いたら」

俺達は席から立ち、礼を言って、教室から去っていった。

ゴリ先生は基本いい人だから、安心して弟と妹を預けられる。

まあ、見た目はゴリだけど。

さて、次は雪音か。

俺は紫音と別れて、雪音の教室へと向かった。

階段を登ってる時、踊り場で話している保護者と思わしき、マダム達の会話が偶々耳に入った。

「山田さん、さっきの親御さん見たっ？！」

「ええ、白衣の男性とスーツの女性でしょ」

「きっと学者か何かよっ。奥さんも美人だったし」

「玉の輿ね！私が奪っちゃおうかしら。ぶおっほほっ！」

白衣姿の学者？

はあ、こりゃまた凄い保護者もいるもんだな。

きっと子供もエリートなんだろうな。

つうか白衣で来るって（笑）

ま、俺には関係ねえけどな。

早く雪音のところに行こう。

俺はルンルン気分でスキップしながら階段を登った。

この後、思いもよらぬ人物との出会いがあるとも知らずに。

次回に続く！！

第17話 三者面談。マジで俺が行くのか（後書き）

お疲れ様でした。前編終了です。

次回は後編！！

次回はあの人達が登場！！

まあ、皆さん大体分かりますよね W W

第18話 三者面談2。マジで危ない奴かも（前書き）

こんにちわ、二足歩行犬です。

今回は前回の後編。

では、本編へどうぞ！

第18話 三者面談2。マジで危ない奴かも

私はナンバーズの5番。チンクだ。

私はドクターの命令で、ある少女に関する調査任務を行っている。
少女の名前は、西野雪音。

ドクターの推測だと、聖王の器になりえるかもしれない少女らしい。
任務の内容は、主に彼女の周辺調査。

そして私は調査のため、現在第97管理外世界に住んでいて、西野雪音と同じ学校に通っている。

なぜ私がこのような任務に就くのかドクターに尋ねたところ、どうやら調査対象と身体的年齢が近いかららしい。

あの時は思わず、ナイフを投げてしまった。

そういう訳で、私は現在隣に立っている少女のことを調べている。

「…チンク……まだ来ないの？」

「ああ、ド…父はそろそろ来るだろう。雪音は兄が来るんだったか？」

「うん…おとーさん達、来れないらしいから…」

「そうか」

ドクター、やはり私には、こんな普通の少女が聖王の器になりえるとは思えません。

あの時の光景も何かの間違いだったと思います。
ドクターが雪音に興味を持った原因。

それはあの時の雪音の……

（回想）

この日、私達はドクターの付き添いで無人世界にある、かつてのアジトへと着ていた。

メンバーはドクターと私とウーノ。

何でも、昔に放棄した資料を取りに来たらしい。

アジトは管理局に発見されてなかったようで、昔と変わらぬ姿をしていた。

私はドクターに頼まれた物を探し出し、ドクターのかつての自室に持っていった。

自室に居たドクターとウーノは、なにやら空間モニターを凝視していた。

「ドクター、資料を持ってきました。それと、何を見ているのですか？」

「ああ、ご苦労だったね。どうやら管理局の魔導師が、この無人世界に来ているようだ」

そう言いながら、モニターから目を離さないドクター。
私はドクターの横からモニターを覗いた。

「アジトがばれたわけではなさそうですね」

「ああ。見たところ模擬戦か何かをしにきたのだろう」

「いちいち無人世界にですか？」

「そうだね、それが謎だ。なぜこのような無人世界で訓練などするのか…。私には、なにか彼らには秘密があるのだと思うよ」

秘密？

見たところ局の魔導師と、あまり年の行かない少年達が模擬戦をしているだけのように見える。

ただ模擬戦をしているようで、重大な何かをしているように思えない。

「！…ドクター、こちらをご覧ください」

突然ウーノが、驚いたような表情をした。
そして、あるモニターを拡大させる。

「……ドクター、これは…」

「……クッククツ…ハッハッハッハッハッゲホゲホツ
ゴホツ…ああ、偶然とはまさにこの事を言うようだ。ウーノ。」

「わかっています、ドクター」

ウーノはパネルを操作し始める。

ドクターは笑みを浮かべながら、先ほどのモニターを穴が開くほど見つめていた。

ドクターの見つめる少女。

その少女の魔方陣の色は、綺麗な虹色をしていた。

~~~~~

そして調べた結果、あの時の少女は、管理局のカイ・リルウィーゼ・西野一等陸佐の娘だと分かった。

ドクターは雪音が、聖王に何か関係していると思っているらしい。私はただドクターが願うなら、それを実行するだけだ。

side out

「6年2組はこっちだったよな…」

俺は雪音の下へ向かうべく、3階の廊下を歩いている。

卒業してから全然来てないから、学校内部の事は忘れてしまった。いや、認知症じゃないぞ。たぶん。

と、俺の脳内にキュピーンッと何かが走る。

近くに雪音がいる！！

俺の雪音アンテナがビンビンに反応してやがる。



目を細めて廊下の先を見る。  
間違いない。

あの癒しオーラを纏っている少女は、絶対雪音だ。

発見したら俺の行動は早い。

背番号21番のどこぞのアメフト選手をも凌駕スピードで、一気に廊下を駆け出した。

ダダダダダダダッ！！！！

前方に白衣のおっさん発見！！  
隣にはスーツのお姉さん！！  
なるほど。

俺を雪音の下へ行かせないための壁か。  
しかし甘いッ！！  
そんなもので俺を止められると思うな！！

「ん？ウーノ、何か聞こえないかい？」

ダダダダダダダッ！！！！

「これは、何かが走r「音耶バットゴーストッ！！」きゃっ！！」

抜けたッ！！

俺は幽霊アタックのごとく、白衣マン&スーツウーマンの間から抜いた。

抜けた際、手に何かが引っかったが気にしない。

俺は手に引っかった白衣を持ったまま、雪音の下へ全力疾走した。  
白衣は後で返せばいいだろう。

「雪音~~~~~!!」

俺は走りながら雪音の名を呼ぶ。

俺に気づいた雪音は、小さく手を振っている。

ああ、可愛い…。

ダダダダダッキイツ!!

「雪音、遅くなってゴメンな」

「…んん…全然だいじょうぶ…」

とりあえず雪音のナデナデする。

照れる雪音。

感動して目頭が熱くなってきた俺。

絶句する銀髪ロリ。

……ん？

「雪音。このポカーンとしてる、銀髪眼帯キュートロリは誰だ？」

「…ともだち…」

おお、雪音の友達か。

雪音に劣らず、可愛い娘っ子じゃないか。

しかも銀髪&眼帯ときた。

よし、お兄さんがお小遣いをあげよう。

「で、いつまで呆けているんだ。銀髪ちゃん」

「はっ!？ ゆ、雪音…これがお前の兄か…？」

「うん…音耶おにいちゃん…」

「な、なんというか…：危ない奴だな…」

うおい。

初対面の相手に失礼だろ。

だれが危ない奴だ、誰が。

「まあ、さっきのは聞かなかったことにしよう。俺は西野音耶。雪音の兄だ。よろしくな」

「う、うむ。私はチンク・佐藤だ」

チンクちゃんか。

いい名前じゃないか。

しかしハーフか？

佐藤とか、全国苗字ランキングで1位になりそうな苗字だな。

「それと、先ほどから気になってたんだが、その手にある物はなんだ？」

チンクちゃんは俺の持っている物を指差しながら尋ねてくる。

ああ、これか。

早く返しにいかないと。

「これはS「それは私の白衣だよ、チンク」噂をすればなんとやらだな。さっきはすんません。急いでたもんで」

俺の言葉を遮って入ってきたのは、先ほどの白衣のおっさんだった。とりあえず、謝って白衣を返す。

白衣のおっさんは「気にしないでいい」と言って、手渡した白衣を再び羽織った。

結構いい人らしい。

「父よ、やっと来ましたか」

「遅くなってすまないね。道に迷ってしまったよ」

「正確には、道ではなく校舎です。ドク…貴方」

「そうだったな。クッハッハッハ」

額に手を置いて、独特の笑いをしているチンクパパ。

つうかさ、なんかこのおっさん見た事ある気がするんだけど。

チンクちゃんもどっかで見たような…。

原作で出てたのかな？

いやはや、最近原作知識をほとんど忘れちゃったよ。

一応言っておくが、認知症じゃないぞ。

「改めて紹介する。私の父と母だ」

「ジェイル・佐藤だ。よろしく」

「ウーノ・佐藤です。よろしくお願いします」

「あ、これはご丁寧に。雪音の兄の西野音耶です」

ジェイルさんと握手を交わす。

佐藤さん一家と挨拶を終えると、何故かジェイルさんは雪音をジロジロ見ていた。

ニヤツつとしていてムカつく。

殴っていいかな？

「ふむ、君が雪音君か。チンクから話は聞いているよ」

「…どもです…」

「クックック。これからもチンクをよろしく頼むよ」

雪音はジェイルさんに軽く会釈して、俺の背中へと隠れた。

雪音もジェイルさんが危ない奴って気づいたか。

あの人、絶対変態だ思う。

「父よ。あまり雪音を怖がらせないでくれ」

「ああ、これはすまないね。クックック」

だからその笑い方が怖いんだよ。

と、ジェイルさんに若干警戒をしながら雑談していると、教室から先生が顔を出した。

「西野さん。面談を始めますんで、教室に入ってください」

「あ、わかりました。雪音、行くぞ」

「…うん」

佐藤さん一家に目礼をして、俺達は教室へと入っていった。

＼チンク side＼

「クツクツク。あれが雪音君か」

「いたって普通の子のようですね。チンク、あの子の事教えてくれないかしら」

「ああ。雪音とは親しくしているからな。人柄については良くわかる。性格は穏やかで優しくて若干人見知りだ。照れた時の表情がまた可愛くてな。つい甘やかしてしまう。例えるなら……そう、妹のようだ。いや、むしろ私の妹にしたい。あと雪音は兄が大好きでな。偶に殺意を湧いてしまう。なんで私が雪音の姉じゃないんだ。なんであんな変人が雪音の兄なんだ。できるなら交代して欲しい。いや、むしろ交代するべきか？……ダメだ。それでは雪音が悲しんでしまう。雪音は何であんな変人の事が好きなんだ。くそ、なんだこのやるせない気持ち。雪音と暮らしたい。雪音の世話をしたい。雪音と一緒に寝たい。雪音と入浴したい。はあ……私はどうすればいいんだ？ウーノ」

「……私に聞かないで。それと、私が言ったのは西野雪音についての報告よ」

なんだ、その事か。

それならそうと最初に言って欲しいものだ。

「それでどうなのかね？ チンク」

「はい。見たとおり普通の少女です。瞳の色も聖王独特のものと違います。今のところは大した情報はわかっていません。あと、雪音の髪を1本採取しておきました」

私は髪の毛の真空パックをドクターに渡す。

「ふむ。これでDNAが調べられるな。結果がでたら報告するよ」

「わかりました」

「じゃあ引き続き調査を頼むわ。何かわかったら報告をお願いね」

「ああ。了解だ」

こうして私達は雪音の面談が終わるまでの間、事務的な話を続けていた。

＼ side out 〵

「つてな訳で、2人ともこんな感じだった」

『そうか。ご苦労だったな、音耶』

俺は夕食が済んだ後、親父に連絡を取った。

現在は3人並んで、空間モニターに写る親父に面談の報告をしていた。

心なしか2人とも緊張しているようだ。

まあ、親父切れるとヤバイもんな。

つうか紫音。

お前はビビリすぎだ。汗がやばいぞ。

『ふむ。雪音』

「…うん」

『お前は成績もいいし、弓道の方もちゃんとこなしているようだな。良くやった。これからこの調子で励むんだぞ』

「…わかった」



まあ、雪音は先生もベタ褒めだったしな。  
兄ちゃんも鼻が高いぞ。

『で、紫音』

「ふぉぁいっ!!」

親父に呼ばれた紫音はビクウツってなった。  
返事もどこかおかしいし。  
相当ビビってんな、コイツ。

『お前も頑張っているようだな。体育は成績がいいと聞いたぞ』

「お、おう!俺頑張ってるよ!!」

『ふむ。そのようだな』

あれ?てつきり親父切れると思ってたけど。  
紫音も怒られないことにほっとしたのか、ガチガチだった姿勢を崩した。

『なんて言うとも思ったか。このバカ息子!!』

「ひッ!!??」

『お前、なんだこの点数は?体育だけ良くては意味が無いだろうが  
!!』

「だ、だって…」

『紫音。帰った時は覚悟しておくんだな。以上だ』

ブウンっと音を立てて、空間モニターが消える。

雪音は褒められたことが嬉しいのか、表情が柔らかい。

紫音は目をカッツと開いて、歯をガチガチと鳴らしている。

「あ、兄貴…俺、死んじゃうかも…」

「なんつうか、ドンマイ」

紫音は「ああああああ」っと不気味な声を上げながら、リビングから出て行った。

安心しろ。骨は拾ってやる。

俺が紫音の去っていった方向に手を合わせていると、雪音が服の袖を引っ張っていた。

「どうかしたか？」

「あのね…見てほしいもの、ある…」

見て欲しいもの？

俺が疑問に思っていると、雪音は人差し指をピンツと立てた。

次の瞬間、雪音の指先に魔力が集まる。

「それって…」

「やっと…見つけた。…私の…魔力光…」

雪音の指先に集まる魔力は、銀と赤が混ざったような色をしていた。確か灰桜って色だ。

「紫音…と、おにいちゃんに…ちかい色…」

わざわざ俺達に合わせるために、そんな面倒な事をしてくれたのか。  
雪音。

なんて可愛い奴だ!!

「でも、いいのか？虹色の魔力光、結構気に入ってたろ？」

「…うん…。でも…やっぱり、これが一番…」

「そかそか。愛い奴め」

「…えへへ…」

はにかむ雪音カワユス。

俺を悶死にさせる気か？

ああ、もう…。死んでもいいや…。

「じゃ…もう、寝るね…」

「ん？ああ…おやすみ」

「…おやすみ」

雪音はトコトコと、リビングから去っていった。

ふう。しかし雪音のレアスキルは良くわからんなあ。

俺はそんなことを思いながら、ソファーに移動する。

雪音のレアスキル『魔力波長操作』

自身の魔力波長を任意で変更できる能力。

魔力光とは個人の魔力波長によって、色が変化するらしい。ちなみに魔力波長を変えたからといって、魔力資質が変わるわけではない。

それとこれとは別だ。

雪音曰く、魔力波長を変更するのは相当面倒な作業らしいが、魔力光を好きに変えられるので結構気に入ってるらしい。

ま、戦闘とは関係ない能力だから、実戦では使えないと思うけどな。

「虹色、結構綺麗だったんだけどなあ」

雪音が以前まで使っていたのは、虹色の魔力光。  
なんか、偶然見つけたらしい。

気に入ってる魔力光まで変えるほど、俺達と近い色が良かったんだな。

まったく、嬉しすぎて鼻血が出そうだぜ。

くカイsideく

「はあ」

私は息子達との通信を終えると、溜息を吐いた。

紫音も鍛えることばかりではなく、勉強のほうにも少しは力を入れて欲しいものだ。

それに比べ雪音は、自分の子と思えないほど才能に満ち溢れてるな。将来必ず化けるはずだ。

おっと、仕事を再開せねば…。

コンコンッ

「入れ」

ウィーンッ

「失礼します。先日の教導の報告書を提出しにきました」

入室してきたのは最近部隊に入隊した新入り、高町なのはだった。ふむ。彼女はオフのはずだったが…。

ああ、報告書を提出するのにわざわざ来たのか。まったく、仕事熱心なものだ。

「すまないな、今日はオフだったろう」

「いえ、時間の合間に来ましたので」

「そうか。では、受け取っておく。ご苦労だったな」

「はい。あの、西野部隊長。少しお疲れのようですが…」

ん？そんなに顔に出ていたか。

「ああ、最近休んでいないからな。それに、先ほど息子から連絡が

あつてな」

「息子さんですか？」

「そうだ。次男の成績が良くなかったとな…」

「はははっ、そうですか」

「学生の身なのだから、勉強には励んでほしいものだ」

ビクッ

「そ、そうですね」

「そういえば、高町も学生だったな」

「は、はい。そうですが…」

「成績はどうなんだ？」

ビクッ

「え、えっと……」

私の問いに、高町は目を逸らした。  
なるほど、良くないのだな。

「高町、そこに座れ」

「は、はい？」

「座れと言っているんだ」

「……はい」

ガツクリしている高町に1時間ほど説教をしてやった。

やはり学生の本分は勉強だからな。

私は密かに、高町のシフトを減らすことに決めた。

それと、音耶。

彼女にお前達のことをバレるのも、時間の問題だと思うんだが。

## 第18話 三者面談2。マジで危ない奴かも（後書き）

スカさん登場！！

チンクちゃん登場！！

影が薄い気がするウーノさん登場！！

スカさん一行の目的は雪音のようです。

聖王の関係者だと勘違いしてるようですね。

雪音にも難儀な能力を持たせてしまった。

さて、次回は本編は一旦置いて…

オリキャラ設定を公開したいと思います！！

では、次回もよろしくお願いします！！



## オリキャラ設定（前書き）

こんにちわ。

今回はオリキャラ設定集です。

しばらく戦闘描写はないと思いますので、今回の設定集でオリキャラの武装や戦闘スタイルなどを一気に載せます。

おかしい点がありましたらご報告ください。  
直ぐに訂正いたしますので。

では、どうぞ！

## オリキャラ設定

〽オリキャラ設定集（F a t e風にまとめてみた）〽

今回オリキャラ設定は以下の項目を記します。

- ・ C L A S S（というか戦闘スタイル）
  - ・ 真名（普通に名前）
  - ・ 性別
  - ・ 属性（重んじる方針のようなもの）
  - ・ 能力値（耐久は本人の耐久度と、バリアジャケットの性能、防御力を合わせたものです）
  - ・ 詳細（容姿なども含む）
  - ・ 保有スキル
  - ・ デバイス
  - ・ 宝具（ここでの宝具は必殺技とかにします。またはレアスキル。ちなみに対城宝具は、対物と考えてください）
  - ・ 皆さんから一言
- 以上です。

参考になのはステータスも作りました。

一般局員の平均能力値も作りましたので、参考にしてください。作者から見たなのはさんなので、間違ってるかもしれないです。

C L A S S 一般局員

『ステータス』

|      |      |
|------|------|
| 筋力…E | 魔力…E |
| 耐久…D | 幸運…D |
| 敏捷…E | 宝具…E |

~~~~~

CLASS 単身行動型ランチャー

真名 高町なのは

性別 女

属性 秩序・善

『能力値』

筋力…E 魔力…A+

耐久…A+ 幸運…B

敏捷…C 宝具…A++

『詳細』

ここは飛ばします。

『保有スキル』（ためにしに1つ載せます）

・エクセリオンモード…A

レイハさんのフルドライブモード。

自分とレイハさんのリスクを無視して行う、自爆パワーアップモード。

簡単に説明すると、全能力値1ランクアップ。

『デバイス』

・レイジングハート・エクセリオン
なのはさんの忠実な僕。以上。

『宝具』（とりあえず2つほど）

・デイベインバスター全てを貫く閃光

文字通り全てを打ち抜く、直射型砲撃魔法。
得意なのは壁抜き。

ランク…A

種別…対城宝具

レンジ…なのはさん次第

最大捕捉…同一ライン上に居れば、100人ほど。

・スターライトブレイカー星光の殲滅砲

なのはさん最強の集束砲撃魔法。

喰らったらトラウマ間違いなしの砲撃。

恐怖という名の精神的ダメージの特典付き。

これを喰らったら、なのはさんに逆らえなくなるらしい。

Fさんも被害者の1人。

ランク…A++

種別…対軍宝具

レンジ…100mくらい？

最大捕捉…測定不可

『なのはさんを一言で表すと』

「魔王」〈O・Nさん〉

「切れるとヤバイで」くH・Yさんく

「可愛いところもあるんじゃないけどな」くK・Kさんく

「僕の嫁」くK・Rさんく

と、こんな感じでやっていきます。
では、どうぞ。

くくくくくくくく

CLASS 高速戦闘型ファイター

真名 西野音耶

性別 男

属性 中立・善

『能力値』

筋力…B 魔力…C

耐久…B 幸運…D

敏捷…B 宝具…A+

『詳細』

西野家の長男で中学2年生。
転生者の1人。

黒髪に黒目の純日本人。いつもダルそうな顔をしていて、第一印象は悪い。

顔は普通とイケメンの境界線くらい。

変態でシスコンでロリコンである。

結構家族は大事にする性格で、特に妹には甘すぎる。

変な物を集めるのが趣味で、周りから変人と認識されている。

魔法体系は古代ベルカ式。魔力光は銀色。

細かい作業が不得意で、射撃魔法は大の苦手。

接近戦一筋で戦闘を行う。

転生者が他にいるとは、今はまだ気づいていない。

『保有スキル』

・雪音アンテナ…A

近くに雪音がいると反応する。

雪音用内蔵探知機。

・雪音の声援…B

雪音から声援を受けると有頂天になる。

筋力、耐久、敏捷が少しUPする。

・心眼（偽）…C

親父との鍛錬で身に付いた、危険回避能力。

普段は発動せず、マジでヤバイ時だけ発動する。

・勇猛…B

雪音のことを考えることによって、相手の精神干渉を無効化する。

しかし幻惑などの内容によっては、無効化できないこともある。

『デバイス』

・シュタールクラング（愛称…クラン）
人格型アームドデバイス。

性格は天真爛漫。戦いが熱くなると戦闘狂になり、偶にマスターの命令を無視する。

待機状態は、杭を模ったネックレス。

初期武装であるゲシュヴィントフォルムは、リースさんのような軽装に身を包んでいる。

これは高速戦闘が目的のフォルム。

それでもう1つのフォルム、ランメフォルム。

パイルバンカーが追加と、先ほどの軽装に甲冑などを追加した、重装備になっている。

これはパイルバンカーの衝撃を緩和するための装備。

しかも背中には、空を飛ぶためのエナジーウイングが装備されている。

こちらのフォルムは、空中戦闘& a m p; 男の浪漫のためのフォルム。

パイルバンカーを撃つためのリボルバーカートリッジシステムには、6発の術式カートリッジを装弾できる。

左手の籠手には4発のカートリッジが装弾可能。

肘近くには装弾用のスライド。

手首の近くには排出用のスライドがついている。

使用後の廃熱処理は、手の甲にあるいくつかの孔で行っている。

『宝具』

ステイアシュラク

・城門崩しの銀の杭

ランメフォルム状態で使用可能。

術式カートリッジを一発使用して、打ち込むパイルバンカー。

物理的には最強ランクの攻撃。

喰らったら、絶対立ってられない。

後ろの穴に打ち込まれたら、痔ではすまない代物。

基本、防御抜きや物体破壊に使用される。

ランク…A+

種別…対人宝具

レンジ…0・50～1

最大捕捉…1人

・シユテルンデーデン
星壊しの災い

オールカートリッジロードをして使用する、パイルバンカー6連射。
人が喰らったら、おそらく即死決定。

尻に喰らったら穴が6つ増える。

冗談抜きに危ないので、本人は今のところ封印している。

ランク…EX

種別…対人宝具

レンジ…0・50～1

最大捕捉…1人

『音耶の印象は？』

「ロリコンでシスコンの変態ね」～燃える人～

「妹思いでいい人だよ？ちょっとやり過ぎだけど」～運命さん～

「口が悪い変人やな。まあ、ノリはええ奴や」～狸（雌）さん～

「何考えてるのか良くわからないの」～白い魔王さん～


~~~~~

CLASS 戦闘支援型スナイパー

真名 海堂海斗

性別 男

属性 秩序・善

『能力値』

筋力…D 魔力…A

耐久…A+ 幸運…E

敏捷…C 宝具…EX

『詳細』

姉持ちの中学2年生。

転生者の1人である。

転生特典として結界魔導師の才と、可哀想な能力をもらった。

管理局に入局しており、局員歴はなのは達より上。

階級は三等空尉であり、首都航空隊に所属している。

魔導師ランクはS-

茶髪に茶目の日本人。

生まれはミッドだが両親は日本人のため、名前は純日本製。

いじられる対象だが、友達や家族を凄く大事に思う性格をしている。

特徴は変な言葉遣いをする。

魔法体系はミッド式で、魔力光は土色。

結界魔導師として登録されているが、戦闘も難なくこなす。

主にアウトレンジかロングレンジからの援護射撃と、味方の補助や敵の妨害を行う。

接近戦も一応できるが、あまり得意ではない。

音耶と思考が似ていて、魔法は感覚で覚えるものと思っている。

原作知識は持っていない。

なので転生者が誰かもわからない。

### 『保有スキル』

#### ・気配遮断…B

その名のとおり、気配を絶つ技術。

スナイパーとして行動するため、身につけたスキル

#### ・並列思考…B

これにより、射撃と補助を同時に行える。

#### ・仕切り直し…C

不利な状況になった場合、戦闘から離脱して、戦闘を初期状態に戻すことができる。

#### ・美女・美少女センサー…A

美人のお姉さんや美少女が近くにいと、自動で反応するセンサー。

#### ・集中…A

気を沈めて集中することによって、集中力を格段にあげる。

ランクがAまでになると、周りのことが見えなくなるくらい集中できる。

## 『デバイス』

・カラミティヒンメル（愛称…カラミティ）

インテリジェントデバイス。待機状態は黒い腕輪。

世話焼きの母親のような性格。

モードはスナイプモードの1種類。

深緑色の裾の短いジャケットに、黒いインナー。

同じく深緑色のズボンに軍用ブーツ。

インナーは所々黒く装飾されている。

簡単に言えば、軍人のようなバリアジャケット。

狙撃銃は黒一色。

銃口が長く、相当飛距離がある代物だ。

8連装オートマチック型カートリッジシステムを搭載。

戦闘時は5つのマガジンを腰のポーチに入れている。

## 『宝具』

・挑発せし愚者の笑み  
ニコゴッ ナデゴッ

微笑む、または相手を撫でることによって発動する宝具。

この宝具にかかった者は理性を失い、ただ使用者を殴ることしかできなくなる。

対象は女性限定の宝具。

ランク…EX（数値化不可能）

種別…対人宝具

レンジ…0～視界に入るまで。

最大捕捉…意識して人数だけ。

『海斗君の印象は?』

「…虫の…おじちゃん」くこの小説のマスコットキャラく

「バカコンビの片割れね」くハーフウーマンく

「魔法戦では、相当厄介な相手だ」く脱・ニート侍く

「結構やさしい子よ」くマル子く

くくくくくくくくくくく

CLASS 超万能型セイバー

真名 クレス・レオンフォード

性別 男

属性 中立・悪

『能力値』

筋力…B+ 魔力…EX

耐久…A++ 幸運…B

敏捷…A+ 宝具…EX

『詳細』

両親はミッド在住の中学2年生。

俗に言うチート転生者。

長い金髪を後ろで束ねていて、赤と青のオッドアイをしている。

見た目はテライケメン。

神からの特典は『超イケメンで転生』『最強の魔力』『魔法と武術の才能』『最強のデバイス』『高町恭也と同じくらいの身体能力』以上。

ミッドでは最強の魔導師として君臨している。

階級は一等空尉。魔導師ランクはSSS+。

海斗と同じく、首都航空隊に所属している。

魔法体系は、ベルカ式主体のミッド混合オリジナル魔法体系。

魔力光は青。

自分はオリ主と思っている。

しかしハーレムは狙わず、なのは一筋。

海斗が転生者だと気づいているが、障害にならなそうなので放置。

音耶が転生者だと勘付き始める。

魔法に関しては万能であり、主に剣術主体で戦う。

ちなみに前世の名前は、多田ひさし。

### 『保有スキル』

#### ・ 単身先攻…A

かなりの突破力を持っており、単身で多の敵に突っ込むことができる。

#### ・ 武の才…A

あらゆる武術を最短で自分のものとする。

#### ・ 想像…B

想像力に溢れており、あらゆるオリジナル魔法を思いつく。

・慢心…A

自分が最強だと思い込み、相手に隙を与えてしまう。

### 『デバイス』

・レオンハート

非人格型アームドデバイス。

かなり高性能なデバイスで、神からの特典の1つである。

待機状態は青い宝石のネックレス。

簡単に言えば、レイハさんの色違い。

元々の魔力が高いので、カートリッジは搭載していない。

バリアジャケットは、アーチャーのような姿であるが、あそこまでピチピチではない。

色は赤い部分を白にした感じ。

モードは現在は3種類ある。

1. エクスカリバーモード

ぶっちゃけFateのエクスカリバー。

鞘は自動で動くビットになっている。

2. ツインブレードモード

剣が真ん中で2つに別れ、2刀になる。

白銀の双刀。以上。

3. ガンモード

双剣が折れて、双銃になる。

主にミドルレンジ、ロングレンジで使用。

### 『宝具』

アンリミテッドブレイドワークス

・固有結界

大規模空間干涉魔法。アーチャーのパクリ。  
指定した空間を剣の丘にする魔法。

しかし本人は剣を複製できないため、ある意味気分を盛り上げるための魔法。

ランク…A+

種別…空間干涉魔法

レンジ…指定範囲内

最大捕捉…指定した人数だけ

・約束された勝利の剣  
エクスカリバー

今度はセイバーのパクリ技。

ただ威力は桁違い。SRBの5倍は威力がある。

ちなみに使用時の台詞は「もう……終わりにしよう」

剣を振りかぶって「エクス……カリバー……！！！！！！」  
で、最後に「……終幕だ」

剣を鞘に戻す。

以上の台詞は闇の書との最終決戦での様子です。

ランク…EX

種別…対城宝具

レンジ…50～200

最大捕捉…1000人

『クレスの印象』

「イケメンです」→学校の女子代表→

「最強ですね。あの人に勝てる人はいないと思います」→管理局員代表→

「あいつ、猫被ってるで」  
　　（狸代表）

「私以外は眼中にないって感じがするの」  
 〽魔族代表〽

[illegible]

# CLASS 翻弄戦鬪型セイバー

真名 西野紫音

性別  
男

属性  
中立・善

『能力値』

筋力 .. C  
魔力 .. B

耐久..C  
幸運..C

敏捷 .. B  
宝具 .. A

## 『詳細』

西野家の次男で小学5年生。

黄色の瞳をした黒髪の坊主少年。

筋トレが趣味で、毎日筋トレづくし。

打倒最強のために日々奮闘中である。

熱血漢な性格をしており、年上のお姉さん好き。



勉強と父親が大の苦手である。

魔法体系は、ミッド式をベースにベルカ式をエミュレートして再現した魔法体系。俗に言う近代ベルカ式。

魔力光は赤。

魔力資質は平均的なもので、特に不得意というものはない。

主にクロス、ミドルレンジでの戦闘を行う。

将来は武装隊志望。

### 『保有スキル』

・ど根性…A

いくらダメージを喰らおうとも、動けなくなるまでは戦闘を続行させる。

・心眼（偽）…B

直感・第六感による危険回避。天性の才能である危険予知。視覚妨害による補正への耐性も併せ持つ。

・ポジティブ…A

逆境・過酷な状況でも、常に前向きでいられる。

主に味方の士気が上がる。

### 『デバイス』

現在は母親作のストレージデバイス。

名前は無い。

待機状態は赤いブレスレットになっている。

赤い片手剣型デバイスであり、バリアジャケットは武芸者のような姿。

バリアジャケットの参考としては、Fate／EXTRAのアサシ

ン。

デバイスはカッタラスのような形状をしている。

シグナムと同じように、刀身の付け根にカートリッジシステムを搭載。

刀身の腹に装弾するためのスライドがあり、後柄に排出用ダクトが付いている。

装弾数は3発。

## 『宝具』

・空を駆ける少年（別名・空駆け）

魔力を消費し、意識した空間を硬質化できるレアスキル。

言わば見えない壁、足場を作るようなもの。

主に空中での足場に使用する。

これによって空戦でも陸のような動きができる。

魔力消費が少なく使い勝手がいい能力で、即席壁ジャンプなども可能。

しかし耐久性は低いので、防御などには使えない。

一度に複数の硬質化はできず、硬質化できる範囲も1mほど。

簡単に言えば、不可視の1m正方形ブロックを作っているような感じ。

発動条件は、自身の魔力と身体が触れている空間なので、戦闘中は常に足に魔力を帯びさせている。

イメージが大切なので、常に自分の足元は地面だとイメージしている。

ランク…A

種別…空間作用系宝具

レンジ…自分の体が触れている空間

最大硬質化可能数…1

『紫音を一言で表すと』

「栗」ゝ兄ゝ

「熱血だな」ゝボイン侍ゝ

「筋トレバカ」ゝ担任ゝ

「：頑張り屋」ゝ姉ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

CLASS 多術戦闘型アーチャー

真名 西野雪音

性別 女

属性 秩序・善

『能力値』

筋力…E 魔力…A++

耐久…B 幸運…B

俊敏…D 宝具…B

## 『詳細』

西野家長女で小学6年生。

黄色い瞳をしたツインテールの少女。

照れ屋で口数が少なく、頑張り屋な心優しい少女。

背が伸びないのがコンプレックスであり、チンクと出会って同属意識を感じた。

本作のマスコットキャラクター。

なのはよりも魔力が高く、魔法の才能も相当なもの。

ぶっちゃけ主人公より強くなる可能性大。

現在は多くの魔力変換を学習中。

弓の腕も光るものがあり、弓と多種多様な魔力変換を使った戦闘スタイルを目指している。

ただ、接近戦は大の苦手である。

こちらも将来は管理局に入局するつもり。

魔力体系はミッド式。

魔力光は灰桜。

## 『保有スキル』

### ・学習…A

物覚えがかなり良く、次々と勉学の内容を吸収していく。  
Aランクまでになると、応用力も相当のもの。

### ・努力屋…B

惜しまず努力を続けることができる。  
学習能力のスピードも速くなる。

### ・集中…A

気を落ち着かせ、ものごとに集中力を上げる技能。  
ランクAまでになると、周りのことは一切見えなくなる。

・状況判断…B

周囲の状況を冷静に判断するスキル。  
ランクが高いほど、状況に適した行動ができる。

・音耶殺し

音耶を悶死させるスキル。  
天然だからたちが悪い。

・音耶召喚

音耶を呼ぶことで、音耶をその場に駆けつけさせるスキル。  
有効範囲は1km。

『デバイス』

弓型ストレージデバイス。

待機状態は桜色の宝石。

白をベースに青で装飾された弓型デバイス。

アーチェリーほどの大きさで、弓の右下部についたスライドに3発のカートリッジを装弾できる。

弓の左下部には排出用のスライドがついている。

両スライドの下には、廃熱処理のための噴出孔がついている。

現在は模擬戦は行わず、魔法の学習に力をいれているためバリアジヤケットは不明。

『宝具』

・魔力波長操作

自身の魔力波長を操作するレアスキル。

個人の魔力波長によってそれぞれ魔力光が異なるので、自身の魔力波長を調整すると魔力光の色も変化する。

別名、魔力光デコレーション。

戦闘では大した意味を持たない。

ランク…B

種別…体内操作系宝具

レンジ…――

調整幅…測定不可能

### 『雪音の印象』

「優しくて可愛くて一緒にいたら和めて飯を食べる姿が可愛くて寝顔がキュートで結構がn(r y)」」シスコン」

「影で努力するタイプだ」」ニコ中」

「わんっ」」顔がキリッとしてる犬」

「勉強もできるし弓道だったか？それもかなりの腕前だ。なにより可愛いし照れる姿がk(r y)」」百合予備軍」

」」」」」」」」」」」

CLASS 成長型ストーン

真名 久保田

性別 石？  
属性 ???

『能力値』

愛らしさ…A      抱き心地…D  
耐久…A      幸運…むしろ呼んでくれそう  
成長速度…A      テカリ度…A+

『詳細』

音耶が怪しげな露天商から買った虹色の石。  
正式名称はラブリーストーン。  
愛称は久保田。

持ち主の愛情で育つ。というのがキャッチフレーズ。  
音耶のBIGに育て上げるという願いが叶ったのか、日に日に文字  
通りBIGになっていく久保田。  
現在は雪音が昔使っていたおもちゃであった、結構な大きさのシル  
バ○アフアミリーの家に住んでいる。

『保有スキル』

・珍品…A  
珍しいものなので人の興味を引く

・成長…A  
成長速度が速い。

・ポーカーフェイス…EX

表情が物凄く硬い。石だけに。

『久保田について』

「俺の子だ」く久保田の父く

「あれ、絶対呪いの石なの」くリリカルマジカルさんく

「最近の石って育つんだな」く久保田の叔父く

「光が反射して偶にウザいわぁ」くこれでも一家の大黒柱く

くくくくくくくく

その他のオリキャラステータス

『カイ・リルウィーゼ・西野』（スーパーサイヤ人化）

筋力… A (A++) 魔力… A (A+)

耐久… A (A++) 幸運… C (B)

敏捷… B (EX) 宝具… B (A+)

『西野夏音』

筋力… D 魔力… A

耐久… A 幸運… B

敏捷… C 宝具… A+



『海堂茜』

|    |    |   |    |    |   |
|----|----|---|----|----|---|
| 筋力 | .. | C | 魔力 | .. | B |
| 耐久 | .. | B | 幸運 | .. | C |
| 敏捷 | .. | A | 宝具 | .. | A |

以上で、オリキャラ設定終了です。

## オリキャラ設定（後書き）

今のところこんな感じですね。

ちなみに能力値は、戦闘とは大して関係ありません。  
戦闘になると話が別ですから。

あと、最後に出てきたオリキャラは海斗の姉です。

それとF a t eの宝具っぽい名前を考えてる最中は、何故か鳥肌M  
A Xでした。

では、次回から本編へ戻ります ノシ

**第19話 予定を決めよう。マジでストーカーだろ？（前書き）**

どうも、二足歩行犬です。

今回は特に何も無いので、本編へどうぞ。

## 第19話 予定を決めよう。マジでストーカーだろ？

7月20日。

本日は1学期最後の登校日だ。

体育館で長ったらしい終業式に参加し、成績表と宿題を貰って午前中に解散。

そして俺達は1学期の学校生活を終え、夏休みへと入る。

とりあえず何事もなく終業式&amp;mp;HRは終了した。

強いて言うなら成績表を渡された時の、クラスメートの表情が面白かった。

俺？

成績はオール3だったぞ。

なんでもテストの成績はいいけど、授業態度が最悪らしい。

そんなこんなで現在は放課後。

俺達は夏休みに遊ぶ予定を立てるために、日本最後の砦・翠屋へと来ていた。

メンバーはいつもの7人。

窓側の2席を確保して、男と女で別れる。

注文した食事を取りながら、夏休みについて話し合う。

「で、みんな行きたい場所とかある？」

「夏っていったら海やないか？」

アリスの問いに、はやてが素早く答えた。  
海か。

なんともまあ平凡な答えに俺はガッカリだ。  
もっとこう：刺激がある場所を所望する。

「うん。いいんじゃないかな、海」

「でも毎年行ってるのじゃ」

「そうだね。偶には違う場所も行ってみたいの」

「俺はバミューダトライアングルに行きたい」

「1人で行ってなさい」

俺の意見はアリサにはっさり切り捨てられた。  
なんてひどい奴だ。

きつと面白いと思うのに。バミューダトライアングル。  
略してバミューグル。

「ワシはアマゾンに行ってみたいのじゃ」

「え？お前アマゾン行った事ねえの？」

「音耶君は行った事あるん？」

「おう。結構行ってるぞ」

「音耶君アマゾンに行った事あるの！？」

「ああ。週1くらいで行ってるぞ」

「え？でもアマゾンって遠いよね？日帰りなんてできるの？」

「は？アマゾンくらい直ぐに行けるだろ。お気に入りに入れとけば

ワンクリックで行けるぞ」

「そっちのアマゾンね。どうせそんなことだろうと思ったわ」

呆れた表情で突っ込むアリサ。

お前はどっちのアマゾンだと思ったんだ？

アマゾンといったら大手の通販だろ。

「なのは。音耶は何を言ってるの？」

「さあ？わたしもわからないの」

魔王と使い魔の犬はわかってないようだ。

さすが魔族。

現代の知識には疎いわけか。

「通販サイトのことだよ、2人とも。結構品揃えがよくてわたしも良く使ってるよ」

「へー。すずかも使ってるなんて意外ね。どんなもの買ってるのよ？」

「それは同じどうッ小物とかっ！」

慌てた様子で言い直す、すずか。

おーけー。俺はわかってるよ。

おめでとう、すずか。

俺の中でのお前の人物像は、今をもって砂山のごとく崩れ始めた。腐女子乙。

「で、話が逸れてるようだが？」

「話を脱線させた原因がそれを言う？」

やれやれと額に手を置くアリサ。

なんか俺のせいになってね？

まあ、いいけど。

俺はミートソースを食いながらそんなことを思った。

「出かける場所やね。山とかはどうやろか？」

はやての一言で全員話題を戻す。

ふむ、山か。

富士山行きてえな。

「山か：バーベキューとかしたいかも」

「テント張ってキャンプをしたいの！」

「ワシは釣りがしたいのじゃ」

「川でも遊びたいな」

「俺は秘湯を探し出したい」

「近くに川が流れてて、キャンプが出来そうな場所ね。よし、今年  
は山に行くわよ！！」

「」「」「おお」「」

どうやら山に決定したようだ。

雪音は喜んでくれるかな？

紫音は山で修行とかしそうだな。

ひとまず出かける場所は決定したので、後は思いのままに雑談。

そんな時、事件は起こった。

全てははやての一言から始まる。

「そういえばウチのクラスの山辺君が、隣のクラスの子と付き合うことになったらしいで」

はやてが言い出したのは、学生間でよくある情報。

しかし彼女らは思春期。

その言葉への食いつきが凄かった。

「へー、そうなんだ。そういえば伊藤さんも宮下君と付き合ってるよね？」

「クラスでよく一緒にいる2人？」

「そうそう。クラスでイチャつく2人よ」

「あれは目の毒やな」

「でも、ちょっと羨ましいの」

「へー、なのはは彼氏が欲しいんだ？（ニヤニヤ）」

「ち、違うよ！？ちょっと、羨ましいと思っただけで…」



にやけながら追求するアリサと、うろたえる魔王。

よく見れば周りの女達も、なのはの言葉に興味津々のようだ。

俺と海斗は話の輪に入らず、2人でミートソースを食いながら眺めていた。

「音耶、アレが恋バナというやつじゃな」

「ああ、思春期女子にはうってつけの話題だ。関わりたくない度MAX」

「ふーん、音耶はそういう話興味ないんか？」

「ない。何が面白いのかまったくわからん」

「ワシは結構興味あるのじゃ。音耶は告白されたことないんか？」

お前も敵か。

しかし告白ね。

ふむ、アレは告白と言っていいのだろうか。

「なんや、そっちも面白そうな話しとるやないか」

「音耶君、告白されたことあるの？」

「くそ。こっちにまで被害が拡大しやがった。どうしてくれんだ、虫」

女子軍団が、こっちの話題に介入してきた。

マジでめんどい。

しかもなんか全員の眼差しに、期待の色が見える。

俺に逃げ道はないようだ。

「答える義務はない。つうか、聞く前にそっちが言えや」

「言ったら答えてくれるんか？」

「いいだろう。ほれ、素直に告られたことなんてありませんって言え」

「あるで。告白されたこと」

マジか。

あ…そういえばこいつら、聖祥美少女軍団とか呼ばれてたな。俺には半おばさん軍団にしか見えないが。

「ほら私も言ったんやから、さっさと答えてな」

「……わかったよ。告られたというより、変態にストーカーされてる」

全員絶句した。  
なぜだ。

「ストーカーって……」

「アンタ、嘘ついてんじゃないわよ」

「本当だって」

全員信じていないようで、俺を責め立てる。

と、俺の携帯がメールを知らせる着信音を発した。  
隣であーだこーだ言う連中をスルーしながら、携帯を開く。  
差出人は……

「噂をすればなんとやらだな……」

「どうかしたの？」

「さっき言った変態からメールがきた」

「え？ ちょっと見せてくれへん？」

「おう」

俺は全員に見えるように携帯を前に出す。  
なんか全員身を乗り出して、携帯を食いつくように見る。  
隣にいたはやてが文面を読み始めた。

「なにになに……おはよう少年。今日で1学期も終わりだな。充実した学校生活は送れたかい？ 私は退屈な学校生活だったよ……なんや、普通のメールやないか」

「ばかやろう。続き見ろ」

「えーっと……しかしあれだな。少年はいつ見てもお姉さん好みだ。その面倒そうな眼差し。雪音君以外に興味を持たない姿勢。是非とお姉さんにも振り向いて欲しいものだ。いや、必ず振り向かせてみせるよ……惚気かッ！！なんや自慢か！？」

「本当に自慢にしか見えないわね」

「というか、アツアツじゃな」

「びっくりなの」

「音耶のこと好きな人いたんだ…」

「意外だよね」

文面を読んだ狸が騒ぎだす。

他の奴らも言いたいことを言いまくる。

まあ、ここまでだったらただの一途な女の子だよな。  
しかしこの人はこんなもんじゃない。

「まあ落ち着け。この人の本領発揮はここからだ」

「また惚気だったら殴るで…『今日は友人と一緒にのようだね。最近少年の周りには友人が良くいるようだから、外で少年に声をかけられなくて困ってるよ。しかしミートソースを食べる少年も中々いいな。今日のおかずにしてもらうよ。お姉さんの夜の姿はすごいぞ？少年にも是非見て欲しい。そしてお姉さんを滅茶苦茶にして欲しいものだ。ああ…、想像しただけで逝きそうだよ。では、またメールするよ。お姉さんはいつも少年を見ているからな』……なんや、これ……」

「ストーカーだろ？」

「け、警察に電話しなくちゃ!!」

「お、落ち着いてフェイトちゃん!!」

「これは……犯罪の香りがするわね……」

「というか、なんで音耶がミートソース食べてるの知っとるんじや？」

「それは、おそらく見ていたのだろ」

俺は貼り付けされていた画像を開いて、全員に見せる。

画像は至近距離から撮った、窓越しの俺。

ちょうどミートソースを食べる瞬間の画像だった。

見せた瞬間、全員が窓に向いて振り向く。

「「「「………」」」」」

そこには、誰もいなかった。

「怖すぎるわッ!？」

「ワシ画像見た瞬間、ちびりそうになったのじゃ……」

「ふえ、フェイトちゃん……こわいよ……」

「なのは……私も怖い……」

「お、音耶君……」

「というか、なんでアンタはそんな平然としてられるのよ!??」

「いや、もう慣れたし」

2年ストーカーされてたら、さすがに慣れるぞ？  
こんなの日常茶飯事だし。

しかし何故そんなに怖がるかな。

「で、ストーカーの正体って誰なん？」

「3年の夕坂先輩。お前らも知ってるだろ？」

「え！？あの夕坂先輩！？」

「ああ。才色兼備、文武両道、容姿端麗、頭脳明晰の夕坂先輩」

「そんな学校の有名人がストーカーだったんか！？」

「え、でも、わたしの知ってる夕坂先輩はお淑やかな人だよ？」

「うん。私も聞いた事ある。凄くお嬢様みたいな人だって」

「ファンクラブもあるのじゃ。男女どちらにも人気の美人じゃな」

「あれね。あの人猫被ってんだよ」

学校ではお淑やかな完璧少女を演じているが、実態はただの変態女  
だし。

一人称も学校とプライベートは違うしな。

「でも、なんで音耶君はそんな人にストーカーされてるの？」

「まあ、色々あったんだよ」

「ふうん、色々ねえ」

おい、なんだその目は。

お前らもなんだ、人を疑うような眼をして。

俺は何もしてないぞ？

ただあの人がストーカーしてくるだけだ。

言わば俺は被害者。

「さて、この話はこれで終わり。他の話をしよう」

「だめよ。詳しく聞かせなさい」

「わたしも聞きたいな」

「そうやね。ここまできたら全部話してもらわんと」

なぜだ。

その後は追及されまくったが、なんとか話を逸らせた。  
そして長々雑談していたら外には夕焼けが射しており、俺達は解散となった。

帰り道。

俺は帰る方向が一緒なはやてと、住宅街を歩いていた。

「しかし、夕坂先輩がストーカーだったなんて驚いたわ」

「まだ言っただのんか。おま……なんじゃありゃ……」

「うん？　どないし……なんやねん、あれ……」

俺達の視線の先には、道の端っことでイスに座るクマ。

いや、クマの着ぐるみきた変な人。

クマは短い足を器用に組みながら、こちらをガン見している。

「はやて、ここはスルーだ。おk？」

「おーけー。見なかったことにするんやな」

俺とはやての意見は一致した。

俺は上を向きながら、はやては口笛を吹きながらクマの前を通過する。

よし、ミッションコン「そこのお2人。ちょいっと待たれい」無理だった。



「お前があからさまに口笛なんか吹いて、無視するから捕まっただろ」

「上を向いて歩く奴に言われとうないわ!」

俺達は文句を言い合いながら、仕方なくクマの下へと歩いていく。目の前に座るクマは、むかつくほどのアホ面だった。と、クマの中から年寄りの爺さんの声が聞こえてくる。

「わしは占い師じゃ。どうじゃ?ひとつ占わせてくれんか?」

「別にいいけどよ。俺はそんなことよりアンタの格好の方が気になるんだが」

「インパクトは大事じゃろ?」

「ああ、把握」

「では、ちょっと占わせてもらうぞ」

クマは両手を前に突き出すと、「はああああ…ほっ」と、意味のわからない掛け声を発し始めた。

俺は「は?」って感じになり、はやては顔が死んでる。

数秒後、クマは両手を下ろして溜息をつき、予想外の言葉を発した。

「おめでとう。女の子じゃ」

「「は?」」

「元氣な白髪の女の子が産まれるぞい」

「お前は何を言っている」

「言葉通りの意味じゃ」

「つまり女の子が産まれると？良かったな、はやて。お前は中学生で母親になるらしいぞ」

「私は子供なんか作った覚えあらへんわ!!」

はやては顔を真っ赤にしながら、俺を睨んでくる。  
俺じゃなくて、クマに切れろよ。

「ふむ。勘違いしてるようじゃが、その女子の子ではないぞ？」

「あ？じゃあ、誰の子だよ？」

「お主の子じゃ」

そういつて俺を指差すクマ。

は？俺の子？

何言ってるんだこいつ。

俺の子は久保田だけだ。

「アンタ、まさか…」

「勘違いしてるようだが、絶対違うからな」

はやては汚らしい物を見るかのごとく、俺を見ている。  
そんな目で見ないでしろ。

「冗談はこのくらいにしてくれ。俺は占いの結果が聞きたいんだけど」

「冗談じゃないんじゃないけどな。まあ、いいじゃろ」

クマは再度両手を前に出す。

そして、また意味がわからない「はああああ…ほっ」という掛け声を出す。

一通り終わると、クマははやてを指差す。

「まずはお主じゃ」

「ん？ええで」

「お主は過去に辛いことがあったようじゃな。しかし今はそれを乗り越え、充実した生活を送っているようじゃの。そして、いつかお主には夢が出来る。大変な道のりになると思うが、諦めずに目指せば、きっと夢は叶うじゃろ」

クマの言葉に、一瞬はやての表情が固くなった気がした。

過去に辛いことか…。

たぶん闇の書のことだな。

「ふーん。わかったわ。夢が出来たら諦めなければええんやな」

「そうじゃ。よし、次はお主じゃ」

そう言って、俺を指差すクマ。

なんかクマに指差されるとムカつくな。

「お主には近々、辛いことがあるじゃろう。喜びと引き換えに凄く辛い目に合う。これは…お主の大切な者に関係してるようじゃな。後、お主の生活はこの年で大きく変わると出ている。いや、周りの環境が変わると言ったほうがいいじゃろう。とりあえず、がんばれ」

「変わるねえ…」

そんな簡単に変わるもんかね。

それよりも大切な者って言うのが気になるな。  
ま、どうせ占いだから信じなくていいだろ。

「ま、とりあえず参考にはしとくよ。いくらだ？」

「料金はいらんよ。ある意味趣味でやってるようなもんじゃからな」

「へー、そらおおきに」

「だな。そんじゃ、長生きしろよクマ」

「うむ。あと20年は生きるつもりじゃ」

俺はクマに別れを告げ、帰路についた。

この数日後、クマの占いが本当に当たるとは、今はまだ思ってもいなかった。



## 第20話 進化。マジで怖いんですけど（前書き）

ども、二足歩行犬です。

今回はギャグが少なめかな？

では、本編へどうぞ。

## 第20話 進化。マジで怖いんですけど

夏休みに入り数日がたった。

俺は特に夏休みの予定もないので、紫音の修行に付き合ったり、雪音と遊んだり、久保田の世話をしたりして夏休みを過ごしていた。そんなある日の朝。

起床してベットから降りると、俺は違和感を感じた。

部屋の中に何かの気配がする。

しかし部屋を見渡しても誰もいない。

俺は不思議に思いながらも気のせいだと自分に言い聞かせ、朝の日課である久保田磨きを始めようとした。

「おはよう久保田。良く寝れたか？」

ベットの横で毛布を被っている久保田。

最近の久保田は全長1mほどの大きさになった。

しかし重さは何故か雪音の体重ほどの重さである。

マジで石なのか？

そう思う今日この頃。

俺は久保田に被せてある毛布を取り、机の上に置いてあるタオルを手取る。

姿を見せた久保田は、何時にも増して輝いていた。

「今日も輝いてるぜ、久保田」

俺は久保田を磨くために、その輝く表面に触れる。その時。

俺は何か違和感を感じた。

——トクン、トクン——

「おいおい、まさか…」

俺は久保田の表面に耳を当てる。

耳を伝って聞こえてくるのは、微かにだが、確かに脈を打つ音だった。

「そうか。気配の正体はお前だったか、久保田」

俺は驚きながらも、納得を得る。

とうとう久保田にも命が宿ったようだ。

愛の力はすげえな。

と、俺が久保田の変化に感動していると、頭の中に念話のような女性の声が聞こえてきた。

<おはようございます。音耶さん>

「ッ！？誰かいるのか？」

部屋を見渡すが誰もいない。

おいおい、幽霊とかマジで勘弁してくれよ。

と、再び俺の頭に女性の声が響く。

<私はここですよ。貴方の前です>

俺の前？

俺の前には久保田しか……まさか…。



「お前……久保田、なのか？」

<はい。初めまして…ではおかしいですね。私は貴方と共に居たのですから>

マジか。

命を得たと思ったら、話せるようになったのか。  
なんというか、感無量だ。

「ああ。こういう時はあれだ。改めてよろしく、久保田」

<……あまり驚いてはいないようですね？>

「驚く？ いや、違うな。俺は久保田には意思があると、ずっと思っていたからな」

<そうですか。やはり貴方は優しい人です>

久保田は囁くように言った。  
やめろよ、照れるじゃないか。  
しかし今日はめでたい日だ。  
そうだ。あいつらにも紹介してやろう。

「久保田。今日は出かけるぞ」

<？？どこにですか？>

「俺の友達のところだ。お前を紹介しにな」

<友達？ ああ、あの方達ですか>

なんだ、知ってるのか。

まあ、ずっと俺の傍にいたしな。

知ってても不思議じゃないだろう。

俺はあいつらに連絡を取り、今日会う約束をした。

さて、雪音と紫音にも紹介してやらないとな。

俺は胸を弾ませながら、久保田を抱きかかえてリビングへと向かった。

＼フェイトside＼

私は今自宅でのんびりしています。

自宅にいるのは私と、休暇を利用して帰ってきているクロノ。母さんはアルフを連れて買物に行ってしまった。

私も本当は音耶から連絡があって、遊びに行くつもりだった。

けど電話の内容をクロノが聞いていたらしくて、どうも音耶と会ってみたいと言いだした。

だから今日は私の家に集まることに。

なのは仕事で来なくて、アリサとすずかも用事があるらしい。だから今日は海斗とはやてが来る事になってる。

あつ。

あと、はやてがヴィータも連れてくるって言ってたっけ。

「フェイト、音耶って友達はどうな人物なんだ？」

「音耶？ うーん……みんなはロリコンでシスコンって言ってたよ？」

「なッ！？ そいつは大丈夫なのか！？」

「うん。危ない人ではないよ。ただ、ちょっと変わってるだけだから」

クロノはさっきからそわそわしていて、どうも落ち着いていない様子だ。

それにさっきから小さな声で私の名前とか、音耶の名前とか、殺すって不吉な独り言を言っている。

一体どうしたんだろ？

ピンポーン

ダッ！！

と、来客を告げるチャイムが響いた。

それと同時にクロノが玄関に向かって走りだす。

ど、どうしたんだろう？

私はソファーに座りながら、クロノの行動に啞然としていた。

しばらくしてリビングに、はやてと海斗とヴィータが姿を現す。  
その後ろにはクロノが頬を押さえたクロノが居た。

「フェイトちゃん、お邪魔するで〜」

「おっす」

「いや〜、フェイト嬢の家も久しぶりじゃな〜」

「いらっしゃい。それと、クロノはどうかしたの？」

頬を押さえて不機嫌な表情をしているクロノに聞く。

クロノは私を一度見ると、はやてを指差した。

差されたはやては、苦笑いしながら頬を掻く。

「いやな。クロノがいきなり凄い形相で玄関を開けてきたから、思わず殴ってしもたわ」

「すげえ気持ち悪い顔して出てきたしな」

「ワシも流石に驚いたのじゃ」

「だからって殴ることはないだろ…」

クロノはソファーにイスに座ろうとしながら呟く。

他の皆もソファーやイスに腰を下ろして、ゆっくりとする。

あとは音耶だけか。

早く来ないかな？

と、頬を押さえていたクロノが口を開いた。

「はやて。音耶って奴はロリコンでシスコンなのか？」

「ん？せやで。しかも重度のシスコンや」

「大丈夫なのか？そんなシスコンな奴と一緒に居て」

「アンタが言うなや」

「なっ！？僕はシスコンじゃない！！」

「はやて、シスコンって何？」

「妹が大好きな変態ってことやで、ヴィータ」

「ああ、だから音耶とクロノはシスコンなのか」

「だから僕はシスコンじゃない！！」

はやてとヴィータにからかわれているクロノ。

クロノっていつも誰かにからかわれるよね。

主にはやてにだけど。

ピンポーン

ダッ！！

そんなちよつと騒がしい時間も過ぎ、再び家のチャイムが鳴った。

クロノはまた走り出す。

みんな啞然としている。

私は二度目だから、ちょっと慣れたかな？  
と、玄関からなにか聞こえてきた。

ズゴンッ！！

なんの音だろう？

なんか凄い音がしたけど…。

side out

突然だが、俺は現在エレベータに乗っている。

理由はフェイトの家に行くためだ。

1度だけ行ったことがあるので、部屋の場所もわかっている。

ちなみに、両手には久保田を抱えている。

そういえば久保田のことを雪音達に報告すると、2人はあんまり驚いてはいなかった。

雪音は「…すごいね」と微笑み、紫音は「最近の、石って、すごいんだな！」と背筋をしながら答えた。

軽すぎて逆に俺が驚いた。

話は変わるが、久保田と話してわかったことがある。

まず、久保田は俺以外と話せないようだ。

正確には話を聞くことはできるが、話しかけることはできないらしい。

い。

ちなみに俺の念話は通じた。

そして2つ目。

久保田はどうやら大昔に別の世界で作られた、スーパーマシーンだったらしい。

で、作られてから今までの記憶を持っているとか、なんとか。

超高度文明が……なんだっけ？

やべ、忘れちった。

とにかく久保田は凄いらしい。

まあ、感情を持つ石なんてそうはいないだろうからな。

あいつらの驚く顔が目に見えかぶ。

<音耶さんは魔導師なんですよ？>

「ああ。なんで知ってるんだ？」

<デバイスを持っていたので、魔導師かと>

「なるほど。久保田の世界にも魔法あったのか？」

<はい。私自身魔法は使えませんが、知識はありますよ。数々の魔導師などを見てきたので>

「つまり魔法は使えないけど、多くの魔法の知識はあるってことか？」

<そうなりますね。私は見たものを記憶しているので>

「ほー、久保田は記憶力が自慢か」

くはい。一度見たものは忘れません>

そんな雑談を交わしていると、目的の階に着いたことを知らせる音が鳴る。

エレベーターから降りて、フェイト家の部屋まで歩く。

部屋の前に着くと、ドアの脇に設置されているチャイムへと手を伸ば……久保田を抱えているので無理だった。

とりあえずチャイムにヘディング。

ピンポーン

ダダダダッ!!

ガチャッ!!

「君が音耶kブハアツツ!!!」ズゴンツ!!

「あ…やべ」

チャイムを鳴らすと中から大きな足音が聞こえ、物凄い表情をした人が出てきた。

思わず鼻っ面にヘディングを決めてしまった。

俺の黄金の額をモロに喰らった青年は、鼻血ブーしながら仰向けに倒れていく。

こういう時はあの台詞か。

「またつまらぬものを頭突きしてしまった」

バタンツ

俺の言葉と共に、青年は白目を剥きながら床に倒れた。



「で、クロノは気絶している訳やな」

「クロノ？ ああ、この変な青年のことか」

放置しておくのも可哀想なので、とりあえず家に上がって報告した。  
海斗が回収しに行き、現在はソファで横になっている。

ちなみにここにいるのは俺を抜いて5人。

フェイトとはやてと海斗とヴィータ。

それに変な青年。

ヴィータが居るのは嬉しい展開だ。

俺は撫でるためにヴィータに近づくが、何故かヴィータは俺から逃げる。

しかも若干眼光が鋭い。

何故だ。

「音耶、その漬物石はなんじゃ？」

「漬物石とは失礼な。こいつは久保田だ」

「久保田？ …あれ？ 久保田ってもっと小さくなかったっけ？」

そう言って両手の指で丸を作るフェイト。

そういえばこいつらには話してなかったな。

「久保田は成長しました。しかも話せるようになったんだ」

「は？成長して話せる石やて？」

俺の言葉に全員が訝しげな視線を送ってくる。

信じてないな。

で、なんでヴィータは俺を睨む。

「私は騙されへんで。また何か細……え？」

突然はやては言いかけた言葉を中断し、驚くように目を見開いた。  
意味がわからんとです。

他の連中もいきなり黙り込む。  
なんか怖いお。

「いきなりどうしたんだよ？」

「「「……………」」」

俺の言葉に反応せずに、ただジッと久保田を見つめる4人。  
しかも全員表情が固い。

もう、なんかめっちゃホラー。

<音耶さん>

微妙に変な空気に耐え切れなそうだった時。

久保田が俺に話しかけてきた。

俺も念話で久保田に話かける。

<どうかしたか？>

<あの、もしかしてその方達は魔導師ですか？>

<くん？そうだけど、知らなかったのか？>

<私に魔力を感知する機能はないので…。それとこの方達が魔導師でしたら、少し厄介なことに…>

厄介なこと？

こいつらが魔導師だったらなにが厄介なんだ？

<私の中の微弱な魔力に気づいているかもしれませんが>

…：はい？

ちよつと待て、久保田って魔力持ってたの？

さっき魔法は使えないって…。

<魔法は使えませんが、魔力は中に一応持っています？>

<なんで疑問系なんだよ>

<どう説明したらいいものか…。とりあえず複雑な事情があるので  
す>

<でも俺は魔力なんて気づかなかったぞ？>

<意識しないとわからないレベルですから。おそらくあの中に、魔力感知に優れた方が居たのでしょう>

おーけー。

とりあえず、久保田が魔力を持っているということは分かった。こいつらが黙り込んだのは、おそらく念話で話していたということも分かった。

そしてこいつらが久保田の魔力に気づいたのも良くわかった。

結構ピンチな状況ってのも良くわかった。

さて、どうしょ。

「なあ、音耶君」

表情は笑っているけど目が笑ってないぜ、はやて。

はやては奇妙な表情で片手を前に出しながら、俺に近づいてくる。俺は思わず後ずさる。

「それ、もしかしたら危ないもんかも知れへんのや。ちょおっと、こっちに渡して貰へんか？」

「意味がわからんぞ。久保田は危険じゃない」

「私達には分かるんだ。それは危険な物だよ」

フェイトまで参戦しやがった。

俺は窓際に追い詰められながら、後ずさる。

これはマジで怖いお。

「さあ音耶。それを渡して」

「やだ」

「ほんまに危ないもんかも知れへんのや」

「だが断る」

どんだん窓に追い詰められていく。

そしてとうとう、背中に窓がぶつかる感じがした。

俺は横に移動しようとして身体をスライドさせると、また何かにぶつかった。

ゆっくりとぶつかったものを見る。

「さっさと寄越せよ」

ヴィータだった。

俺は即座に身体をスライドして元の位置に戻る。

3方向から迫る恐怖。

気分的にはライオンに追い詰められたウサギだ。

しかしこの恐怖の権化の中には海斗がない。

俺は海斗に助けを求めようと、海斗を瞬時に見る。

「……………」

眉を寄せて変な表情をしていた。

なるほど。

お前もかブルータス。

「さあ、堪忍してそれをこっちに渡しやあ」ジリジリ

「ごめんね、音耶」ジリジリ

「もう逃げられねえぞ」ジリジリ

絶・対・絶・命

続く!!

## 第20話 進化。マジで怖いんですけど（後書き）

久保田が進化した。

そしてシスコンクロノ君登場。

とりあえずここからは久保田ルート。

あと2話くらい続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0912z/>

---

魔法少女とかマジ笑える

2012年1月15日01時10分発行